

A. シルマー／W. ミツカ

「ドイツ語語彙論」

丑 田 弘 忍

序 論

§1. 語 の 研 究

「語の研究」(Wortforschung) と呼ばれるものは、言語史研究の一分野であり、一言語の語の由来と意味の発展——文献で遡り得る、ないし音韻法則などによって再構成される原初の状態から現在に至るまでの発展——を研究するものである。その場合、語の由来を文献によって実証されうる最古の形態以上に遡ってでも確定することと、他の言語の語との親族関係を解明することに重点を置くならば、それは語源学と呼ばわれる (Etymologie, dt. ist と同起源の gr. etymos <真実の> + gr. lógos <語>, légō <読む>)。物や概念が語によってどのように表示されるかを叙述するのは名称論である (Onomasiologie <gr. ónoma <名称>)。§ 3 参照。語義の発展と変遷を主に歴史的に実証される時代に限定して跡づけるときには、意味論という表現が使われる (Semasiologie <gr. rēma <記号>)。意味内容に関連した (inhaltsbezogen) 語の研究は語を意味構造 (Sinngefüge) の内部で評価する (§ 5)。

語の研究成果は古代末期以来アルファベット順に配列された辞書の形で提示されてきた。これは検索には便利であるが、全体の連関を理解するに概観しにくいものである。それゆえに近来は語研究の成果をそれに即した構成で提示する方法がしばしば取られてきた。すなわち、超歴史的・理論的構成 (意味上類似の語を配列した、いわゆる類語辞典) および最も頻繁に見受けられる、歴史的原理に則った語彙の記述である。

ドイツ語の語彙について叙述する本書もこの後者の構成法を基礎にし、これによって言語史的叙述が文化史的観察と結びつけられる。それは、語は決して単独に存在するものではなく、常に特定の事物表象 (Sachvortstellung) あるいは概念場 (Begriffsfeld) の存在と結びついているという考えから発している。本書の意図は文化発展と語彙変遷との関連を歴史的に跡づけようとするものである。ここでいう文化とは最も広い意味で捉えた人間の創造行為のあらゆる (観念・物質を素材とした) 表出形式、すなわち宗教、学問、芸術、法、政治、社会、経済、技術などを指すと理解していただきたい。本書は、新しい事物・現象の登場あるいは人間精神の新しい観照・活動形式の登場がどのように語彙に反映しているか——全く新しい語の創造、あるいはそれまで使われたことのない外来語の借用によるにせよ、また既存の語への新しい意味内容の付加によるにせよ——を示そうとするものである。

ところで、我々が直接体験していない過去の言語活動は、ただ偶然に残された文書によって断片的にしか復原できないので、語彙の変遷を完璧に確実に、時代ごとに検証することは必ずしも可能ではない。しかし、文化の発展と語彙の発展との間には著しい一致が生じる。「時代に応じて言葉が存在する。翻って、言葉に応じて時代が存在する」とは *Der Unartig Teutsche Sprachverderber* (1643) ——これは言語が民族共同体に対して行使する文化形成力をも強調する書物である——所収の命題であるがこれを本書のモットーとしよう。この意味で語彙論 (Wortkunde) は文化史の一分野である。

§2. 語の歴史について

「言語に基づいた文化史的研究」を O. Weise が *Die deutsche Sprache als Spiegel deutscher Kultur* (Jena, 1923) と *Wanderungen auf dem Gebiet der deutschen Sprachgeschichte und Wortbedeutung* (Jena, 1925) の中で行なっている。F. Seiler の *Entwicklung der deutschen Kultur im Spiegel des deutschen Lehnworts* (8 Bde:

1913-1924) は夥しい借用語と外来語をドイツ語にもたらした文化的影響を描き出している。F. Kluge の *Deutsche Sprachgeschichte* (Leipzig, 2. Aufl. 1925) は特に古い時代についての詳しい語彙発展に関する論述を含んでいる。同書は、近代以降についての同じ著者による論文 *Von Luther bis Lessing* (1918⁹) と *Wortforschung und Wortgeschichte* (Leipzig 1912) によって補われている。H. Hirt の *Etymologie der neuhochdeutschen Sprache* (1921, 1968) はドイツ語の語彙を言語史的な観点から描き出している。ドイツ語の語彙を印欧語・ゲルマン語の先史時代から今日に至るまで極めて包括的に叙述しているのは F. Maurer と F. Stroh 編集の数人の協同執筆による *Deutsche Wortgeschichte* である。これは1943年に Alfred Götze のための記念論文集として発刊された。1959年の第2版は部分的に改編され、最新の研究を反映している(全3巻)。第2版が1959年に出版された。ここに載せられた15篇の論文は夥しい基本的で先駆的な文献を挙げている。なお論文は次のような範囲を扱っている。印欧語の根源, ゲルマン時代, ドイツ初期, 前ドイツ語及び初期ドイツ語における借用造語, 宮廷騎士の時代, 中世末期, 中世末期までのドイツ語に及ぼしたロマンス語の影響, 人文主義の風潮, ルターと新高ドイツ語の文章語, バロック, 18世紀の語彙, 19世紀, 近代及び現代, ドイツ言語地理における部族と地域。これらの執筆者については本書の第9章以下で個々の時代を述べる際に挙げたい。

活版印刷以来のドイツ語文献の語彙を Jacob Grimm と Wilhelm Grimm の大規模なドイツ語辞典 *Deutsches Wörterbuch* (1854-1961) が収集しかつ整理している。グリム兄弟が扱わなかったDからZまでの項を代表的な語研究者たちが精力的に執筆してようやくこの語史に関する国家的事業は完結した。現在、最初の10巻の新版の編集が始められている。これは約11万の語幹を含んでおり、その結果、多かれ少なかれ偶然に生じた合成語を含めて新高ドイツ語の単語は50万語にもものぼっている。現代ドイツ語方言の語彙は方言辞典に集められている。そのような辞典としてはシュヴァーベン方言辞典 (H. Fischer), シュレースヴィヒーホルンシュタ

イン方言辞典 (O. Mensing), シュレージエン方言辞典 (Mitzka), ティ
ロル方言辞典 (Schatz, Finsterwalder) が最近出た。スイスドイツ語辞
典 (現在は Wanner), メクレンブルク方言辞典 (Teuchert), ヘッセン
ナッサウ方言辞典 (Luise Berthold), ライン方言辞典 (J. Müller,
Meiser), バーデン方言辞典 (F. Ochs), ニーダーザクセン方言辞典 (H.
Wesche), ジーベンビュルゲン¹ーザクセン方言辞典 (de Gruyter 社),
ルクセンブルク方言辞典 (Bruck, Hoffmann) の印刷は進捗している。
オーストリアにおけるバイエルン方言辞典 (E. Kranzmayer), ベルリ
ン²ブランデンブルク方言辞典 (Anneliese Bretschneider), 南ヘッセ
ン方言辞典 (Maurer, Stroh, Mulch), ファルツ方言辞典 (Christm-
ann, Krämer) の刊行が開始された。プロイセン方言辞典 (東西プロイ
セン, Riemann), ズデーテン地方ドイツ語方言辞典 (Beranek), バイ
エルン方言辞典 (Reiffenstein) の語彙の収集準備がなされている。ドイ
ツ語地域における1937年現在の方言辞典の一覧表が『方言研究誌』〈Zeit-
schrift für Mundartforschung 13, 91〉に載せられている。なおドイ
ツ語方言については Deutsche Philologie im Aufriß (hg. W. Stam-
mler) の中で W. Foerste と W. Mitzka が述べている。

グリム兄弟によって着手された大規模な『ドイツ語辞典』はドイツ言語
学の金字塔であるが、当初考えられていたような家庭用の字引とはならな
かった。家庭用を意図しているのは Alfred Götze による8巻本—最後
の4巻は W. Mitzka による Trübners Deutsches Wörterbuch (1936-
1957) である。これは、精選されたドイツ語語彙を、言語史、文化史上の
重要性を文献学的に確認された語の歴史の形で現示している。F. Kluge
の Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache は起源と印
欧語族内での親族関係を時には遠く隔った新旧原典、研究文献及び独自の
研究に基づいて提供している。1883年に初版が出、11—16版において A.
Götze により現代の文献学の最高水準に達した。最後の版は W. Mitzka
が改訂している。H. Paul の Deutsches Wörterbuch (1935年, K.
Euling による改訂, 第5版, 1956年以降) は A. Schirmer による,

1958年以降テュービンゲンは W. Betz による) では意味の発展に焦点が向けられている。原典と文献が挙がっていない『ドゥーデン語源, ドイツ語源辞典』は1963年 P. Grebe の指導の下にドゥーデン編集部によって出版された。K. P. Grebe, W. Müller の Duden, Vergleichendes Synonymwörterbuch, Sinnverwandte Wörter u. Wendungen, bearb., 更に Wehrle と Eggers の Dt. Wegweiser zum treffenden Ausdruck 1961は1795年の Heynatz の Versuch eines möglichst vollständigen synonymischen Wörterbuch 以降の文献を挙げている。

H. Schulz の Deutsches Fremdwörterbuch (1. Bd. A-K, Straßburg 1913, fortgesetzt von O. Basler, 2 Bd. I-P Berlin 1942) はドイツ語に存在する外来語を厳密な語彙史的な方法で調査し, 多くの文化史的な指摘を行っている。F. Dornseiff の Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen (Berlin, 6. Aufl. 1965) は語彙を項目別に整理して集めている。これは序論と詳細な文献表によっても重要な書である。G. Wahrig の一卷本 Das Große Deutsche Wörterbuch (Gütersloh 1966) は外来語, オーストリア, スイス並びに地方的な特質をも表わしている。

語の研究について, とりわけ個々の語の歴史については Jahresberichte über die Erscheinungen auf dem Gebiete der Germanischen Philologie 1879f. Bibliographie Linguistique 1939f. Germanistik 1960f. がその都度, 国内外の文献を挙げている。

語彙地理学 (Wortgeographie) に関しては Elli Siegel が L. E. Schmitt 編 Deutsche Wortforschung in europäischen Bezügen の第4巻で1962年までの図版をまとめている。年を追って数多く現れる地図のこの書誌の刊行はマールブルクのドイツ言語地図研究所で継続されている。1939年のドイツ語地域の単語地理を Deutscher Wortatlas (Bd. 1-4, W. Mitzka, Bd. 5f. L. E. Schmidt) が示している。同書には研究論文名も記載されている。これについては更に P. v. Polenz が Deutsche Wortforschung II の中の525頁——548頁で述べている。この

Deutsche Wortforschung シリーズは Untersuchungen zum deutschen Wortatlas の副題を持ち、1958年以来、地域の上で超国家的な観点から空間構造主義的にドイツ語の語を扱っている。ボヘミア—モラヴィア地方には、E. Schwarz, Sudetendeutscher Wortatlas I—III 1854—1858が挙げられる。スイス、ドイツ語の言語地図は R. Hotzenköcherle によって刊行されている。Mitzka の Wortgeographie u. Gesellschaft 1968 を挙げよう。そこに列挙された文献のうち一つを挙げれば G. de Smet の Alte Lexikographie und moderne Wortgeographie である。

§3. 語形と語義

L. Weisgerber は彼の諸著作、例えば Vom Weltbild der deutschen Sprache II 1953 の中で国語 (Nationalsprache) の意味構造における語の働きについての説を W. v. Humboldt に関連させている。現代ドイツ文法に関して、語から——語の構造と構成、内容と文内での機能、品詞から出発しているのは Johannes Erben の Abriß der deutschen Grammatik (Berlin 1966) と P. Grebe の Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache である。H. Gipper と Hans Schwarz の Bibliographisches Handbuch zur Sprachinhaltsforschung, Teil 1, alphabetisch nach Verfassern, 1961f. は批判的な態度を際立たせ、また母国語の中間層に着目してあらゆる言語を扱っている。これによって意味内容研究は表示論と意味論を越えようとしている。この圏内でその言葉に価するのは H. Brinkmann の方法論上、文体上明晰な叙述 Die deutsche Sprache, Gestalt und Leistung 1962である。

聴覚組織 (Hörgebilde) としての語は音響的には音に分解されうる。これは音声学 (Phonetik) の課題であり、音韻論 (Phonologie) によって導かれる。音韻論は音組織 (音素) の単位から話し言葉での音の対照的な機能の内にある語に至るまでの学問である (Braune-Mitzka, Althochdeutsche Grammatik 1967¹² § 8a, Paul-Mitzka, Mittelhochdeu-

tsche Grammatik 1966¹⁹ § 11参照)。語は文法的には(少なくとも印欧語においては)語幹と語尾(場合によっては更に前つづりと後つづりも)に分解される。文法のこの課題は特に語形成論の仕事である。語によって仲介された個々の観念は文(Satz)の言語形式により結びつけられ総合観念となる(シンタックス, 言い換えれば統辞論の課題)。言語生活において語はばらばらで現われずに, 文脈においてのみ現われる, たとえ一語だけ話されあるいは書かれているにしても。なぜならばそこには少なくとも文が考えられているからだ。辞書においてもそれぞれの見出し語(Lemma <lat. legō <読む>)はすべて「この語は何を意味するか」と仮定した文の中へ組み入れられている。それに対して語源辞典では, それはどこから派生しうるか, その同系は何かということである。我々が見出し語を言語史的な考察のためにばらばらにするならば, それはまずもって言語学的な熟考の行為である。語の選択の際には文脈と言語層, つまり標準語, 日常語あるいは方言が重要になる。

語の形態は言語発達の経過の中で変化をこうむる。この変化を研究するのが音韻史(Lautgeschichte)である。語は数百年経つうちには意味を変えずに, その形を相当変える。例えば『ヒルデブラントの歌』の *arbe-olaosa* という語は著しい形の変化にもかかわらず千年以上前と同じように今日なお *erblos* <跡つぎのない>を意味している。この語は音韻法則通りに *erblos* になっている。ある語の外的形態(äußere Form)の変化とは無関係で, 語の意味, 語によって表わされ意味された意味内容, つまり語内容もまた変化し得る(内的形態 innere Form)。例えば *Milde* <温和>は「気前よさ」を意味する同音の mhd. *milte*, *milde* とは今日全く異なった意味を持っている。あるいは *edel* <気高い>は古い時代においては貴族, 上流の素姓のみに関係していたが, 今日ではむしろ特に道徳的な高貴さを意味している。もちろんたいていは語は歴史の流れの中で外的形態の変化と内的意味の変化の両方をこうむっている。たとえば nhd. *albern* は ahd では *alawāri*, mhd. では *alwære* であり, 次のように意味の変化を示している, 「全く正しい」→「誠実な, 親切な」

→「ばかな」と。その際、音韻形態の変化と意味の変化の間には例外的にしか連関がない。例えば、元々つぼのような玩具を意味していた (Krause <つぼ> から出ている) 古語 Kräusel <つぼ> を Kreis <円>, kreisen <回る> に結びつけたために今や Kreisel と書き、そう言うのである。また mhd. vrithof <いけがきで囲まれた、特に教会のまわりの土地> (ahd. fritēn <囲いをめぐらす> から出ている) は mhd i から nhd. ei への普通の音韻変化とは異なって Freithof (バイエルン方言のみ) とはならなかった。これは意味が誤って平和 (Friede) に結びつけられたからである (§ 5 の末の語場と § 6 の通俗語源説参照)。

§ 4. 語創造, 派生, 合成

語の成立についてはまだ明確なことはわかっていない。伝統的な解釈 (W. Wundt) は、単語はその起源を音振り (Lautgebärden) の中に有しているということである。音振りそのものはまた人間の (および高等動物の) さまざまな表出方法の一部である。まだ言語になっていない種類の表出方法とは例えば、「はい」と「いいえ」を表わす記号としてのうなづく動作と首を横に振る動作である。音振り (しかしまだ分節化された言語ではない) とは犬のほえ声、猫ののどを鳴らす声、赤子の叫び声などである。犬は唸るという音振りによって『私は怒っている』という総合観念を表現することが出来る。しかし犬は総合観念を『私は』と『怒っている』という個別観念に分解することは出来ない。そのような原初的な表現法の名残りはとりわけ叫び声 (Ausruf) において今日の言語に至るまで保たれている。我々が例えば pst! <シーッ> と言い、その語によってその場に合わせて『静かにしろ』という積りであるならば、それは明らかに総合観念を示す原初の言語に近い表現法である。

いかにして個々の音振りが一定の個別観念の表示物に、つまり語になったかということはあまりよくわからない。以前は自然音の模倣に大きな役割を与え、こうして多くの語の成立を擬声音 (Schallnachahmung) (Onomotopöie, ギリシャ語 ónoma <名前>, poiein <創造する> から) に

帰した。動物の名前は多くの場合、動物が発する音をだいたいにおいて再現することによって成立したらしい。例えば Kuckuck <カッコウ>, Kiebitz <タゲリ>, Fink <アトリ>, Glucke <とやについた雌鶏>, Uho <ワシミミズク>, blöken <メエと鳴く>, klappern <カタカタ鳴る>, quäken <キーキー鳴く> などの音響表示もまたそのような擬声音に負っている。

このような種類の原創造 (Urschöpfung) は今日まで効力を発している。例えば自動車 (まずフランスで) を排気音から Töffttöff と、モーターボートを Muckepicke あるいは騒々しい音楽喫茶を Tingeltangel と名づける場合。擬声音は小児語 (Kindersprache) あるいは乳母語 (Ammensprache) において大きな役割を演じている。乳母語と言ったのは子供だけが次のような語創造をするのではないからだ。例えば雌牛のことを Muhmuh あるいは Muschekuh, 犬のことを Wauwau, 時計のことを Ticktack と言う。それでも今日の語を擬声によって説明する際には注意が必要である。なぜならば今日擬声音に聞こえる幾つかの語は古い時代にはかなり異なった発音だったからである。他方、かなりの数の擬声音による語は驚くほど新しく、言語史上遠くへ遡って調べられない。例えば kliirren <カチャカチャなる>, zirpen <チーチー鳴く>。

多数の語が言語 (言語の発展については文字の伝承を通して実際わずか 2, 3 千年を観察することしかできない) の数千年の発展の経過の中で、強く形を変えてしまって今日擬声音起源であることがもはやわからなくなっていることがありえても、一言語のすべての語がこの方法で成立したことはありえない。具体的な例を挙げれば精神的な働きを示す記号表示は精神的な働きを何らかの自然音と結びつけるきっかけを与えていない。さて語の原創造の際に、音 (Klang) と観念 (Vorstellung) との間に他の関係も関与していたかどうか——例えば Wundt が多くの語に対して語の意味と語を産み出す音声器官との間の関係を仮定している (例えば前口音を伴った blasen <吹く>, Mund <口>, Zunge <舌>) のように、あるいは語形と意味の間に「感情音 (Gefühlston des Lautes) によって仲介された関係」を推測するようにいわゆる Lautmetapher <音隠喩> ——

は我々の今日の、多くの音の変化をこおむった語構造においては証明され得ない。就中我々の詩人が多くの語の音韻の象徴的意義をはっきり感じていても、学問的な語解釈はたいてい個々の語の歴史的に証明された最も古い前段階をあげることに制限されなければならない。個々の同族の語の早期の原形としてはせいぜい語幹（これから語幹末音等の除去によっていわゆる語根が構成される）が推論されるだけである。語根はそこから由来するものと推定される語群の音韻特色の要約となっている。その際語根が推論された形で実際いつかどこかで話されていたかは証明されない。

語創造に関する造語論では再三認識の限界に達してきたとはいえ、19世紀初頭以来の批判的な言語学の業績——ドイツ語をそれ以前には決して予想されなかった印欧語族の圏内に位置づけた——は言語学の誇り高い功績として残っている。ヘッセン人 **Jacob Grimm** と **Bopp**, デンマーク人 **Rask** が音韻法則の発見により推定したゲルマン語からインド語までの原初の語の再構成は、20世紀初頭に意外なことに紀元前2世紀の小アジアのヒッタイト語によって確証された。例えば **germ. watar** 〈水〉, 低ドイツ語, オランダ語, 英語において今日まで保たれている **water** はヒッタイト語のくさび形文字で **watar** として現われる。**Feuer** 〈火〉の場合もほぼ同様である (**Kluge-Mitzka, Etymolog. Wb**)。ドイツの探險隊は第一次大戦前にゴビ砂漠から未知なる印欧語の姉妹語の語をもたらした、即ち民族大移動時代のトカラ語である。

今日の語のあるものは古い固有名詞に遡る。もちろん、この派生を指摘しても、我々は基礎になっている名前の成立については何も言うことは出来ない。**boykottieren** 〈ボイコットする〉（イギリスの農場管理人 **Charles Boycott** から、1880年アイルランド人が同盟して彼を排斥にした。）、**Grog** 〈グログ酒〉（起源的にはイギリスの提督 **Vernon** のニックネームから。彼は水夫のラム酒を水で薄めさせた）、**Gobelin** 〈ゴブラン織り〉（パリの染毛工の名前）、**Tüll** 〈チュール〉（起源的にはフランスのテュル産の織り物）、**röntgen** 〈レントゲン写真をとる〉, **einwecken** (**Weck** 会社式に殺菌貯蔵する), ベルリンを発生地とする叫び声（副詞）**knorke**

〈すてきな〉等の比較的新しい時代の一連の語の場合は起源が人名または地名であることを証明することが出来る。我々がここで比較的新しい時代に鋭い言語学的認識力をもって目にする出来事、すなわち個別名の類表示への発展は太古において大規模に行なわれたかもしれない。おびただしい数の語が本来は個々の事物の名前、個々の事象の表示であったがだんだんと意味範囲を拡大して類表示になった。

今日の語彙の豊富さも太古の言語発展段階からしてみれば、今日のたいていの語が単純な基礎語から派生 (Ableitung), 再形成 (Weiterbildungen), 合成 (Zusammensetzungen) されていることによって単純化される。誰にも *stehen* 〈立っている〉, *Stand* 〈位置〉, *Ständer* 〈台〉, *Zustand* 〈状態〉, *ständig* 〈絶え間ない〉, *bestehen* 〈存続する〉, *Bestand* 〈存在〉, *beständig* 〈永続きする〉, *gestehen* 〈告白する〉, *Geständnis* 〈告白〉, *stetig* 〈変わらない〉, *unstet* 〈変わりやすい〉等のつながりはわかる。*Stelle* 〈位置〉, *still* 〈静かな〉, *Statt* 〈場所〉, *Stadt* 〈町〉, *Stuhl* 〈椅子〉, *Stall* 〈馬小屋〉, *Stollen* 〈坑道〉, *Stulle* 〈サンドイッチ〉, *Stadel* 〈物置き〉, *Stunde* 〈時間〉, *Stamm* 〈幹〉, *Steven* 〈船首〉, *Stute* 〈雌馬〉等も同じ基礎語からの派生であることは言語史の教養のない人にはそれほど簡単にはわからない。唯一の根本語から、今日形と意味からして少ししか共通性のない単語が場合によっては数百も派生していることがある。ところでかつて一言語が単純な根本語諸語からのみ成り立っていたとはあり得ないが故に、単純に計算すると、わずか数百の根本語と 2, 30 の派生つづり (前つづりと後つづり) からなる祖語が、派生と合成により、あらゆる必要を満たす数千にもものぼる語彙を作り出すことが出来たことがわかる。こういうふうに今日の言語もおおむね新しい表示の必要を満たしている。我々が数十万の語を含む語彙を例えばグリムのドイツ語辞典で調べるならば、派生と合成の数が格段に多いことがわかる。まさしくドイツ語はこの領域で再形成のための非常な能力を示している。グリムのドイツ語辞典が最初の部分としての *Liebes*—を伴う 257 の合成語を記載し、熱心な収集家がこの収集をすべての文学作品に実際にあらわれる

Liebes—, Liebe—, Lieb—を伴う約675の合成分だけ増やしたところからして、語彙のいかなる発達の可能性がそのような再形成によって与えられているかが見られる。文書によって解明される時代の場合（そして特にこの時代に本書の記述は向かうのである）、一つの語の創造の時点、それどころか時には創造者の名前さえ確定することが我々に今や多くの場合可能であるとはいえ、普通一つの語が一番最初に文字になって使われたことしか確認出来ない事実を忘れてはならない。化学の幾多の語創造を我々は医学における化学的治療法の創始者パラケルスに負っている、Gnom〈地の精〉（Kluge-Mitzka, Etym. Wörterbuch 参照）のように、また派生と合成によって新しく作られた、例えば Badewasser〈ふろ水〉, Brandsalbe〈やけど用軟こう〉, Eiweiß〈卵白〉, Geist(es)krankheit〈精神病〉, Niespulver〈くしゃみ粉〉, Scheidewasser〈硝酸〉, Wein-geist〈酒精〉のように。ほかにたくさんの例のなかで malerisch〈絵のように美しい〉, schöpferisch〈創造的な〉も（K—H. Weimann in Zs. f. Mundartforschung 1952, 65参照）。

現代語の観察からも分るように語が最初に話し言葉に登場した時と最初に書かれた時との間には（ともかく日常表現において）たいていかなりの時間的開きがある。それ故我々はすべての言語の成立の時期を留保付きで述べねばならない。それらはさらに観察してあらためられ得る。

現代非常に好まれている造語——長い熟語（Verbindung）の最初の音節ないし文字を連ねて作る新造語（いわゆる略語。Akü-Sprache=Abkürzungs-Sprache）、例えば Din-Format（=Deutsche Industrie-Normen）〈ドイツ工業規格〉, D—Zug（=Durchgangszug）〈急行〉, U-Boot（=Unterseeboot）〈潜水艦〉等——は以前はほとんど何の役割もはたさなかったであろう。ここでは、本質的には書き言葉に基づく現象が問題になるからである。また例えば Automobil の代わりに Auto〈自動車〉, Pianoforte の代わりに Piano〈ピアノ〉, Violoncello の代わりに Cello〈チェロ〉, Photographie の代わりに Photo〈写真〉等の短縮語（Wortkürzung）も現代のものである。最近の例では Asta（=Allge-

meiner Studentenausschuß) 〈全学学生委員会〉とか、頭文字だけの AEG (=Allgemeine Elektrizitäts-Gesellschaft) 〈公共電気会社〉, BGB (=Bürgerliches Gesetzbuch) 〈民法典〉, UKW (=Ultrakurzwelle) 〈超短波〉等 (§ 33参照)。

語の発生と並んで語の死滅もまた言語文化史的に重大な役割を演じている。その際たいいてい問題となるのは、同一の概念に対する2箇ないしそれ以上の類義の表現の中で一つの表現が他の表現を駆逐することである。その時とりわけ言語の社会的な層(民衆語, 上流社会の言語, 文学作品の芸術言語)の間, あるいは種々の地方的な特色の表現間の競合が決定的な役割をはたしている。そのような事象が文化史的な逆推論を容認する限り, 本書もそのことを指摘しよう(例えば § 13, 15, 19参照)。詩人語の中では古語を新しく使いなおして復活させることがとりわけロマン主義以来行なわれている。話し言葉や方言で好んで使われる「急ぐ」あるいは「しかる」を意味する表現のような感情を強めた話はまたたく間に新しい話によって置きかえられよう (P. Seidensticker in Zs. f. Mundartforschung)。

§5. 意味の変遷

意味論に関して、先学をも引用している最も新しく基礎的な文献として H. Kronasser の Handbuch der Semasiologie, Heidelberg 1952が挙げられる。表示論(言語は事物あるいは概念をいかに名づけるか)については H. Quadri の Aufgaben und Methoden der onomasiologischen Forschung, Bern 1952が扱っている。二つの方法を越えて「意味内容研究」は言語の機能を同一ないし相似の現象の要約において認識する立場へ導こうとする。それは意味内容は個人にまかせられてはいず、自らの価値を超個人的な言語構造から引き出すとするのである。これに関しては L. Weisgerber の Die Muttersprache in Aufbau unserer Kultur 1950参照。

原創造, 派生, 合成による語彙の形式上の拡張と歩調をそろえるのが意

味の変遷によって語の意味が体験する変化である。

語の意味の概念は種々の方法で探究される。論理学はその概念を内容と外延で言い換えている。論理学は意味内容でもって語によって表現された概念に帰属する特性の総和を表示する。例えば動物の場合は、有機物、知覚、自由運動がそれである。意味外延でもって、語によって表示された類に所属する個々の個体の総和が表示される。例えば動物の場合、哺乳動物、鳥、魚、両棲類など。これに対して心理学が強調するのは、当該の語によって表現される主観念のみを把握するこの論理的な意味の規定と並んでたいい同時に表出される副観念、例えば感情音 (Gefühlston) など、も重大な役割をはたしているということ及びまさにこの副観念こそ (たいい世代から世代への過渡期に生じる) 意味の変遷に決定的に作用するということである。

意味変遷のまだ十分に研究されていない理由に立ち入るまでもなく、語の意味内容が拡大したり、縮小したりし、当該の語によって表示される現象の意味範囲がそれに応じて縮小あるいは拡大する (いわゆる *Bedeutungsverengung* <意味縮小> と *Bedeutungserweiterung* <意味拡大>) ことがしばしば観察される。意味の縮小 (特殊化) に関して例えば *Dirne* という語を挙げよう。この語はかつて (今日なおボヘミアの森からミュンヘンまで、ザルツブルクを通してシュタイアマルクに至るまで *Deandl*, *Diandle* 等が使われている。 *Deutscher Wortatlas Bd IV* 参照。新高ドイツ語 *Dirndlkleid* <民族衣裳: ディルンドル> 参照) 単に「若い娘」の意味であった、だが文章語において (「不道德」という意味特徴が加わって) 「娼婦」の意味になった。他の例を挙げれば、*Getreide*, *ahd. gitregidi* <収益>, 今日では「穀物」を意味する (これについては *H. Höing, Deutsche Getreidebezeichnungen in europäischen Bezügen, semasiologisch und onomasiologisch untersucht 1958 mit Karten*)。 *Gift* は本来「贈り物」であったが (*engl. gift* <贈り物>, *nhd. Mitgift* <持参金> 参照) 今日「毒物」を意味する。意味の拡大 (一般化) の例として *hübsch* を挙げよう。本来「宮廷風の」の意味で

あったが、今日「姿などが優美な印象を与える」を意味する。**fertig** は本来「出発の用意の出来た」を意味したが、今日一般に「用意が出来た、終わった」を意味する。もちろん意味の拡大と縮小の両事象が歴史の推移の中で同一の語に連続することもありうる。すでに挙げた語 **Dirne** は古代ゲルマン語時代には明らかに **Dienerin** 〈下女〉(**dienen** 〈仕える〉と **Demut** 〈謙讓〉と関連して) の意味であったが、「若い娘」の意味を得ることによって、既に一度意味の拡大を行なったのである。意味の縮小にはしばしば意味の悪化が伴う。上の **Dirne**, **Gift** がその例であるし、さらに **Pfaffe** 〈くそ坊主〉は中世では普通に「聖職者」の意味、**Mähre** 〈駄馬〉は本来軽べつ的な副次的意味を持たない「馬、雌馬」であった。意味の変遷は意味の良化をもたらすこともある。例えば本来「馬丁」の意味であった **Marschal** 〈元帥〉においてのように。政治的操作による価値の切り上げないし切り下げについては § 52 参照。

しばしばあらわれるもう一種類の意味の変遷は論理学によって転用(隠喩)と呼ばれるものである。**Deutscher Wortatlas II** の中で例えば昆虫の **Libelle** 〈とんぼ〉は東プロイセンで **Scherenschleifer** 〈研師〉, ヴェストファーレンで **Düwels Naihnel** 〈悪魔の縫針〉, シュヴァルツヴァルトで **Deifelsnodl** 〈悪魔の針〉, ヴァイエレン その他では **Wasserjungfer** 〈水の乙女〉となり, そのほか **Teichhüter** 〈池の番人〉, **Wasserschandarm** 〈水上の憲兵〉, **Schlangenhüter** 〈蛇の番人〉, **Gottespferd** 〈神の馬〉などの異称で無数の隠喩を示している。動物学は水平の羽を持ちブーンと飛ぶ昆虫を縮小語 **libella** (ラテン語 **libra** 〈水準器〉から) で呼んだ。ドイツの石工や大工は水準器を **Libelle** と呼んでいる。昆虫の命名の際に一つの語の意味が他の概念領域に移されたわけである。このような時には二つの物の外的な類似あるいは用途の類似が特別重要な役割をはたしている。この種類の転用は例えば **Linse** 〈レンズ豆〉から目の **Linse** 〈水晶体〉及び光学器具の **Glaslinse** 〈レンズ〉への意味の転用, **Feder** 〈鳥の羽〉から筆記用の鳶ペンへ, それにはがねの筆記用具あるいは技術分野での弾性のバネへの転用, **Strom** 〈流水〉から電気の「電

流」への転用等である。言語の全語彙はそのような比喻によってつらぬかれている。特に民衆の話しことばと特殊語 (§ 7 参照) はそのような傾向にある。精神的な事象のための表現はほとんど例外なく本来感覚的・具象的な意味を有した語から転用されている。例えば *begreifen* 〈理解する〉は本来 *angreifen* 〈着手する〉, *betasten* 〈手でさわる〉 の意味であった。何かを *fassen* 〈理解する〉 ことが出来ない, に使う *fassen* は本来 *anfassen* 〈つかまえる〉 の意味であった。*erfahren* 〈経験する〉 は本来「何かを乗り物に乗って行き (*fahren*), 探し出す」であった。*bewandert* 〈歩いた〉 → 〈経験の深い〉 参照。最初は命と魂のある物にのみ使われた語がそうでない道具, 器具, 機械に転用された例は非常に多い。*Hund* 〈犬〉 は「トロッコ」の意味, *Ramm* 〈ドロップハンマー〉 は本来「雄羊」(*engl. ram* 〈雄羊〉) の意味, *Bär* 〈熊〉 は「分銅槌」の意味。*Kran* 〈クレーン〉 (ツル), *Schraubenmutter* 〈めねじ〉 等参照。(いわゆるアニミズム, 無生物の生物化。)

転用に近いのは転換 *Verschiebung* (換喩 *Metonymie*) である。この場合は二つの概念の関連あるいは空間的・時間的ないし因果的な依存関係が大切である。*Messe* の場合がこれである。本来は「教会の祭り」, 次に「それに関連する市」となった。*Hasenpfeffer* も「兎の肉を胡椒で調合した料理」(字義通りには兎の胡椒) になった, *Ekel* はまず「吐き気」であったが次に「不快感」さらに「いやな奴」の意味になった。その際, 一部から全体 (いわゆる *pars pro toto*) への意味の転換が特に多い。*Maske* は本来「仮面」, 次に「仮装した者」の意味になった。*Schlafmütze* 〈ナイトキャップ〉 が「寝坊, のろま」の意味になった。また「水夫」を意味する *Blaujacke* 〈青い上衣〉 等参照。地名や人名がそれに由来する事物や行為に転用される場合も, 意味の転換である。例えば *Achat* 〈めのう〉 (シシリー島の *Achates* 河から), *Champagner* 〈シャンパン〉 (フランスの一地方シャンパーニュから), *Batist* 〈上等白麻〉 (フランドルの麻織工 *Cambrai* の *Baptiste* による), *Vertiko* 〈飾り棚〉 (ベルリンの指物師 *Vertikow* から), *verbalhornen* 〈改良を企ててかえって改悪す

る> (ある入門書をよくしようとしてかえって悪くしたといわれるリュベックの印刷工 Johann Balhorn から)。個有名詞からの普通名詞については § 4 参照。

意味の変遷の他の形は誇張 (Übertreibung), 縮小 (Verkleinerung), 婉曲 (Verhüllung) 即ち (Euphemismus) (griech. eu <よく> phēmi <私は話す> から。) 例えば dick <太った> の代わりに vollschlank。語内容の変化はすべての語領域 (いわゆる語場研究 Wortfeldforschung, J. Trier, L. Weisgerber § 3 参照) に及ぶ。意味の対極的な分裂は政治的イデオロギー地図に由来する。例えばドイツ語圏における Freiheit <自由> あるいは Demokratie <民主主義> の諸定義がその好例である。

§ 6. 借用⁷⁾: 外来語, 借用語, 外来語代用

一言語の語彙拡大の重要な可能性の一つは外国語からの語の借用 (Entlehnung) である。いかなる言語も全然そのような借用に無縁ということはない。受容された借用財の量と外来語の国語の音韻への形式的な適合の度合いが異なっているだけである。ドイツ語では外来語の受容は周知の如く非常に数が多い。外来語を国語の音韻状態に適合させるドイツ語の力は現代よりも以前の方がずっと大きかった。現代では元の外来語に対する知識が広まっているために発音上の同化はしばしば抑制される。ドイツ語への借用を複数回受けているのがローマのパラチフの丘のアウグストゥスの皇帝座から出た palatium である。600年頃の古高ドイツ語の音韻推移は pfalz とした (それ故それ以前に受け入れられたことになる)。1200 年以前の中高ドイツ語時代に新たに palas(t) として導入され, 1669年以来フランス語から Palais が外来語としてドイツ語に登場する。ドイツ語学者の一研究グループが借用財の周囲とのギブアンドテイク, つまり借用語の各方面ととの交換を W. Mitzka: Wortgeographie und Gesellschaft の中で初めて叙述した。即ち B. Kratz はドイツ語—フランス語, Kühebacher はドイツ語—イタリア語, Stanforth はドイツ語—英語, Ponten はドイツ語—オランダ語, Johannison はドイツ語—ノルド語, Peters

はドイツ語—スラヴ語, Hutterer はドイツ語—ハンガリア語, Schönfeldt はバルカン語について。

ドイツ語の外来語彙は本書にとって特に啓発的である。なぜならば外来語財の受け入れにはほとんどいつも物の借用関係が基礎となっているからである。外国語から語を借用する理由の一つに、一民族が未知の事物や事象を国語に適当な表現がないために外国名で表わすということである。こういうふうに特に文化語と言われる外国語表現——外国の産物、動物、商品の名前——さらに政治的・経済的制度や新しい文化現象の名称が受け入れられる。外国語から借用された語 Pfeffer 〈胡椒〉, Kartoffel 〈ジャガイモ〉, Orange 〈オレンジ〉, Ananas 〈パインアップル〉, Kaffee 〈コーヒー〉, Löwe 〈ライオン〉, Tiger 〈虎〉, Seide 〈絹〉, Atlas 〈地図〉, Vogt 〈代官〉, Pacht 〈租借〉, Finanz 〈金融〉, Turnier 〈競技〉等がこれに入る。特に生活水準の低い民族が高度に発達した外国文化と接触すると、当該分野の表現が大量に入ってくる。(例えば、ローマのゲルマン民族に及ぼした影響 § 11, または中世の宮廷騎士社会に及ぼしたフランス文化の影響 § 15, 17及び18世紀の社交界に及ぼしたフランス文化の影響 § 23 参照)。

政治的あるいは文化的に強度に依存していると、場合には借用語を使用する言語が国語での表現をすでに所有しているか、あるいは容易に語幹から派生させることが出来るような語彙の領域にもこのような借用表現が広がる。古代の学問の影響は、おびただしい量の外来の学問用語をドイツ語にももたらしたが、これらは恐らく自国語の表現でも可能であったであろう。その事を証明しているのがオランダ語である。オランダ語には我々には不可欠と思われるおびただしい量の外来語が欠けている。例えば Theater 〈劇場〉はオランダ語で schouwburg, Idee 〈理念〉はオランダ語で denkbeeld, あるいはほとんど外来語のないアイスランド語もこれを証明している。しかしドイツ語では、例えばバロック時代には、優越性を認められたフランス文化の影響は、以前から表現が存在した事物にさえフランス語を使用する事態をもたらした (Papa 〈パパ〉, Mama 〈ママ〉,

Onkel <伯父>, Tante <伯母>, Adieu <さようなら>。またそのような借用の際には心理的及び社会的な理由も働いている。例えば、特に上流社会層の会話や文字においてより繊細なニュアンスを描出しようとする欲求 (例えば Mut <勇気> — Courage, Tapferkeit <勇敢> — Bravour, Unglück <不幸> — Malheur), あるいは上品な表現を使う sich en parlant von der Canaille zu distinguieren <話し方で下層民から自分を区別しようとする> 流行 (17世紀のフランスかぶれの表現法 § 23, 学界における古代の表現 § 18, 英語のスポーツ表現, ダンス用語など § 29, 以上の語は今日なお使われている)。このことから明らかになるのは外来語受容のすべての場合に事物の借用を推論してはいけないということである。 (「語は物と共に移動する」という命題は一般にあてはまるが), 言語上の借用から事物の借用を逆推論する際には同じ事物に対して以前に国語の表現が行われていたかどうか絶えず注意深く調べなければならないのである。17世紀の Onkel <伯父>, Tante <伯母>, Cousin <従兄弟>, Cousine <従姉妹> のような表現の受容が, ドイツ人はこのような親等 (以前は Oheim, Muhme, Vetter, Base) を知らなかったと結論するのを許さないのと同じように, 例えばメロヴィング朝時代の俗ラテン語から借用した Pferd <馬> という語の成立は, ゲルマン人にとって馬が知られていなかったと結論するのを許さない。もっともこの時, 特別の種類 of 馬, 車を引く役畜として適している馬——それ以前の馬は乗馬用であった——が導入された。griech. pará <～の側> とケルト語 rēda <四輪旅行車> からの後期ラテン語 verēdus <馱馬> が6世紀以来借用されて最後に新高ドイツ語 Pferd となった (Kluge, Etymolog. Wb.)。古い, 今日詩人語において威厳を保っている古語 Roß は民衆語の中では特別の価値評価なしに広く東南部一帯で Pferd としての意味を持っている。ドイツ西部の中心部では, Gaul が軽蔑的な感情をもたずに, 登場した。それはまず家畜のこども一般を意味した。上に挙げた借用語から, 以下のことが結論されるのみである。17世紀にはフランス風な物事が好まれたことと, ローマ化されたガリアでもゲルマン人は馬を知っていたこと。

ドイツ語語彙の外来の部分に従来のように借用語と外来語に分離する方法は厳密に遂行することは出来ない。外来語に比べて借用語の目印と見なされるのは発音、アクセント、活用変化でのドイツ語の言語習慣への適合、それとふつうの日常語への進出である。少なくともこれは最も適切な考え方である。なぜならば、例えば古高ドイツ語時代と中高ドイツ時代に取り入れられた外来要素を借用語、1500年以後に入ってきた外来要素を外来語と呼ぶようなことは当を得ていないからである。それで我々は書き方（例えば *Tanz* 〈ダンス〉, *Möbel* 〈家具〉, *Leutnant* 〈少尉〉), 発音（例えば *Wein* 〈ワイン〉, *Mauer* 〈壁〉, *Sport* 〈スポーツ〉), アクセント（例えば *Fenster* 〈窓〉, *Banner* 〈幟〉, *Kaffee* 〈コーヒー〉), 活用変化（例えば *Schecke* 〈小切手〉, *Leutnante* 〈小尉〉, *Streike* 〈ストライキ〉（*-e* を付けて複数形を作る））の上でドイツ語の言語習慣に一致している外来起源の語を借用語と呼ぶ。その際、これらの語が数百年前にドイツ語に入り込んで来た（*Fenster*, *Wein*, *Mauer* のようにゲルマン時代にラテン語から入ったもの, *Banner* と *Tanz* のように1200年頃フランス語から入ったもの）かどうか、あるいはそれらが近代になって初めて取り入れられたか（*Leutnant*, *Möbel*, *Kaffee* のように）、あるいはもっと新しい時代に取り入れられた（*Sport*, *Scheck*, *Streik* のように）かどうかは、あまり問題ではない。もちろん発音の適合の度合が、外来語が本当に国語化しているかどうかの判断の基準になるとは限らない。なぜならば数百年来ドイツ語に取り入れられているが、音形をほとんど変えていない（例えば, *Evangelium* 〈福音〉, *katholisch* 〈カトリックの〉, *Kompanie* 〈会社〉）外来語もあるし、また外来語の書き方、発音、アクセント（例えば, *Hotel* 〈ホテル〉, *Bassin* 〈水盤〉, *Courage* 〈勇氣〉, *Restaurant* 〈レストラン〉, *Cognac* 〈コニャック〉, *Photographie* 〈写真〉）にもかかわらず日常語や方言にさえ使われている外来語もあるからである。国語化した借用語がたいてい派生語を作り出し（*Mauer* 〈壁〉からの *mauern* 〈石べいを築く〉, *Maurer* 〈石工〉, *ummauern* 〈石べいで囲む〉を参照）、反対に外来語はそうではない（*Bassin*, *Restanrant* の派

生語はない) という事実も区別の大きな決め手とはならない。なぜならば *Ampel* 〈信号〉, *Estrich* 〈たたき床〉そして *Söller* 〈バルコニー〉のような借用語も派生語を作らなかった。しかし外来語 *Friseur* 〈理髪師〉は派生語を作り出している (恐らく外国語からそのまま持ち込まれたものだろうが。 *Friseuse* 〈女性理容師〉あるいは *Frisur* 〈理髪〉, *frisieren* 〈調髪する〉 参照)。ドイツ語の言語財から構成されているのが借用造語 (*Lehnprägung*) である (W. Betz: 上掲書, *Wasserzieher-Betz; woher*)。これには意識借用語 (*Lehnübertragung*) (*praeteritus* から *vergangen* 〈過ぎ去った〉, 直訳借用語 (*Lehnübersetzung*) (*Veneris dies* 〈女神ビーナスの日〉から *Freitag* 〈ゲルマンの女神フレイヤの日 = 金曜日〉, *franz. grand-père* から *Großvater* 〈祖父〉, *griech. strateges* から *Herzog* 〈軍の統率者 = 大公〉, *respectus* から *Rücksicht* 〈配慮〉), 借義語 (*Lehnbedeutung*) (*gravamina* から *Beschwerden* 〈重荷〉) がある。

借用語と外来語の区別は外来語の意識的な排除 (*Verdrängung*) と代替 (*Ersetzung*) の問題にとっただけ重要である。なぜならば我々の言語の外来語からの純化をめざしている運動は、それが行き過ぎない限り、国語とならず、必ずしも必要とならなかった外来語だけを入れ替えたいと思うが、ほんとうに一般の言語使用に供された借用語には手を触れようとしないからである。古い時代にはこの事は重大な役割をはたさなかった。本来に必要な外来語は話し手自身によって国語風の発音に変えられそれによって借用語となったので外来語を意識的、計画的に区別することはほとんど必要ではなかったからである。今日でも民衆の言語については、民衆は決して意識的に言語の浄化を行なっているのではなく、無意識的にのみ行なわれていると言われる。民衆は外来語を音韻上国語の言語形態に合わせている。例えば、民衆は *Büro* 〈事務所〉, *Konsum* 〈消費組合〉のようにドイツ語的に前の音節にアクセントを置き、南ドイツでの *Pension* 〈年金〉の発音には軟口蓋音 -n がなく、明るい -e- 音がある。また *Schef* 〈上役〉 (*Chef* の代りに), *Schofför* 〈運転手〉 (*Chauffeur* の代わりに)

と書く方法を参照。それに対して民衆は外来語に代わるドイツ語を自ら提供することはもっとも稀である。(バイエルン方言では *Automobil* 〈自動車〉の代わりに *Schnauferl*, 上部ザクセン方言では *Lorgnett* 〈柄付きめがね〉の代わりに *Stöckelklemmer*)。外来語を音韻的に合わせる時に熟知の国語の語幹に同化することは以前からある。その際、外来の理解出来ない語に意味をもたせることが試みられる (いわゆる通俗語源 (*Volks-etymologie*)), 例えば *franz valise* 〈スーツケース〉から *Felleisen* 〈皮+鉄 → スーツケース〉, *mlat. ar(cu)ballista* 〈いし弓〉, 古代フランス語 *arbaleste* 〈いし弓〉から *Armbrust* 〈腕+胸 → いし弓〉, *mlat. contrapunctum* 〈対位法, 多声部音楽〉から *kunterbunt* 〈雑多な〉を参照。ところで, この事象はもはや由来のわからない国語にも及んでいる。例えば *Sündflut* 〈罪の洪水 → ノアの洪水〉はもともと *sin/t/-flut* 〈大洪水〉であった。*Maulwurf* 〈口+投げる → モグラ〉はもともと *moltwerf* 〈土を投げる者〉であった, *Wetlerleuchten* 〈幕雷〉は以前は *weterlescher* 〈荒天の遊び〉であった, *Beckenhaube* 〈水盤の形をした帽子〉から *Pickelhaube* 〈尖頂のあるプロイセン式軍帽〉となった。

以前外来語を意識的に国語に変えることが行なわれた限りではそれはたとい外来語の意味を国語の語幹によって字義通りに訳す方法で行なわれた。そのような翻訳借用語は, ドイツ語語彙の成立の際に, 普通考えられている以上に大きな役割をはたしている。すでに古高ドイツ語時代の教会翻訳者たちは皆そのようになした。例えば彼らはラテン語 *conscientia* に従って *Gewissen* 〈良心〉, *misericors* に従って *ahd. armaherzi* (今日の *barmherzig* 〈慈悲深い〉), *confessio* に従って *bijht* (今日の *Beichte* 〈告白, さんげ〉), *Compater* に従って *Gevatter* 〈代父〉を作った。宗教, 政治, 学問に対するドイツ語表現の大部分はこの方法で特にラテン語の例に倣って作られている。近代及び現代に至るまで翻訳借用語ははばをきかせている。例えば政治用語 (526参照), 技術用語, 及び他の専門語において。この方法で全く新しいドイツ語が作られずに既存のドイツ語が

外来語の影響で新しい意味をになうことも時々ある。例えば *Rechnung* 〈計算〉は商人語において *ital. conto* 〈勘定〉の影響を受け、15, 16世紀にはしばしばその意味で使われた (*conto corrente* に倣って *laufende Rechnung* 〈当座勘定〉, *auf neue Rechnung übertragen* 〈新しい請求書に書き換える〉)。ドイツ語 *Fluß* 〈流れる水〉は *lat. fluor* 〈流水, 下痢〉, *griech. rheuma* 〈流水, リューマチ〉の影響で病気の名前になった。文法用語としての *Fall* 〈格〉は *lat. casus* に由来する。*jemanden schneiden* 〈人に会ってもわざと知らん顔をする〉は *engl. to cut* の影響を受けている。*überholen* 〈徹底的に調べる〉は英語の *to overhaul* の影響を受けている。*Ring* 〈輪〉は近代になって初めて米語 *ring* 〈価格協定〉の意味を取り入れた (意味借用 (*Bedeutungsentlehnung*))。

外来語の計画的な駆逐は17世紀になって初めて行なわれた。その時、言語協会 (*Sprachgesellschaften*) のメンバー (例えば *Zesen*, *Harsdörffer*, *Schottel* など。§ 23参照) は、今日もはや人工的な起源がわからなくなってしまった数々の有用なドイツ語化を意識的になした (例えば *lat. superficies* の代わりに *Oberfläche* 〈表面〉, *Orthographie* の代わりに *Rechtschreibung* 〈正書法〉, *Korrespondenz* の代わりに *Briefwechsel* 〈文通〉, *Geometer* の代わりに *Feldmesser* 〈測量技師〉, *Konsonant* と *Vokal* の代わりに *Mitlaut* 〈子音〉と *Selbstlaut* 〈母音〉など)。1800年頃ではデリケートな心でドイツ語化を行なった F. H. Campe (*Wörterbuch zur Erklärung und Verdeutschung der unserer Sprache aufgedrungenen fremden Ausdrücke* 1801, Neudruck 1968, § 25参照) の仕事が特に重要である。彼によって大胆ながらも自国語化した語が作られた。例えば *Takt* の代りに *Feingefühl* 〈デリカシー〉, *Rendezvous* の代わりに *Stelldichein* 〈あいびき〉, *Supplikant* の代わりに *Bittsteller* 〈請願者〉, *Kontinent* の代わりに *Festland* 〈大陸〉, *Insekt* の代わりに *Kerbtier* 〈昆虫〉, *Kursus* の代わりに *Lehrgang* 〈カリキュラム〉, *Journal* の代わりに *Tageblatt* 〈日刊紙〉など。郵便用語では郵政大臣 *Stephan* が1874年から計画的にドイツ語を作った

(rekommandieren の代わりに einschreiben 〈書留めとして扱う〉, poste restante の代わりに postlagernd 〈局留めで〉, Mandat の代わりに Postanweisung 〈郵便為替〉, Correspondenzkarte の代わりに Postkarte 〈はがき〉, Telephon の代わりに Fernsprecher 〈電話〉)。こういうドイツ語化をまもなく鉄道省が倣い (perron の代わりに Bahnsteig 〈プラットフォーム〉, Coupé の代わりに Abteil 〈コンパートメント〉, Retourbillet の代わりに Rückfahrkarte 〈往復切符〉), 他の省も追従した。1885年からドイツ語協会 (Deutscher Sprachverein) はドイツ語の浄化に効果的な活動をしたが, それは雑誌 Muttersprache とドイツ語化小冊子により必ずしも必要でない外来語に対する感覚を広い範囲に広げたからである。航空用語は最初からドイツ語の語彙から得ている。例えば Flugzeug 〈飛行機〉, landen 〈着陸する〉, wassern 〈着水する〉など。

§7. 社会学：方言，標準語，日常語，専門語，特殊語

ドイツ語は最初方言の形でのみ現われる。宮廷騎士文学の詩文語は粗野な方言を避けることによって共通語への足掛かりを示している。人文主義と宗教改革の時代からようやく, まず文書による意思疎通のために共通語つまり標準ドイツ語の文章語 (Schriftsprache) (§19参照) の使用が広まる。この文章語は18世紀の古典作家の卓越した功績により最初には口頭による意思疎通にも浸透する。その際もちろん語法の地方的特徴は今日まで完全に消え去ってはいない。今日なお, 標準語の支配が認められているにもかかわらず, 南ドイツ, スイスあるいは低ドイツの作家の語彙の中に地方語 (Landschaftswörter) が現われている (例えば Peter Rosegger に見られる Pecher=Pechsucher 〈ピッチを探す人〉, rauschig=berauscht 〈酔った〉, handsam 〈扱いやすい, 便利な, 社交的な〉, Gottfried Keller に見られる äufnen 〈高める, 促進する〉, zutun 〈手に入れる〉, Gegenschwäher (私の父は私の Schwiegervater 〈舅〉の Gegenschwäher であるなどと使う), 低ドイツ語作家 Gustar Frenssen に見ら

れる *sipp* (バルト海地方のドイツ系住民の間では *zipp*=*zimmerlich*) 〈弱虫の〉と *plieren* (涙が出る)。地方的な変則は今日まで文章語よりも話される日常語 (*Umgangssprache*) の語彙の中における方が強い。日常生活の数々の概念を示す共通の標準ドイツ語表現はおよそまだ形成されていない。

例えば北西部では *Saterstag* 〈土曜日〉 (土星——サートゥルヌス神の日), ライン川から南へ向かっては *Samstag* (*Sabbatstag*), その他の地では *Sonnabend* が使われている。このように広い範囲にわたって, *Fleischer* 〈肉屋〉, *Metzger*, *Schlächter*, *Selcher* が並存している。また *Tischler* 〈指物師〉と *Schreiner*, *Töpfer* 〈陶工〉と *Hafner*, *Klemptner* 〈ブリキ屋〉と *Spengler*, *Treppe* 〈階段〉と *Stiege*, *fegen* 〈掃く〉と *kehren* なども。言語地図の上では同義語は何百となく現われ得る。このことから我々は、厳しい統一語規定によって妨げられないドイツ人の地方的な語創造の喜びを知る。他の国々の国語では語の選択は首都やアカデミーによって決められる。P. v. Polenz は *Deutsche Wortforschung in europäischen Bezügen II* hg. L. E. Schmitt の中で言語地図の作製者 *Druck* の名を挙げている。この中で次のような語が挙げられている。*Ahorn* 〈カエデ〉, *Ameise* 〈アリ〉, *Anemone* 〈アネモネ〉, *Augenbraue* 〈まゆ〉, *Augenlid* 〈まぶた〉, *Wimper* 〈まつげ〉, *auswringen* 〈絞る〉, *Backenzahn* 〈きゅう歯〉, *Backtrog* 〈こねばち〉, *Bauchweh* 〈腹痛〉, *sich beeilen* 〈急ぐ〉, *Begräbnis* 〈葬式〉, *Bettlaken* 〈シーツ〉, *Beule* 〈たんこぶ〉, *blitzen* 〈稲光りがする〉, *Böttcher* 〈おけ屋〉, *brauchen* 〈必要とする〉, *Bremse* (*Viehbremse*) 〈ウマアブ〉, *Brennessel* 〈イラクサ〉, *Brombeere* 〈黒イチゴ〉, *Brotscheibe* 〈切ったパン (の一枚)〉, *bügeln* 〈アイロンをかける〉, *Deichsel* 〈かじ棒〉, *dengeln* 〈ハンマーで打って切れ味をよくする〉, *dies Jahr* 〈今年〉, *Distel* 〈アザミ〉, *Docht* 〈芯〉, *Eichel* 〈カケス〉, *Eigelb* 〈卵黄〉, *Els-ter* 〈カササギ〉, *Engerling* 〈ジムシ〉, *Ente* 〈アヒル〉, *Erdbeere* 〈イチゴ〉, *sich erkälten* 〈かぜをひく〉, *ernten* 〈収穫する〉, *Euter* 〈家

畜の乳房〉, fegen 〈掃く〉, Ferkel 〈子ぶた〉, Fledermaus 〈コウモリ〉, Fleischer 〈肉屋〉, Fliege 〈ハエ〉, Frosch 〈カエル〉, Frühling 〈春〉, Gabeldeichsel 〈ながえ〉, gackern 〈クックッと鳴く〉, gähnen 〈あくびをする〉, Gans 〈ガチョウ〉, gehorchen 〈従う〉, Genick 〈うなじ〉, Gieskanne 〈じょろ〉, Glühwürmchen 〈ホタル〉, Grasschwade 〈刈った干し草の並び〉, Großmutter 〈祖母〉, Großvater 〈祖父〉, Grummet 〈二番刈りの牧草〉, Gurke 〈キュウリ〉, Hagebutte 〈サンザシの実〉, hageln 〈あられが降る〉, Hahn 〈雄鶏〉, halt (den Mund) 〈口をつぐめ〉, häuzeln (Kartoffeln) 〈(じゃがいもの根もとの) 回りに土寄せする〉, Hebanme 〈産婆〉, Heckenrose 〈イヌバラ〉 など, wiederkäuen 〈反すうする〉, Zahnschmerzen 〈歯痛〉, Zahnkönig 〈ミソサザイ〉, Ziegl 〈ヤギ〉 に至るまで。Ziege に関連して, Kornblume 〈ヤグルマギク〉 はチューリングゲン・シュレージエン方言では Ziegenbein と言い, 700年前の植民時代の故郷では今日でも Geißbein (干からびた, 角のある茎にちなんで) と言われている。ヘッセンの農民入植者は東方に向かう途中 Ziege の使用領域へ入り, そこでヤグルマギクを Ziege にちなんで名づけた (シラー Schiller は Cyane と呼んだ)。語源, 命名の動機, 植民史に関するそのような話を我々は我々の農民語や幼児語について長々と語ることが出来よう。ゲルマニストと歴史家にカール大帝以前の時代の Qu-ecke 〈カモジグサ〉 の語の歴史が次のように教えている。つまり, 中部フランケン地方でのみ使われていた Quette 〈カモジグサ〉 を植民者がモーゼル川流域からマイン川流域とタウバー川流域へともたらした。証人として Bonifatius の名を挙げよう。1200年前のこの農民移住についていかなる文書もいかなる年代記も記していない。しかし, 今日国民の母体をなす層の口, つまりドイツ方言に見られた語形態がそれを証言しているのである。

語彙は地方色によってのみ区分されているのではない。性 (Geschlecht), 年令 (Altersstufe), 教育程度 (Bildungsgrad), 階級 (Stand) 及び職業 (Beruf) によっても語彙の変形が存在する。ドイツ語にははっ

きりした女性語（たとえばカリブ人におけるような）はないが、しかしある語はやはり女性特有とされている。特にハイティーンの娘の場合（例えば *rasend* 〈すごい〉, *wahnsinnig* 〈ものすごい〉, *phantastisch* 〈すばらしい〉 のような漸増語）。一方同年代の男性はそれに対してもっと強い表現（例えば *pfundig* 〈すごい〉, *zackig* 〈鋭い〉, *ganz groß* 〈すごい〉 など）を好む。若者が好む表現があると同じく老人が好む表現もあるということは、話し言葉においても、我々の詩人（例えばゲーテ）の言葉においてもすでにしばしば観察されてきた。さらに大学教育を受けた者の語彙と義務教育しか受けていない者の語彙の間に差があるということも、事実である。その事実は残念ながら過去にしばしば国民各層間の相互理解を困難にした。とりわけ大学教育によって広がった外来語はドイツ語語彙の中にしばしば統一を阻害する亀裂をもたらししてきた。しかし、以前しばしば主張されたように、ホワイトカラーの語彙がブルーカラーの語彙よりも考えるまでもなくはるかに豊かであるにちがいないとする見方は誤っている。むしろ近年の研究によれば、例えば農民あるいは職人の語彙は、その職業に関する専門語を除いても驚くべき多様な表現法を蔵していることがわかった。例えば感情や愛の生活領域、特に冗談、ののしり、あざけりのための表現法がそうである。そのような語について *Schlesisches Wörterbuch* (I 339, II 843) は男に関して165, 女に関して190の表現を挙げている。種々の階級と職業の特殊語あるいは専門語がその語彙の豊富さを単にその特殊な、部外者にはわからない概念の世界に基づかせているのではなく、特定の階級においては全く普通の観念に対しても特殊な表現が使われるということを、例えば獵師語 (*Weidmannssprache*) が示している。獵師語は素人にもわかる事項と出来事をそれにのみ通用する語で表わしている（例えば、個々の動物の身体各部あるいは動作）。隠語 (*Rotwelsch*) (*Rot*=*Bettler* 〈乞食〉 + *welsch*=*fremdländisch* 〈異国の〉 から) 言い換えれば *Gaunersprache* (盗賊語) は普通の概念を表わすのにあまりに異常な表現を使うので、秘密語の性質を有している。それを知っている者は概ね浮浪者や犯罪者の集団に限られている。しかし隠語の多く

は他の階級語（例えば大学生・高校生言葉，商人語）及び低俗な日常語に入っている。隠語の語彙は一部借用語から成り立っている。特に *acheln* 〈食らう〉，*Baldober* 〈諜報者〉，*Dalles* 〈貧困〉，*kapores* 〈こわれて〉，*Massematten* 〈商売，盗み〉，*Massel* 〈幸福〉，*Schmiere stehen* 〈見張りをする〉などのイディッシュ語と *Zaster* 〈お金〉，*Kaschemme* 〈場末の酒場〉などのジプシー語（ジプシー語の語彙については，Siegmond A. Wolf, *Großes Wörterbuch der Zigeunersprache*, Mannheim 1960）から。隠語には語の歪曲（音の挿入，短縮，文字や音節の転換など）が加わる，例えば *stibitzen* 〈すねる（特に子供が）〉，*Mokkum kuf* (=Stadt K) 〈カッセル〉などのように。多くの隠語は言い換えによって秘密語の目的を果している。例えば *Windfang* 〈風の捕獲器＝オーバー〉，*Obermann* 〈上の男＝帽子〉，*Blech* 〈鉛＝お金〉，*Breitfuß* または *Plattfuß* 〈幅広の足，平らな足＝がちょう〉などのように。-hart (-ert)，-(e)rich，-ling (-ing)，-linger (-inger) などの語尾は典型的な隠語であり，*Breithart* 〈広い奴＝牧場，平原〉，*Blankert* 〈白い奴＝ミルク，ワイン〉，*Härterich* 〈堅い奴＝ナイフ〉，*Rundling* 〈丸い奴＝玉〉，*Trittling* 〈踏む奴＝靴，足〉などのようにドイツ語の語幹に付け加わる。現代の都市では多くの表現が隠語の普通の日常語に入っている。例えば *berappen* あるいは *blechen* 〈支払う〉，*Ganove* 〈ペテン師〉（イディッシュ語 *gannaw*），*mies* 〈悪い〉（イディッシュ語から），*Kies* 〈お金〉，*Kittchen* 〈ブタ箱〉など（§ 22参照），それに反して，方言におけるイディッシュ語からの借用語はしばしば定住ユダヤ人の日常語に由来する，特にヘッセンとラインプファルツで（これに関しては H. P. Althaus, *Jüdisch-hessische Sprachbeziehungen*, in: *Zs. f. Mundartforschung* 30 (1963/64). Ders., *Zum jiddischen Lehnwortschatz im Deutschen*, in *Zs. f. deutsche Sprache* 21 (1965)). 隠語に似た秘密語的性格を大学生と高校生の語も持っている。もっとも，印刷業者，商人，船員，技術者などの多くの職業語では，語彙における変則形は，当該の職業が多くの個々の事物のために——それらの知識は一般的ではない——正

確な専門用語を作り出したことに基づいている。このような専門用語は確実な、誤解のない意志の疎通のために必要なものである。本書では特殊語表現を比較的広い範囲で使われている限りにおいてのみ扱おうことにするが他方で我々が特殊語（専門語）を等閑視することが出来ないのは、まさしくそれらの語彙がしばしば重要な文化史的な事象を示すからである。ドイツ語方言と地方色で彩どられた日常語の語彙はたくさんの地方的な表現に対する驚くべき生き生きとした喜びを示している (§ 2 ドイツ言語地図参照)。

§ 8. 流行語, 符丁語, 金言と名前の流行

ほとんどどの時代にも, 特定の集団, 稀に言語共同体全体によって一定期間特に好んで使われ, そのために流行語と呼ばれてきた語と句がある。現代の場合は, 例えば *restlos* <徹底的な>, (*ein Mann*) *von Format* <逸材>, *ganz groß* <すごいぞ>, *Ausgeschlossen!* <(強い否定として) 論外だ>, *Allerhand!* <とんでもない話だ> あるいは *Meine Herren!* <(驚きの叫びとしての) 何ということ!> のような例が使われる。現代の場合はそのような流行語の確認はかなり簡単であるが, 過去の時代において好まれた語や流行語となると大規模な語句使用頻度調査によるのみしか (時には直接の例証も) 確認することが出来ない。それでも流行はたいいてい価値ある文化史及び風俗史への逆推量を許してくれるので, やはり我々の研究にとって非常に大切である (例えば, 13世紀の宮廷騎士道における表現法 § 15, 17世紀のフランス趣味時代の上流社会層の表現法 § 23, 天才時代の力強い表現 § 25参照)。もっとも, 文書による伝承に頼る場合には, 個々の作家の好んだ表現と一時代全体の好んだ表現との間に一線を画することは, かならずしも簡単とはいえない。

同じような役割は符丁語 (*Schlagwörter*) がはたしている。これはある一定の感情音の陪音によって, 単にその表現によって表わされる以上のことを意味する表現である。例えば *völkisch* <民族的な>, *Goldwert* <金貨価値>, あるいは *Neutöner* <新傾向の音楽家> などは近代に出来たそ

のような符丁語である。なぜならそれらがきまった政治的、経済的あるいは芸術的な副次的観念を呼び起こすからである。もっと前の時代の場合はいわゆる物言う証拠（例えば *Wir lesen in neuester Zeit so gar viel von Fortschritten und Emanzipationen* 「我々はこの頃 Fortschritt〈進歩〉や Emanzipation〈解放〉という語に出くわす」 Griesinger, 1840), あるいは字間をあけたり、引用符のような印刷の手段が我々にヒントを与えないかぎり、そのような符丁語（色づけられた語（*farbige Wörter*）とも呼ばれる）の指摘は当該の時代の語法への注意深い感情移入がなければできない——現代の流行語については § 33 参照。

金言（*Geflügelte Worte*）は本書ではあまり問題にはならない。それらは詩人、作家、弁説家の語、大抵は句、文、詩句全体の引用である。G. Büchmann が一番完璧に彼の *Geflügelte Worte* の中でそれらを集めている。

固有名詞（*Eigenname*）（姓名、地名、民族名、家柄名）は本書ではついでに折にすこし触れることにとどめる。固有名詞は時代を通して多くの文化史的な追憶を運び続ける。これらや、河川湖沼、山、城の名前については Edw. Schröder, *Deutsche Namenkunde* 1944, 名前の流行については, F. Debus, *Soziologische Namengeographie*, in Mitzka, *Wortgeographie u. Gesellschaft* 1968.

先 史 時 代 の 遺 産

§ 9. 印欧語の原始時代

ドイツ語はゲルマン語の言語群の分枝として大語族、印欧語族（*Indo-germanische Sprachfamilie*）に属する。この印欧祖語は学問上構成されたものであり、歴史的に証明されたり、文献で伝承されたりしていない。我々はただこの祖語の音韻状態、形態組織、語彙を種々の印欧語から派生して文献上伝承されている諸言語の共通要素からほぼ確実と思われるところを推論するしかない（比較言語学）。いつ、どこで、誰によって、

この印欧祖語が話されていたかについては、大体のことしか述べる事が出来ない。少なくとも、この言語の担い手である印欧語の原民族がほぼ紀元前30世紀頃まで中部及び北ヨーロッパ（他の見解では西アジア）に居住していたことはかなり確実である。この原民族の文化段階は新石器時代の文化段階とみなされる。各種族に分裂した時期は新石器時代から初期青銅器時代への過渡期の文化段階と見なされる。恐らくこの原民族は先史研究によって出土品を基に縄文土器人、戦斧文化人として名づけられているのと同じ民族であろう。

印欧語の原民族の生活習慣について我々は多くを知らない。比較言語学はほぼ一世紀来印欧語の文化状態の再構成 (*Rekonstruktion der indogermanischen Kulturverhältnisse*) を試みて来たが、その際、すべてのあるいは少なくとも幾つかの印欧語言語資料群のなかで互いに同系の名前がつけられている事物はすでに原民族に知られていたにちがいない、反対にそのような語の類似がない場合は事物もなかったと推論してよいという前提に立っていた。しかし印欧諸語の特に初期の発展段階の極めて不完全な伝承では一定の語が特定の言語に欠如しても単に偶然事でありうるし他方印欧語族の諸分枝間の借用関係（さらに印欧祖語の非印欧語との借用関係）は少ししかわからないので、我々の逆推論の多くは不確かな土台の上になり立っている。その上に、あらゆる印欧諸語において、ある語幹が保持され、語形がそのままの形で残っていても、その意味は文化の発展全体に必然的に伴う変遷をこうむるのが普通であった可能性がある。意味の変遷は原初的な意味を見い出す手がかりを我々から奪ってしまう。それ故我々は文化史的な推論は慎重に受け入れ、それらに信を置くのは、ただそれらが考古学や民俗学の比較によってある程度支えられるときに限ろう。その結果は以下のようなものである。印欧語原民族は——以前の見解とは違って——一部のみ牧畜民（遊牧民）であった。本質的には、少なくともヨーロッパの居住地域では、定住の農民であった、彼らはかぎ鋤を使った単純な耕作方法しか知らなかったが、後には恐らくもっと程度の高い耕作方法も知ったであろう。主な穀物は大麦であった。ひょっとしてキビも知ら

れていたかもしれない。果物と野菜はまだ作られていなかった。印欧語民族は家畜の飼育を心得ていた。最も重要な家畜は、その毛が利用された羊、乳のために飼われていた山羊、耕作に役畜として役だった牛である。馬、犬、豚も知られていた、それに反してロバ、ラバ、猫、雌鶏（雄鶏ともどもまだホメーロスには出ていない）は知られていない。木や動物のいる森は印欧語族には馴染み深かった。共通語彙が示している木々の名は就中、中央ヨーロッパ、北ヨーロッパの森の木々である（Buche〈ブナ〉、Birke〈白樺〉、Fichte〈ドイツトウヒ〉、Föhre〈赤松〉）、それに加えて、Wolf〈狼〉、Fuchs〈キツネ〉、Elch〈オオシカ〉、Hirsch〈鹿〉、Hase〈ウサギ〉などの森の生き物、さらに Ente〈アヒル〉、Gans〈ガチョウ〉、Adler〈鷲〉、Kranich〈鶴〉、Star〈ムクドリ〉のような鳥。印欧語起源の魚名は少ししか証明されていない。鮭 Lachs は西印欧語人にのみ知られていた。しかしローマ人はこれを（地中海とそれに注ぐ川にはいない）ガリア人のもとで初めて知った。トカラ人はこの語をヨーロッパから東トルキスタンへ運んだが、そこにはこの魚はいず、魚一般にこの名をつけた。印欧語人の住居は木製の四角の家であって、その壁は編んだもの（Wand〈壁〉は winden〈巻く〉から派生している）で作られていた。馴らされた馬は就中乗用馬であった、役牛は（最初は二輪の、後には四輪の）車を引っ張った。印欧語人は小舟とかいを所有していたが航海民族ではなかった。海なるものは原民族のほんの一部しか知らなかったかもしれない。金属の中では銅だけがきっと知られていたであろう。鉄と鍛造はまだ知られていなかった。はちみつと大麦からアルコール飲料（Met〈はちみつ酒〉）が作られた。印欧語の同系関係は古代インド語 madhu〈はちみつ飲料〉によって確実となる。財産の尺度は家畜であった。家族共同体は家長制大家族であった。親族意識は印欧語時代にさかのぼる無数の親族の名称が証明するように、十分に発達していた。種族感情・部族感情も大いに発達した。婚姻の法関係は成立していた。しかしとくに畑仕事に従事していた婦人の地位は恐らくまだ自由ではなかったろう。法生活においては誓言、来客接待、かたき討ち、殺人賠償金が重大な役割をはたしていた。

印欧語人は宗教的観念を持っていた、しかし神々の中では天の神の名 (Zeus <ゼウス>, Jupiter <ユピテル>, Ziu <古代ゲルマンの軍神チュール> など) だけが印欧語の原始時代にさかのぼる。神々には犠牲が捧げられてた。死者は埋葬され、先祖は厚く敬われた。太陽、月、星、稲妻と雷のような天空の現象に注意が払われた。印欧語人には夏と冬の季節が知られていた。それに雪の現象も (このことは原民族が北に住んでいたことを示している)。Schnee <雪> という語はインド (古代インド語 *snēha-*) まで知られている。上述のことから明らかになった印欧語人の高い文化程度は、1 から 100 までの数が知られていたことから証明される。なにしろ今日なお 3 以上はほとんど数えることが出来ない原始民族がいるのだから。印欧語の数え方の基本形である十進法には所どころ別の数え方、特に十二進法の名残りが交わっている。

我々の今日の相続語 (Erbwort) の語彙の中で基礎語の 4 分の 1 弱が起源から言えば印欧語の原始時代に遡るであろう。しかもそれらは大部分、後に派生語・合成語を作り出す時に特に実り豊かであった。そのため我々の今日のまさしく重要な部分 (半数以上) があの古い土台の上に成立しているのである。原始時代に由来する最重要語のいくつかを列挙してみよう。しかし印欧語起源の重要語で古高ドイツ語時代にも存在していた語の多くを省かねばならない。例えば *ehu* <馬> (エムス川地方でのみ一才馬 (*ein-jähriges Pferd*) の代わりに使われている。lat. *equus*=griech. *hippos* (人名 *Philipp* =馬の友 (*Pferdefreund*, *Hippodrom* <馬術演技館>)), *gomo* <男> (*Bräutigam* <花婿> の中に保たれている), *quena* <女> (engl. *queen* 参照), *ou* <羊> (方言で *Au*, *Äue* <母羊>) など。

名詞: *Aar* <鷲>, *Aas* <腐った肉>, *Achse* <軸>, *Acker* <畑>, *Ader* <血管>, *Ahle* <突きぎり>, *Ahorn* <カエデ>, *Ähre* <穂>, *Angel* <釣り針>, *Arm* <腕>, *Asche* <灰>, *Ast* <大枝>, *Atem* <呼吸>, *Auge* <目>, *Balken* <角材>, *Bann* <魔力>, *Bär* <熊>, *Barsch* <ペルカ>, *Bart* <ひげ>, *Bauch* <腹>, *Beil* <手斧>, *Berg* <山>, *Biber* <カイリ>, *Birke* <白樺>, *Blatt* <葉>, *Blitz* <稲妻>, *Blume* <花>, *Bock* <雄山

羊〉, Braue 〈まゆ〉, Brei 〈かゆ〉, (Vieh-) Bremse 〈ウマアブ〉, Bruder 〈兄弟〉, Buche 〈ブナ〉, Bude 〈小屋〉, Bug 〈船首〉, Dach 〈屋根〉, Dachs 〈アナグマ〉, Dämmer 〈薄明り〉, Darm 〈腸〉, Daumen 〈親指〉, Deichsel 〈かじ棒〉, Diele 〈板〉, Donner 〈雷〉, Dorn 〈いばら〉, Drohne 〈ミツバチ〉, Drossel 〈ツグミ〉, Düne 〈砂丘〉, Dunst 〈もや〉, Eber 〈種豚〉, Egge 〈まぐわ〉, Ehe 〈結婚〉, Ehre 〈名誉〉, Ei 〈卵〉, Eibe 〈セイヨウイチイ〉, Eiche 〈カシ〉, Eis 〈氷〉, Elch 〈オオシカ〉, Elle 〈尺骨〉, Ende 〈終わり〉, Enkel 〈孫〉, Ente 〈アヒル〉, Erbse 〈エンドウ〉, Erle 〈ハンノキ〉, Esche 〈トネリコ〉, Espe 〈ハコヤナギ〉, Euter 〈家畜の乳房〉, Faden 〈糸〉, Falter 〈チョウ, ガ〉, Farn 〈シダ〉, Faust 〈にぎりこぶし〉, Feder 〈羽〉, Feind 〈敵〉, Feld 〈畑〉, Fell 〈毛皮〉, Felsen 〈岩〉, Ferkel 〈仔豚〉, Ferse 〈かかと〉, Feuer 〈火〉, Fichte 〈ドイツトウヒ〉, Fisch 〈魚〉, Flachs 〈亜麻〉, Fladen 〈パンケーキ〉, Flur 〈田畑〉, Flut 〈満潮〉, Fohlen 〈仔馬〉, Föhre 〈アカマツ〉, Frau 〈婦人〉, Freund 〈友〉, Fuchs 〈キツネ〉, Furche 〈うね間〉, Fuß 〈足〉, Futter 〈えさ〉, Galle 〈胆汁〉, Gans 〈ガチョウ〉, Garn 〈より糸〉, Gast 〈客〉, Gaumen 〈口蓋〉, Geier 〈ハゲタカ〉, Geiß 〈ヤギ〉, Ger 〈投げやり〉, Gerste 〈オオムギ〉, Gras 〈草〉, Hachse 〈ナックル〉, Halm 〈茎〉, Hals 〈首〉, Hase 〈兎〉, Haupt 〈頭〉, Haut 〈皮膚〉, Herz 〈心臓〉, Hirn 〈脳〉, Hirsch 〈鹿〉, Holz 〈木材〉, Honig 〈みつ〉, Horn 〈角〉, Huf 〈ひづめ〉, Hund 〈犬〉, Igel 〈ハリネズミ〉, Imme 〈ミツバチ〉, Joch 〈くびき〉, Kalb 〈仔牛〉, Kehle 〈のど〉, Kind 〈子供〉, Kinn 〈あご〉, Knie 〈ひざ〉, Kranich 〈鶴〉, Kuh 〈雌牛〉, Leder 〈皮〉, Leib 〈体〉, Lende 〈腰〉, Leute 〈人々〉, Licht 〈光〉, Linde 〈シナノキ〉, Lippe 〈くちびる〉, Lohe 〈炎〉, Luchs 〈オオヤマネコ〉, Lust 〈喜び〉, Magd 〈女中〉, Mähne 〈たてがみ〉, Mark 〈髄〉, Maul 〈口〉, Maus 〈ネズミ〉, Meer 〈海〉, Met 〈はちみつ酒〉, Milch 〈牛乳〉, Minne 〈愛〉, Mist 〈こやし〉, Mitte 〈中央〉, Mond 〈月〉, Mord 〈殺人〉, Mund 〈口〉, Mutter 〈母〉,

Nabe〈車輪中央のボス〉, Nabel〈へそ〉, Nacht〈夜〉, Nagel〈釘〉, Name〈名前〉, Nase〈鼻〉, Nebel〈霧〉, Neffe〈甥〉, Nest〈巢〉, Nestel〈締めひも〉, Niere〈腎臓〉, Ochse〈雄牛〉, Ohr〈耳〉, Osten〈東〉, Otter〈カワウソ〉, Rad〈車輪〉, Rat〈助言〉, Raub〈強奪〉, Rechen〈くま手〉, Riese〈巨人〉, Rind〈牛〉, Rinde〈木の皮〉, Rücken〈背中〉, Ruder〈かい〉, Ruhm〈誉れ〉, Salbe〈軟こう〉, Salz〈塩〉, Sau〈雌豚〉, Schar (Menge)〈群れ〉, (Pflug-) Schar〈すきべら〉, Schein〈外見〉, Schnabel〈くちばし〉, Schnee〈雪〉, Schnäher〈義父〉, Schwan〈ハクチョウ〉, Schwester〈姉妹〉, Sehne〈筋〉, Seil〈綱〉, Sieg〈勝利〉, Sippe〈部族〉, Sommer〈夏〉, Sonne〈太陽〉, Specht〈キツツキ〉, Sperling〈スズメ〉, Star〈ムクドリ〉, Stern〈星〉, Stier〈種牛〉, Stirn〈額〉, Strang〈綱〉, Strom〈大河〉, Tag〈日〉, Tanne〈モミ〉, Tau〈露〉, Teig〈こね粉〉, Tochter〈娘〉, Tor〈門〉, Torf〈泥炭〉, Tür〈扉〉, Ufer〈岸〉, Unke〈ボンビナ〉, Vater〈父〉, Vieh〈家畜〉, Wabe〈ハチの巣〉, Wachs〈ワックス〉, Wasser〈水〉, Wechsel〈変化, 交換〉, Weg〈道〉, Welle〈波〉, Werk〈仕事〉, Widder〈雄羊〉, Wind〈風〉, Wolf〈狼〉, Wolle〈羊毛〉, Zahn〈歯〉, Zähre〈涙〉, Zangl〈やっところ〉, Zunge〈舌〉。

形容詞: arm〈貧しい〉, barsch〈無愛想な〉, dünn〈薄い〉, ehern〈青銅の〉, eigen〈自分自身の〉, eng〈狭い〉, falb〈淡黄かっ色の〉, faul〈腐った〉, feil〈売り物の〉, fern〈遠い〉, frei〈自由の〉, gelb〈黄色の〉, hart〈かたい〉, jung〈若い〉, kalt〈冷たい〉, lang〈長い〉, lieb〈好きな〉, minder〈より劣った〉, mitten〈真中の〉, mürbe〈もろい〉, nackt〈裸の〉, neu〈新しい〉, queck〈元気な〉, (Quecke〈カモジグサ〉参照せよ), roh〈生の〉, rot〈赤い〉, süß〈甘い〉, stark〈強い〉, still〈静かな〉, toll〈狂った〉, weiß〈白い〉, weit〈広い〉。

動詞: bauen〈建てる〉, beißen〈かむ〉, bieten〈差し出す〉, binden〈結ぶ〉, bohren〈穴をあける〉, dulden〈耐え忍ぶ〉, essen〈食べる〉, fahren〈行く〉, falten〈たたむ〉, fechten〈闘う〉, flechten〈編む〉,

fragen 〈問う〉, frieren 〈寒い〉, fühlen 〈感ずる〉, gären 〈発酵する〉, gehen 〈行く〉, hehlen 〈隠匿する〉, heischen 〈請う〉, hinken 〈びっこを引く〉, husten 〈せきをする〉, kiesen 〈選ぶ〉, kommen 〈来る〉, können 〈出来る〉, leihen 〈貸す〉, liegen 〈横たわっている〉, mahlen 〈挽く〉, mahnen 〈警告する〉, säen 〈種をまく〉, sagen 〈言う〉, schauen 〈見る〉, scheren 〈刈る〉, schieben 〈挿す〉, schneien 〈雪が降る〉, schweben 〈漂う〉, schwellen 〈ふくれる〉, schwirren 〈ブーンとうなる〉, schwitzen 〈汗をかく〉, sehen 〈見る〉, seihen 〈こす〉, sein 〈ある〉, sitzen 〈腰かけている〉, spähen 〈うかがう〉, springen 〈跳ぶ〉, stauen 〈せきとめる〉, stehen 〈立っている〉, steigen 〈登る〉, sterben 〈死ぬ〉, stöhnen 〈うめく〉, tun 〈行なう〉, wachen 〈目覚める〉, weben 〈織る〉, wehen 〈風が吹く〉, wehren 〈妨げる〉, weichen 〈譲る〉, werden 〈～になる〉, wissen 〈知っている〉, wollen 〈欲する〉, zähmen 〈馴らす〉, zehren 〈かじる〉, zeihen 〈罪を問う〉, ziemen 〈ふさわしい〉。

代名詞 : der 〈その〉, dich 〈君を〉, du 〈君は〉, er 〈彼は〉, ich 〈私は〉, mich 〈私を〉, sich 〈自らを〉, sie 〈彼ら（彼女）は〉, uns 〈我々を〉, wer 〈誰が〉, wir 〈我々は〉。

数詞 : eins 〈1〉 から zehn 〈10〉, hundert 〈100〉, viel 〈多くの〉。

§ 10. ゲルマン共同体

ゲルマン人 (Germanen) は最初に古代人の書に登場した時には、もうすでに民族・言語単一体として印欧語原民族から分かれていた。ゲルマン語のきわだった特徴である閉鎖音の推移（いわゆる第一、又はゲルマン語子韻推移）と移動自由な語アクセントの幹音節への限定は初期ゲルマン語の語と名前の中ですでに形成されていた。ゲルマン人が歴史へ登場した最初から諸部族に分れて現れたように、最初のゲルマン民族の言語的記念碑も多様な方言の形で姿を見せる。古典作家が伝えている幾つかの名前と語のほかには、我々はゲルマン共同体時代の語形式を知らない。道具と武器

に書かれているいくつかのルーネ文字はかなり共通祖語に近い。ゲルマン民族は出土品から見て恐らく昔からスカンジナビア半島の南部と北海及びバルト海の岸から北ドイツの低地にかけて居住していたが、後にはメイン川とドナウ川の南まで広がった。そこには以前ケルト人が住んでいたし、さらにイリュリア人も考慮される。ゲルマン人は後に南へ移ったイタリア人と古くから近隣関係にあったので青銅を表わす語を共有している。それは我々の *ehern* 〈青銅の〉 (Kluge, Wb.) の中に保たれている。ケルト人との隣人関係は比較的新しい。鉄を表わす語を両方とも共通している。これは恐らくイリュリア語から借用したであろう。イリュリア人の文化レベルは、本来は青銅器時代のレベルにあったが、ローマ人と接触した頃は鉄使用の文化レベルであった。

語彙においてゲルマン語は、幾多の印欧語語幹 (*pō* 〈飲む〉, *do* 〈与える〉 など) を失なったが重要な新語を提供している。それらは発達した経済形態、軍事に関する領域の概念、道德及び宗教観念などを表わす語の豊かな形成力において明らかである。ゲルマン語時代に出来た語は今日のすべてのドイツ語語彙のほぼ4分の1とみなされて来た。本質的に穀物耕作 (Getreidebau) と牧畜 (Viehzucht) に基づいていたゲルマン人の経済状態はたとえば次のようなゲルマン語の特性を明確にしている。

Beere 〈実〉, *Bohne* 〈豆〉, *braten* 〈焼く〉, *Brot* 〈パン〉, *dengeln* 〈ハンマーで打って切れ味をよくする〉, *Distel* 〈アザミ〉, *Dotter* 〈卵黄〉, *Dung* 〈こやし〉, *Fleisch* 〈肉〉, *hacken* 〈堀り砕く〉, *Harke* 〈くま手〉, *Hechel* 〈すきぐし〉, *Hede* 〈麻くず〉, *Hengst* 〈雄馬〉, *Herd* 〈かまど〉, *Kalb* 〈仔牛〉, *Krippe* 〈かいばおけ〉, *Lamm* 〈小羊〉, *Leder* 〈革〉, *Mähre* 〈駄馬〉, *Roß* 〈馬〉, *rösten* 〈あぶる〉, *Schaf* 〈羊〉, *Schinken* 〈ハム〉, *sieden* 〈沸かす〉, *Speck* 〈脂身〉, *Speiche* 〈車輪の幅〉, *Talg* 〈脂〉, *Wachs* 〈ワックス〉, *weiden* 〈放牧する〉 など。

Hahn 〈雄鶏〉, *Huhn* 〈鶏〉, *Henne* 〈雌鶏〉, *Taube* 〈ハト〉 のような家禽 (Geflügel) を家畜として知っていた、さらに森の鳥として *Ente* 〈アヒル〉 と *Gans* 〈ガチョウ〉 もすでに前ゲルマン語時代に知られてい

た。森のたくさんの動物と鳥が共通ゲルマン語の名で登場する: Iltis <ニオイネコ>, Marder <テン>, Rabe <カラス>, Reh <シカ>, Wiesel <イタチ>, Wisent <バイソン>, Ur <野牛>, Habicht <オオタカ>, Häher <ミヤマカケス>, Reiher <サギ>, Storch <コウノトリ>。住まいに関して, 新しい, 豊かな語彙が登場する (例えば, Bank <ベンチ>, Bett <ベット>, Bohle <厚板>, Brett <板>, Esse <煙突>, Fach <わく>, First <棟>, Flett <炬を切った土間>, Halle <広間>, Hof <中庭>, Kofen <小屋>, Laube <亭>, Saal <広間>, Sparren <たる木>, Span <木っば>, Wand <壁> など) が, 石材建築を表わす表現がまだ全くない (Esse <煙突> と Flett <炬を切った土間>, Tenne <打穀場> は粘土で作られていた) のが特徴的である。木造建築が普通であった。わらと粘土をまぜて作った丸太骨組としての本骨作りは民族移動時代に古代ザクセン人によって考え出された。我々の祖先の戦争好きは Waffe <武器>, Spieß <槍>, Schwert <剣>, Schild <楯>, Helm <かぶと>, Bogen <弓>, Schleuder <投てき器>, Strauß <争い>, Fehde <私闘>, Friede <平和>, raufen <引き抜く>, ringen <格闘する>, folgen <追う>, fliehen <逃げる>, zwingen <強要する>, (auf-) spüren <嗅ぎ出す>, feige (第一に totwund <致命傷を負った> の意) などの新語の中に反映している。ここでゲルマン語の人名 (Personenname) にも言及しておこう。人名の (印欧語時代に由来する) 二分節の形成方法は, Kampf <戦い>, Sieg <勝利>, Heer <軍隊>, Ruhm <名誉> などの基礎語をしばしば利用している。例えば Günter (= Gundahari は "Kampf,, <戦い> と "Heer,, <軍隊>), Segimerus は "siegberühmt,, <勝利の誉れ高い>, Hildebrand と Hadubrand は "Kampfschwert,, <戦闘用刀>, Ludwig は "kampfberühmt,, <戦いに名をはせた>, Gernot は "Speergenosse,, (低地ドイツ語) <槍仲間>, Notger は "Speerschwung,, <槍振り>。女性の名前も同じ考えから出ている, ただししばしば男性の名前から派生している: Brünhild (= "Brünne,, <鎖よろい> + "Kampf,, <戦い>), Kriemhild (= "Helm,, <かぶと> + "Kampf,, <戦い>), Hedwig (= "Kampf,, <戦い> +

"Kampf,, <戦い>), Hildegund (Hedwig に同じ)。この際、男性の名前でもそうであったが、二分節された名前の上記の分節は数世代の連続の中でかなり前の縁者（祖父母など）の名前からって子供たちのために組み合された。

ゲルマン人の発達した法生活 (Rechtsleben) を Adel <貴族>, Bann <禁制>, Dieb <どろぼう>, dienen <仕える>, Ding (起源的には審理) rügen <処罰する>, Sache (起源的には係争, 訴訟), schwören <誓約する>, sühnen <償う>, Volk <民族>, Wirt <家長> などの新語が証明している。古フランク地方では法律語として urkund <証人, 証言>, urteil <判決> が登場する。身分上の区分を表わす表現は早く登場する: König <王>, Graf <伯爵>, Herr <領主>, Herzog <将軍> など。倫理及び宗教観念を表わす新語は多様である。それらは具体的に把握できるものから抽象的なものへの言語の移り変りを示している。arg <悪い>, besser <より良い>, blöde <弱い>, Ernst <まじめ>, frech <あつかましい>, Furcht <恐れ>, Geist <精神>, Gott <神>, Grimm <憤怒>, gut <良い>, Haß <憎しみ>, hehr <神々しい>, Himmel <天国>, hold <好意を抱いた>, Hölle <地獄>, Neid <嫉妬>, Ruf <世評>, Ruhm <名誉>, Seele <魂>, Spuk <幽霊>, träge <怠慢な>, trauern <悲しむ>, Treue <忠実>, Wunder <奇跡>, Zauber <魔法> など。共通ゲルマン語の神々の名前は Ziu (別名 Thingsus <民会, 法の神>, これから Dienstag <火曜日> が出来た, シュヴァーベンではいまだ Ziestag <Ziu の日> と言われている), Donar (農夫の神) である。一方 Wodan (詩人と戦士の神, Wut <憤怒> に由来する。ギリシアのディオニュソスの祭礼における聖なる憤怒と比べよ) と Nerthus (地の女神) は第一に部族の神にすぎなかった。人名の形成方法がすでにしばしば法的なものへの移行を示していたように、今や Lied <歌> と singen <歌う> のような語も名前に登場する。

ゲルマン語の語彙にとって特徴的なのは、航海 (Seefahrt) と漁業 (Fischfang) に関するさらに数々の新語である。例えば, Aal <ウナギ>,

Dorsch <大タラ>, Ebbe <干潮>, Fock <前しよう下帆>, Hafen <港>, Haff <人江>, hissen <揚げる>, Jolle <はしけ>, Kahn <はしけ>, Kiel <竜骨>, Klippe <岩礁>, leck <水が漏れる>, Lee <風下>, Luke <ハッチ>, Möwe <カモメ>, Nachen <小舟>, Netz <網>, reffen <縮帆する>, Reede <停泊地>, Reuse <やな>, Rogen <はらご>, Schiff <船>, schwimmen <泳ぐ>, See <海>, Segel <帆>, Spiere <円材>, Stange <さお>, Steuer <かじ>, Stint <ワカサギ>, Strand <浜>, Sturm <あらし>, Takel <複滑車>, Tran <鯨油> など。方位を表わす名前も航海したゲルマン人によって作られた (Nord <北>, Ost <東> Süd <南>, West <西>)。

限られた印欧語の数組織 (Zahlensystem) は千 (起源的には「大きい百」) の単位で増えてゆく。時間算定 (Zeitrechnung) では夜を基とした数え方が昼を基としたそれよりも大きな役割をはたしている (近代英語の fortnight <二週間>, ドイツ語方言の heint <今日>, Fastnacht <さんげ火曜日>, Weihnacht <クリスマス>などを参照せよ)。一年を月に分けることはすでに印欧語時代から行なわれていた, しかしゲルマン祖語の月名はない。

ゲルマン人の言語の借用関係 (Lehnverhältnisse) については, すでに幾多の借用がなされていた先史時代のそれよりも詳細に述べる事が出来る。たとえば Erz <鉱石>, Silber <銀>, Hanf <アサ>, Linse <レンズ>, Rübe <セイヨウアブラナ>, Affe <猿>, Krug <かめ>などの語は非印欧語からの借用語であるようだ。青銅器を作るためにどうしても必要な銅はキプロス島 (ギリシャ語 kýpros) にちなんで名づけられている。ゲルマン人は原始時代にフィンランド人にかなりの数のゲルマン祖語を提供している。しかし, フィンランド語のゲルマン語への借用は証明されていない。ゲルマン語の語彙とケルト語の語彙に見られる一連の共通性の一部は両方の民族の近隣関係に基づいていると言えるだろうし (Eid <誓い>, Erbe <相続人>, frei <自由な>, Geisel <人質>, Rune <ルーネ文字>, Lot <下げ鉛>, Mähre <駄馬> など), 一部はその際ケルト語から

の借用が関係してくる (Amt <官職>, Reich <帝国>, 恐らく Eisen <鉄> も。これはケルト人の間で早くも発達した製鉄技術を示す証拠である)。welsch <南ヨーロッパの> (起源的には <ケルトの> (これに関して Walnuß <クルミ> = welsche Nuß) もまたケルト語に由来する (ヴォルカエというガリア民族)。

民族大移動の数世紀にわたって、特に軍事、建築、日常生活に関する数多くの語が西ゲルマン語からローマの属州のロマンス語の俗語に流れ込みそれ以来ロマンス語の語彙として定着している。Alighieri (alh <聖殿>, ger <投げ槍>), Garibaldi (Ger <投げ槍> + bald <大胆な>) のようなゲルマン語起源のイタリア語名, Alfons (adel <高貴な> + funs <功名心の>) のようなスペイン語名を参照せよ。

地中海文化の影響

§ 11. ローマ人の文化

ドイツ語はカール大帝の時代から残されている古高ドイツ語の文学的記念碑の中に登場する前に、紀元後数百年にわたって二つの連続する影響をこうむった。それらは今日まで語彙の中にはっきりとその痕跡をとどめている。即ちローマ文化の世界 (römische Kulturwelt) とキリスト教 (Christentum) の影響である。

ゲルマン世界と古代文化 (antike Kultur), 特にローマ文化との接触はほぼカエサル時代、第一次帝制期の時代に始まり、ドナウ川、ライン川、エルベ川の間での不安定な戦闘の後に緊密な技術、経済、特に文化の交流へと連がる。そのあともうすでに三世紀初頭以来ゲルマンの種族、つまりフランク人とアレマン人の新しい大種族はすごいきおいで、ライン川とドナウ川を渡り、ローマ帝国の属州に入り、古代文化の遺産を相続した。いかに強くローマの生活習慣がゲルマン世界に受け入れられたかを、我々は数々の歴史的例証から知っている。なぜならゲルマン世界の解放者さえ、かつてのローマの将校そして市民としてラテン語を解し、そして無

数のゲルマン人がローマの軍隊に服したのだからである。そこで彼らはローマ人の名前さえ付けた、そればかりかトラヤヌスの時代にはローマ帝国内のゲルマン属州の裁判は部分的に通訳の手を借りずにラテン語でなされた。

このように密接な文化の接触は言語にその痕跡を残すにちがいない。ローマ文化の優越性は特に軍事組織 (Militärorganisation), 行政 (Verwaltung), 司法 (Rechtspflege), 商業 (Handel), 日常生活 (Lebenshaltung) の領域にかかわっているので, ドイツ語の語彙のこれらの領域も特にラテン語の借用語によっている。ローマの文化が学問と芸術の点ではゲルマン人にほとんど影響を与えなかったということは, 恐らくそれらの借用語の伝達者であったローマの国境守備隊の兵士とその部下たちが社会的及び文化的な面においてあまり高い立場ではなかったことと, ゲルマン民族のような原始的な民族は何はさておき外来の精神構造にあまり敏感に反応しなかったことによるであろう。とりわけ, スイスまで何百年にもわたって植民者として開墾地や山岳地へ移動したアレマン人は大方農民であった。このことは本質的にフランク人にもあてはまる。しかしフランク人の指導者たちはローマ権力の相続者となった。

ラテン借用語のドイツへの移入の起点が上部イタリアとアルプス越えの道であったのはごくわずかにすぎない。借用語の大部分はライン川中流と下流域でローマ化されたガリアからゲルマン語に移入された。その際モーゼル川とマース川は主要移入路として, また帝都トリーアはきわめて重要な伝播地として考慮される。

ラテン語がゲルマン語に影響を与えた強さのほどは約 600 ほどのゲルマン語に入り込んだラテン語の借用語を証明することが出来ることから, そしてこれらの語が, その派生語形成力からみて, もはや今日外来語として感ぜられないほど, ほとんど例外なくドイツ語の中に強く定着していることから明らかなである。ラテン借用語が 6 世紀来の第 2 次, いい換えれば古高ドイツ語子音推移をたいてい受けているということ, 音韻状態が一部の語はまだ後期俗ラテン語の特徴を示していないということ, 借用関係

がドイツ語の語幹のみならず、アングロサクソン人（一部は北ゲルマン人にさえ）にまでも及んでいることから移入の時期が特徴づけられる。これらの借用語のたいていの受容の時期として、1世紀から5世紀までの間が挙げられる。

きわめて重要なラテン借用語の種類は、文明のいかに新しい領域がまるまるゲルマン人のためにローマ人を介して開かれたかを示している。ローマ軍との戦いと後のローマ軍隊内における軍務がローマ軍の組織 (*römische Militärorganisation*) を知らしめた。

Pfeil 〈矢〉 (ラテン語 *pilum* 〈投げやり〉), *Drache* 〈竜〉 (ラテン語 *draco* 〈竜〉, 歩兵隊の印として), *Wall* 〈土塁〉, (*Schanz-*) *Pfahl* 〈(防御) さく〉, *Kastell* 〈出城〉 (マインツ近郊のカステル (*Kastel*) のような地名の形で, ベルンカステル (*Bernkastel*)), *Straße* 〈道路〉, *Meile* 〈マイル〉 など。 *Kampf* 〈戦い〉 (ラテン語 *campus* 〈広場〉) のようなごくありふれた語でさえ借用されている。しかしこの領域の借用はあまり多くない。戦いにたけたゲルマン人がこの点で多くを学ぶ必要はなかったことの証拠である。

ローマの行政 (*Verwaltung*) と裁判 (*Rechtsprechung*) はライン川とドナウ川地帯で次のような語の中に反映している。

Kaiser 〈皇帝〉 (ラテン語 *Caesar* 〈カエサル〉, 一番古いラテン借用語), *Zoll* 〈関税〉, *Zöllner* 〈収税吏〉, *Kerker* 〈牢獄〉, *Kette* 〈鎖〉, *sicher(n)* 〈確かな (確実にする)〉, *kosen* 〈かわいがる〉 (起源的には法律語で「訴訟を起す」, ラテン語 *causari* 〈口実とする〉), *Pacht* 〈租保料〉, *pachten* 〈賃借りする〉, *pfand* 〈質〉 など。

ライン川とドナウ川でのローマの河川航行 (*Flußschiffahrt*) に関して *Anker* 〈錨〉, *Riemen* 〈オール〉 (ラテン語 *remus* 〈オール〉), *Naue* 〈小船〉 (Schiller の「ウィルヘルム・テル」ではまだこの意味で使われている: *Zieh die Naue ein* 〈小船を入れよ〉) のような語が浮んで来る。

ローマの行商人と軍隊専属商人は、自然経済でたかだか限られた物々交換しか知らなかったゲルマン人にドイツ語の商人語 (*Kaufmannspra-*

che) を仲介した。kaufen 〈買う〉, Kaufmann 〈商人〉 (ラテン語 caupo 〈酒屋の主人, 商人〉), Markt 〈市場〉, Speicher 〈倉庫〉, Kiste 〈荷箱〉, Korb 〈かご〉, Münze 〈硬貨〉, Pfund 〈ポンド〉, Sack 〈財布〉, Unze 〈オンス〉 など, 彼には Zins 〈利子〉, さらにぶどう酒売買の表現も, おそらくまだゲルマニアの地でのローマの駐とん地でぶどう栽培が行なわれる前であったろう: Wein 〈ぶどう酒〉, mischen 〈混合する〉, eichen 〈度盛りする〉 (ラテン語 aequare 〈等しくする〉), Eimer 〈バケツ〉 (ein にギリシア語・ラテン語 amphora 〈取っ手が二つある壺〉 が加わって出来た。zweiheknlig 〈二つの取っ手の〉: Zuber 〈手おけ〉), Kelch 〈台付きグラス〉, Becher 〈グラス〉 など。ぶどう栽培の語については, E. Schwarz: Goten, Nordgermanen, Angelsachsen 22; Keltisch-gotisch-lateinscher Weg, E. Alanne: Die deutsche Weinbauterminologie in ahd. u. mhd. Zeit 1950 (Kluge の Etymologisches Wörterbuch による)。Esel 〈ロバ〉, Maultier 〈ラバ〉, Saumtier 〈荷獣〉 のような運送畜の名前もこの時期にラテン語からドイツ語にとり入れられた。

木 (丸太, わく組み, あみ壁) の家に住んでいたゲルマン人たちはローマの国境駐とん地で石造り (Steinbau) (Mauer 〈石べい〉, ラテン語 murus 〈壁〉 から) の技術を知った, それを彼らは, ラテン語の専門用語を使ってじきにまねた:

Ziegel 〈れんが〉 (ラテン語 tegula 〈かわら〉 から, これは第2次子音推移の後もう一度借用され Tiegel 〈るつぼ〉 となった), Kalk 〈石灰〉, mauern 〈石べいを築く〉, Söller 〈バルコニー〉, Estrich 〈たたき床〉, Pflaster 〈敷き石〉, Kammer 〈室〉, Kachel 〈カッヘル〉, Keller 〈地下室〉, Pforte 〈門〉, Pfeiler 〈柱〉, Fenster 〈窓〉, Speicher 〈倉〉, tünchen 〈水しっくいを塗る〉, さらに Pfosten 〈支柱〉, Schindel 〈こけら板〉 などの付属品も。

ライン川, ドナウ川, マイン川地帯でローマ人から見覚えたぶどう栽培 (Weinbau) は農耕 (Bodenkultur) の改革の中できわめて大きな役割をはたした。ほとんどすべてのぶどう栽培の用語は, ぶどう酒という名前

(Wein) 自体から, ラテン借用語である:

Winzer <ぶどう栽培農家>, Most <ぶどう汁>, Kelter <ぶどう絞り器>, Presse <加圧機>, Trichter <じょうご>, Spund <栓>, Bottich <桶> (これから後に Böttcher <桶屋> が出来た), Ohm <オーム>, Kufe <桶> (これから後に Küfner <桶屋> が出来た), Flasche <びん>, Pech <ピッチ>, Essig <酢>, mischen <混ぜる>, Sexter <立方体> (Hohlmaß <液量>), Lägel <ぶどう酒作りが飲む容器>, Kelch <台付き杯>, Becher <グラス>, Eimer <バケツ>, Kübel <バケツ> (これについては数々の方言がある) など。

畑作 (Ackerbau) も新しい刺激を受ける:

Wicke <カラスエンドウ>, Forke <長柄のくま手>, Kolter <鋤の刃>, Miete <むろ>, (Dresch-)flegel <からざお>, Wanne <箕>, Stiel <茎>, Stoppel <残り株>, Sichel <刈鎌>, Frucht <実>, Kicher(erbse) <ひよこまめ> など。

栽培野菜 (Gartengemüse) と果物 (Obst) の栽培は完全にローマの影響に帰する:

Kohl <キャベツ> (ラテン語 *caulis* <茎> から。キャベツ類の故郷は地中海地帯), ドイツ騎士団の言葉で, 東プロイセン方言で Kumst <キャベツ> (ラテン語 *compositum* <申し合わせ> から, 古高ドイツ語 Kompost <肥料> 以来, フランス語から Kompott <コンポット> としての別の意味を持って借用された), ライン・ヘッセン方言では Kappes <キャベツ> (ラテン語 *Caputea* <頭状花> から), Beete <ビート>, Rettich <大根>, Minze <ハッカ>, Kümmel <ヒメウイキョウ>, Senf <カラシナ>, Fenchel <ウイキョウ>, Kerbel <パセリ>, Lorbeer <月桂樹>, Kirsch <さくらんぼ>, Pflaume <ハタンキョウ>, Quitte <マルメロ>, Pfirsich <モモ>, Maulbeere <クワの実>, Mispel <セイヨウカリン>, Kastanie <クリの木>, Feige <イチジク>, Mandel <アーモンド>, Kürbis <カボチャ> など, これに加えて園芸用語 pfropfen <つぎ木する>, impfen <つぎ木する>, veredeln <改良する> (この語地理は Zs. f. Mundart-

forschung 1951に載っている) の代わりにバイエルン方言 *pelzen* 〈つぎ木で改良する〉(それぞれラテン語 *propagare* 〈広げる〉, *imputo* 〈課する〉, *impeltare* 〈ラベルを付ける〉 から), *Pflanze* 〈植物〉, *pflücken* 〈摘む〉 など。

家禽の飼育は改良される (*Pfau* 〈クジャク〉, *Fasan* 〈キジ〉), 特に商品としてローマ人に評価されている羽根の利用: *Flaum* 〈綿毛〉, *Pfuhl* 〈まくら〉, *Kissen* 〈クッション〉, *mausern* 〈毛が抜け替わる〉 などは借用語である。ゲルマン語の馬 (*Roß*) は新しい名 *Pferd* (ガロロマン語 *paraverēdus*) を得た。この名は郵便馬に使われていることを暗示している。

料理法 (*Kochkunst*) はローマの影響の下に発展した。ゲルマン語語源の *Topf* 〈つぼ〉, *Napf* 〈はち〉, *Sieb* 〈ふるい〉, *Quirl* 〈あわだて器〉, *Messer* 〈ナイフ〉, *Löffel* 〈スプーン〉, *braten* 〈焼く〉 そして *sieden* 〈沸かす〉 を除いて, 料理用語はほとんどすべてローマ起源であり, ここに述べた時代にローマ人を介して, あるいは後に古典から影響を受けた修道院文化を介して現代に及んでいる。初期の借用語として *Küche* 〈台所〉と *kochen* 〈料理する〉, その後 *Becken* 〈浅ざら〉, *Pfanne* 〈フライパン〉, *Kessel* 〈釜〉, *Schüssel* 〈深ざら〉, *Tisch* 〈卓〉 (まずギリシア語で *diskos* 〈円盤〉, スポーツの *Diskus* 〈円盤〉を参照), *Semmel* 〈ロールパン〉 (ラテン語 *simila* 〈細かい小麦〉, *Mühle* 〈水車小屋〉などを挙げておこう。

家具 (*Hausgerät*) と衣服 (*Kleidung*) における生活態度もローマ人からいろいろな刺激を受けた。すでに挙げた石造建築の用語は住居に関する改良を示している。上に挙げた以外にもラテン借用語がある: *Schemel* 〈腰掛け〉, *Fackel* 〈たいまつ〉, *Kerze* 〈ろうそく〉, *Spiegel* 〈鏡〉 など。さらに衣服が改良された: *Socke* 〈短靴下〉, *Sohle* 〈靴底〉, *Schürze* 〈前掛け〉, *Stopfen* 〈詰める〉, *Strippe* 〈皮帯〉, *Kunkel* 〈糸巻き棒〉, *Karde* 〈チーゼル〉 など。一般的な文化語として *Pfeife* 〈笛〉と *Fiedel* 〈フィーデル〉, *Arzt* 〈医者〉, *Fieber* 〈熱〉, *Pflaster* 〈こう薬〉, *Bü-*

chse <つぼ>などを挙げよう。

これらの語がほとんど例外なく具体的に把握出来る物、つまり物質生活の対象に関係していることがわかる。抽象的な概念、つまり精神的ないし倫理的な意味内容の語はそこにはない。ラテン語を模倣した曜日の名前も古典の遺産として再び挙げられうる、古代の筆記文化 (Schreibkultur) は借用語の中で反映されている: schreiben <書く> (ラテン語 scribere <書く>), dichten <創作する> (ラテン語 dictare <たびたび言う>, 新しい借用語 diktieren <書き取らせる>の方がもっと近い)。Tinte <インク> (ラテン語 tincta <染められた物>, その外に § 14参照)。

§ 12. 最古ゲルマン人のキリスト教

ローマ文化の影響より少したって、古代人によって広く広められたキリスト教 (Christentum) の影響はゲルマンの世界へ及んだ。キリスト教に帰依した最初のゲルマン人は西ゴート人 (Westgoten) であった。彼らの司教ウルフィラ (Wulfila 383年歿) はすでに4世紀に聖書をギリシア語からゴート語に翻訳した。幾つかの西ゲルマンの種族にもすでにもうキリスト教が入り込んだ、しかしドイツの種族の大方はもっとおそくなってつまり7, 8世紀にアイルランドとアングロサクソンの伝道者によってキリスト教化された。

しかしすでにその前に初期のゴート・アリウス派のキリスト教の痕跡が今日のドイツに住んでいたゲルマン種族、特にドナウ河流域地帯のその生活と同時に言語にも入っていたようだ。なぜならば、ドイツ語における教会語の語彙の中には、音韻形態からみて非常に早く取り入れられたにちがいなく、またドイツ語にもゴート語の教会語にもある多数の表現が見られる。明らかにアリウス派のゴート人を介して南からドイツの南東へ、東ローマの教会用語としてドイツの種族へ、特にバイエルン族に持ち込まれたギリシア語起源のキリスト教の借用語の最古の層には次のような語が挙げられる: Christ <キリスト教徒> (古高ドイツ語の綴字法では Krist), Pfaffe <司祭> (ギリシア語 papās から), Pfarre <教区> (ギリシア語・

ラテン語 *parochia* から), *Engel* 〈天使〉 (ギリシア語 *ángelos*), *Teufel* 〈悪魔〉 (ギリシア語 *diábolos* から), *Pfingsten* 〈聖霊降臨祭〉 (ギリシア語 *pentēkolte* 〈50日目〉), *Samstag* 〈土曜日〉 (ギリシア語 *sábaton* から, 俗ギリシア語 *sámbaton*), 並びに翻訳借用語 *fasten* 〈断食する〉, *taufen* 〈洗礼を施す〉, ひょっとしたら *Heide* 〈異教徒〉 もこれに入るかもしれない。

これと並んで, ライン流域地帯のローマ属州においての初期のローマのキリスト教にさかのぼる若干のキリスト教関係の借用語がある。これに恐らく *Kirche* 〈教会〉 (起源はギリシア語 *kyri/a/kón*, *kyrios* 〈主人〉から), *Bischof* 〈司教〉 (起源はギリシア語 *épiskopos* 〈監督者〉), *Almosen* 〈喜捨〉 などが属するであろう。

dulden 〈耐え忍ぶ〉, *sich freuen* 〈喜ぶ〉, *klagen* 〈嘆く〉, *trauern* 〈悲しむ〉, *zeigen* 〈示す〉, *zweifeln* 〈疑う〉, *Trost* 〈慰め〉, *erbarmen* 〈同情の気を起こさせる〉, *barmherzig* 〈慈悲深い〉, *Gnade* 〈恩恵〉, *Demut* 〈謙譲〉 などのような語によって特徴づけられている上部ドイツ語の伝道語はドナウ川を上り, ライン川を下って進み, ライン河中流及び下流地帯でフランケン・ライン教会語と出会う。この教会語は *Propst* 〈司祭長〉 (俗ラテン語 *propositus*), *Priester* 〈司祭〉 (ギリシア, ラテン語 *presbyter*), *Pfründe* 〈聖職禄〉 (ラテン語 *praebenda*), *Kloster* 〈僧院〉 (ラテン語 *claustrum*, しかし最近では *Klausur*), *Mönch* 〈修道士〉 (ギリシア・ラテン語 *monachus*, *München* 〈ミュンヘン〉, 中部フランケン方言 *Mönchen* 〈-Gladbach〉 を参照), *Münster* 〈大聖堂〉 (ギリシア・ラテン語 *monasterium*), *Glocke* 〈鐘〉 (中世ラテン語 *clocca*, ケルト語から), *segnen* 〈祝福する〉 (ラテン語 *signare*) などのようなラテン借用語を持っていた。アングロサクソンの伝道団は, 上部ドイツの教会語によって作られた表現 *wih* 〈神聖な〉 (依然 *Weihnacht* 〈聖夜〉 の形で残されている) + *ātum* 〈息〉 (ラテン語 *spiritus* の翻訳として) に対立して *der Heilige Geist* 〈聖霊〉 という表現を押し通し, アングロサクソン語から借用して *Heiland* 〈救世主〉 (ラテン語 *salvator*

の翻訳借用語) をもたらした。

初期のドイツの教会語はこうして数々の伝道団の統合から出来上がっており、個々の語の起源については最終的に明らかにされ得ない。教会語はその最終的な形態を11世紀にまで下る古高ドイツ語時代になって初めて得た (§ 14参照)。

古 ド イ ツ 語 時 代

§ 13. 語彙における遺産

カロリング朝以前の文献がほとんど伝承されていないとはいえ、8世紀からドイツのみならず、西ゲルマン人(アングロサクソン人、古ザクセン人)に現われる発達した詩語(Dichtersprache)から、アングロサクソン人とザクセン人がイギリスに渡る(450年頃)以前、かつ第2次子音推移(6世紀)から高地ドイツ語と低地ドイツ語を分ける以前の共通西ゲルマン語の時代にすでに英雄詩のための発達した西ゲルマン語の語彙が存在したにちがいないと推論することが出来る。民族大移動時の激しい体験は英雄詩の中で躍動しつづけた。英雄詩のために使用された語彙は特に戦いと勝利、君主と従者、祭りと酒盛などの意味内容を表わすための豊かな表現の可能性を示している。ドイツ本国の場合ではもちろんそういったような語はあまり伝っていない。アングロサクソン語の「ベオウルフ」と古ザクセン語の「ヘーリアント」のような作品が持っている共通な表現法から、上に挙げた物事を表わすための詩的な表現、詩的な言い換え、慣用句などはドイツ人にも知られていたと推定することが出来る。詩的な言い換え(君主(Fürst)を表わすための Ringgeber ないしは Goldspender, 戦士(Krieger)を表わすための Waffenträger)はドイツ起源であったかもしれない。例えば Leichnam <遺体>は古高ドイツ語 lihamo, 字義通りには Leibeshülle <体を包むもの>。武具に名前を付けることも好まれていた(ジークフリートの剣は Balmung, そのほか Miming, Eckesachsなどを参照。これについては § 5, アニミズム)。

ほんらいのドイツ語についてはようやく8世紀から論じられうる。なぜならばこの時代になって昔から定住していなかった限りにおいて、民族大移動の間に今日のドイツに定住した（ザール川とエルベ川の東のスラヴ人に渡された領域を除いて）ゲルマン部族の間で共通ドイツの観念（*Begriff der gemeinsamen Deutschheit*）が芽生えた。高地ドイツ語と低地ドイツ語の2つの言語地域に区分した第2次（高地ドイツ語）子音推移もまた民族の統一（後のオランダ語の分離を除いて）をゆるがすことは出来なかった。この時代にドイツを表わす名前が登場する。カール大帝の帝国内でロマン語を話さないドイツ人の名前を表わす古高地ドイツ語 *diutisc* である（*diot* 〈民族〉から来ている。今日なお *Dietmar*, *Dietlieb*, *Detmold* のような名前で保たれている）。起源的にはラテン語の形 *theodisce* 〈民衆語で〉（786年）で現われる。 *lingua Romana* 〈ロマン語〉を示す学者・教会ラテン語とは対立して *lingua vulgaris* 〈俗語で〉の意識借用語 *theodisca lingua*（788）の形で現われる（W. Betz in "Deutsche Wortgeschichte,, Bd. I. 130f.）

このドイツ民族が、ゲルマン共通語の時代（§10参照）から継承した語彙は古代から受け継いだ借用語によって豊かになって戦争好きで、活動的な民族の特質を表わしている。しかしかなり細かい心の動きも、彼らには全く無縁ではなかった。もちろん感覚的、直感的な表現形式で、抽象的な無味乾燥さはない。色々な古い異教の文化的遺物（*althednische Kulturüberreste*）はこの時代から今日までしっかりとドイツ語の中に根づいている。次のような語が古い異教の信仰を反映している：*Gott* 〈神〉（形からして元々中性で、恐らく「呼び寄せられた物」の意味）、*Himmel* 〈天〉（元々はひょっとして「地のおおい」の意味かもしれない）、*Hölle* 〈地獄〉（元々死者が赴く所。古ノルド語の死の女神 *hel* を参照）、*Ostern* 〈復活祭〉（元々キリスト教以前の春の祭の名。両語とも意識的に伝道者によってキリスト教の制度に移された）、*Weihnachten* 〈クリスマス〉（元々冬至のゲルマン人に神聖なる夜）、*weihe* 〈神聖にする〉（*Weihe* *Stephan* 〈聖ステファン〉などの地名も参照）、*Alb* 〈妖精〉（正式には *Alp*,

亡霊又は圧迫霊, 18世紀に英語から Elfe 〈森の精〉の意味で取り入れられた), Donnerkeil 〈稲妻〉(元々雷神ドーナールが投げた Blitzstein 〈稲妻石〉), Kobold 〈家の精〉, Zwerg 〈小人〉, Drude 〈夢魔〉, Riese 〈巨人〉, Werwolf 〈狼に化けた人間〉, Wicht 〈小妖魔〉(元々生物, 魔), Wichtelmännchen 〈小妖魔〉など。ドイツ語の曜日の名前もまた, ラテン語を模倣しているが (Solis Dies 〈サートゥルヌスの日〉(日曜日), Lunae Dies 〈月の日〉(月曜日), Martis Dies 〈マルスの日〉(火曜日), 依然異教の神々の名を保持している。例えば Sonntag 〈日曜日〉(女神 Sunna は「メルゼブルクの第2の呪文」(Zweiter Merseburger Zauberspruch) に現われる), Dienstag 〈火曜日〉(古代の軍神 Ziu の異名 Thingsus 〈物の保護者〉から), Donnertag 〈木曜日〉(雷神 Donar から), Freitag 〈金曜日〉(女神 Frija から)。アレマン方言の Ziestag 〈火曜日〉については § 10。ゴート人はドナウ川をさかのぼってギリシアの軍神の名をバイエルン・オーストリア方言にもたらした: 軍神アーレス (Ares) に倣って Ertag 〈火曜日〉, とか Erchtag 〈火曜日〉。彼らの伝道者たちは Donnerstag 〈木曜日〉を第5曜日: Pfingstag 〈木曜日〉という言い方で置き換えた (§ 10 Pfingsten 参照)。アウグスブルク司教区では教会は Aftermontag 〈火曜日〉という言い方をとっている。伝道団は Satertag, Samstag, Sonnabend (§ 12) の並存を定めている。ドイツ語のルーネ文字は銘の形で7世紀まで記されている。それらを今日の語彙 Rune 〈ルーネ文字〉, raunen 〈ささやく〉(ルーネ文字は起源的には神秘的な魔法の記号), Alraune 〈アルラウネ (小妖魔)〉, Zauber 〈魔法〉(元々はルーネ文字で書かれた赤い色), Buchstabe 〈文字〉(文字を表わす記号。ほとんどどのルーネ文字にも垂直の棒がある), lesen 〈読む〉(元々ルーネ文字の棒を集めて読解すること。タキトゥスの「ゲルマニア. 10」参照), raten (元々ルーネ文字を解釈すること。英語の reed を参照) などが思い起される。Reißbrett 〈製図板〉, Reißzeug 〈製図器具〉, Riß 〈設計図〉(Grundriß 〈見取図〉, Bauriße 〈設計図〉, Abriß 〈略図〉) などの reißen 〈抽く〉もこれらに属する。なぜならばこれは書くこと (英語 write

を参照)を表わす古いゲルマンの語であるから、ルーネ文字がひっかいて書きつけられたためである。schreiben 〈書く〉も Brief 〈手紙〉も、修道院で古代に倣って書き物に羊皮紙が利用された時、ラテン語から借用された。

ゲルマン・古代ドイツ語の語彙の多くは今日のドイツ語から消えてしまっている。それでもなお合成語と名前の中に幾つかの重要な古代ドイツ語が保たれている。例えば Flieder 〈ニワトコ〉, Holunder 〈ニワトコ〉, Heister 〈若木〉, Rüster 〈はるにれ〉, Maßholder 〈こぶかえで〉, Wacholder 〈としよう〉などの語尾において、また Affolter, Affalter などの地名で木(英語 tree を参照)を表わす古いドイツ語がひそんでいる(Affolter=Apfelbaum 〈りんごの木〉)。Salzach のような河川名は古代ドイツ語 acha 〈水〉を保存している。アルプスには幾つかの Ache 〈小川〉がある。北からレーン山脈まで発達の方が異なった音韻形態 a が及んでいる、例えば Wisera 〈ヴーゼル川〉、この語は特別の音韻発達によって werra となる(ラテン語 aqua 〈水〉、低地ドイツ語 ap, 高地ドイツ語 aff と関係がある。下ライン方言 Lennep (地名), Honnef (地名), Aschaffenburg 〈とねりこ〉, Laasphe 〈鮭〉などを参照)。受け継がれている名前(§10参照)の大部分も死滅した語を保持している、例えば Hed-, Had- 〈戦い〉, -bald, -bold 〈大胆な〉, Mein- 〈力〉など。最後に北欧から借用された Ingrid (Ingvi=北欧の神々の名+frid 〈美しい〉) もしかりである。このことは Sigrid においても同じである。Beichte 〈告解〉, Seele 〈魂〉に関しては§14参照。

§14. 古高ドイツ語と古ザクセン語

時代におけるキリスト教信仰と精神生活

古ドイツ語(古高ドイツ語と古ザクセン語)時代(8世紀から11世紀中頃まで)は語彙の点で、この時代に精神的(geistig)及び心的(seelisch)な事象を表わす表現形成が出来上がったということによって特徴づけられる。そのきっかけはドイツ人のキリスト教改宗であった。それはカ

ール大帝時代のザクセン人の強制改宗によって表面的に終わった。大部分精神的な事象、つまり内面的生活を目差したキリスト教語彙の発達はラテン語、教会の礼拝用語、ドイツ中世の優勢な官庁及び学者用語の恒常的な影響の下に行なわれた。ドイツの景色の外面的な様相が教会、僧院、礼拝堂の建て方で変わるように、語彙のこのような増加と変化で、ドイツ語の表現も（運命を反抗的に克服する倫理、徹底的に悲劇的な人生観を有した）ゲルマン異教の力強さから柔和さ、つまり（純粹愛の倫理を有した）精神的に満ちたものに変化した。そういう中にあっても古い武勇の痕跡は十分に存続している。この時代の精神活動は特におびただしい量の新しい動詞と形容詞が作られたことによって示される。この時代には具体的な名詞は少ししか作られず、むしろ動詞から派生した名詞が作られた。

キリスト教の教義はまず多くのラテン借用語をもたらした：

katholisch <カトリックの> (ラテン語 *fides catholica* <公教的信仰>, 元々ギリシャ語で「世界中で」の意味), *Marter* <拷問> (*martyrum* <証人>), *martern* <拷問する>, *Kapelle* <礼拝堂> (これと並んでドイツ語のアクセントを有する地名の *Kappel* がある), *Dom* <大聖堂>, *Münster* <大聖堂>, *Altar* <祭壇>, *Messe* <ミサ> ("Ite, missa est (contio).", <行け, (集会は) 終れり> から。後になって「礼拝」の意味から祝日にミサの後でしばしば開かれる「市場」の意味に転用された), *predigen* <説教する> (ラテン語 *praedicare* <公表する>), *Predigt* <説教>, *Mette* <朝の祈り> (ラテン語 *matutina* <朝>) *Vesper* <夕べの祈り>, *firmen* <堅振を受ける> (ラテン語 *firmare* <確かにする>), *Firmung* <堅振>, *Arche* <箱舟> (ラテン語 *arca* <箱>), *Kreuz* <十字架>, *kreuzigen* <十字架にかける>, *Psalm* <賛美歌>, *Psalter* <詩篇>, *Evangelium* <福音>, *Satan* <サタン>, *Beelzebub* <悪魔王> (あとのほうのものはギリシャ語起源かヘブライ語起源である)。

特に教会の外面的な面、つまり職名、職務、道具、儀式、修道院制度を表わす語は借用語である：*Bischof* <司教> (§ 12), *Dechant* <首席司祭>, *Kaplan* <助任司祭>, *Sigrist* <会堂番>, *Küster* <教会堂番人>, *Mesner*

〈納堂係〉, Abt 〈修道院長〉, Äbtissin 〈尼僧院長〉, Nonne 〈修道女〉, Prälat 〈高位聖職者〉, Papst 〈教皇〉, Kloster 〈修道院〉, Klausen 〈庵室〉, Regel 〈掟〉, Orden 〈修道会〉, Zelle 〈庵室〉, Mette 〈朝の祈り〉, None 〈第9時課〉, Vesper 〈夕べの祈り〉, keusch 〈貞淑な〉(最初の意味は「礼儀にかなっていること」ラテン語 *consciens* 〈関知して〉から), Regel 〈修道会会規〉, spenden 〈寄付する〉, Spende 〈寄付〉, Kreuzifix 〈キリスト十字架像〉, Kanzel 〈説教壇〉, Lettner 〈ミサ典書見台〉, Lampe 〈ランプ〉, Ampel 〈常明燈〉, Orgel 〈オルガン〉, Feier 〈祝祭〉, Legende 〈聖徒物語〉, Text 〈聖書の章句〉, Patron 〈守護聖人〉, Pilger 〈巡礼者〉, Pilgrim 〈巡礼者〉など。

精神的な事象, つまり本来の教義は, ラテン語を知らない民衆を対象としている限り, おおむねドイツ語の表現で表わされた。それらが作られる際, 大いにしばしばラテン語の基礎語がドイツ語の語幹を使って忠実に模倣された。Gewissen 〈良心〉(*conscientia* から), Gevatter 〈代父〉(*compater* から), Mittler 〈仲介者〉(*mediator* から), Gemeinde 〈教区〉(*communio* から), Gotteshaus 〈聖堂〉(*domus Dei* から), auferstehen 〈復活する〉(*exurgere*) などのような語がラテン語を模倣して作られた。Jünger 〈使徒〉, Weissagung 〈予言〉, bekehren 〈改宗させる〉, Fegefeuer 〈煉獄〉のようなドイツ語の語もとくにラテン語の教会用語を表わす目的のために選ばれている。Apostel 〈使徒〉の代わりの Zwölfbote, Sakrament 〈秘蹟〉の代わりの Heilthum, Evangelium 〈福音〉の代わりの gotspel, Prophet 〈予言者〉の代わりの forasago あるいは wissago のようなドイツ語化されたいくたの美しい古高ドイツ語は残念ながら残されていない。異教起源の比較的古い語はキリスト教によって新しい意味が加えられた: Hölle 〈地獄〉と Ostern 〈復活祭〉 (§ 13), Glaube 〈信仰〉, Gnade 〈恩寵〉, Güte 〈寛容〉, Huld 〈恩寵〉, Milde 〈慈悲〉, Buße 〈贖罪〉, Heil 〈救い〉, Sünde 〈罪〉, Schuld 〈罪〉, Reue 〈悔い〉, Taufe 〈洗礼〉, Schöpfer 〈創造者〉, Gebet 〈祈り〉, beten 〈祈る〉など。キリスト教の概念を表わすドイツ語の新語と派生語

をもっとこの時代から挙げよう：

christlich <キリスト教の>, Christenheit <キリスト教徒>, Gottesmutter <聖母>, die Heiligen <聖人>, Bethaus <礼拝堂>, Feiertag <祝日>, Gottesdienst <礼拝>, Täufer <授洗者>, die Heilige Schrift <聖書>, Gottes Wort <聖書のことば>, Sintflut <ノアの洪水>, Gottheit <神格>, göttlich <神の>, Herr <主>, der Vater <神>, erlösen <救済する>, Sühne <贖罪>, sühnen <罪滅ぼしをする>, weltlich <俗世の>, Feind <敵>, Altfeind <旧敵>, Hauptsünde <七罪源>, sündig <罪を犯した>, Sünder <罪人>, gläubig <信心深い>, Unglaube <不信心>, büßen <罪をあがなう>, gute Werke <善行>, dienen <奉仕する>, der Jüngste Tag <最後の審判の日>, ewiges Leben <永遠の生命> など。Pate (代父), Pfetter <代父> はラテン語 *pater spiritualis* <霊父> に倣って作られている。その後で Patin <代母> が作られた。加えて Gote <代父>, Gotel <代父>, Dode <代母> のような広く通用する愛称形が作られた (Wortatlas IV, 1955参照)。Beichte <告解> は借用語ではなく、古高ドイツ語 *bijēhan* <告白する, 法廷で陳述する> から出た *bijht* である。Seele <魂> は元々「湖に由来するもの」の意味。ゲルマン人にとって幾多の湖は生まれる前と死後の魂の居場所と考えられていた。

キリスト教によって古高ドイツ語時代に新しく作られたかあるいは新しい意味をもち込まれたドイツ語表現を観察すれば、その際問題となるのは今日の語彙の本質的な構成要素である。古高ドイツ語時代のドイツ語表現は派生と合成で発展する力によって、感情生活語の中で特に大きな意味をもっている。その上に、古高ドイツ語のキリスト教用語の語彙が、今日まで生き残ることが出来なかったさらに多くの語を含んでいたということが実際加わる。その結果新しい信仰はドイツ語に実際語の数をふやさせたのである。この増加の傾向は数世紀にわたっていて、幾つかの借用語は後になってとり入れられた (Papst <教皇> は1000年に初めて文証されている)。多くのドイツ語表現は9及び10世紀の修道院教師のきめこまかい翻

訳に基づいている。特にザンクト・ガレンのノートカーⅢ世（十1022），別名「ドイツ人」は神学哲学用語の創造者としてここに挙げられうる。それらの用語はその時は独自性があったが，残念なことに後に忘れられてしまった。Leiden〈苦しみ〉の意味範囲において古い意味はキリスト教化の過程の中で精神的になっている。dulden〈耐え忍ぶ〉の肉体の苦痛から精神の苦痛への意味の変化は，言語地理的に言えば，ポーテン湖畔のアイランドの伝道地域から近隣のすみずみまで行き渡った。

キリスト教の浸透と修道院の拡大に伴なって民衆教育（Volksbildung）の強い高まりが始まる。修道院の教材は，それが純粹にキリスト教神学的でない限り，まったく古代の精神遺産に基づいていたが故に，またそれ以外にもこの時代には古代の教養と文化の意識的な連がりが頻繁であった（カロリング朝，オットー朝）が故に，こういう教養に関するきわめて重要な用語がラテン借用語であっても何ら不思議ではない：

Laie〈素人〉，schreiben〈書く〉，Schrift〈書き物〉，Schule〈学校〉，Schüler〈生徒〉，Meister〈名人〉（ラテン語 magister 長官），Latein〈ラテン語〉，Tinte〈インキ〉（中世ラテン語 tincta〈染められた物〉），Pergament〈羊皮紙〉，Bimsstein〈軽石〉（羊皮紙をみがくために使われる），Tafel〈石盤〉，Griffel〈ペン〉，Linie〈線〉，Kapitel〈章〉，Pult〈写字台〉，dichten〈創作する〉（ラテン語 dictare〈口授する〉，北ゲルマン語ではこれに相当するのは yrkja，ドイツ語の wirken），trachten〈得ようと努力する〉（ラテン語 tractare 引き回す），Vers〈詩行〉，Siegel〈印〉，Zettel〈紙片〉，Brief〈手紙〉（ラテン語 breve〈短かい文書〉，古い意味はまだ Frachtbrief〈運送状〉の形で残っている）など。

修道院の文化を促進する働きは外的，物質的な物事にもかかわった，例えば，より念入りの果樹栽培と造園（Obst-und Gartenbau）の導入と適切な開発である。

Birne〈梨〉（ほかの果物はすでに早くからローマ人を介して知られていて，ラテン語名で借用された。りんごの名は印欧語ではない（Kluge-Mit-

zka, Etymolog, Wb), Weichsel <酸果桜桃>, Ammer <アマレレ>, Pappel <ポプラ>, Rose <バラ>, Lilie <百合>, Akelei <オダマキ>, Veilchen <スミレ> (しかし相統語は Nelke <ナデシコ>, もともと「小さい釘」の意味), ドイツ語の *zwie (fach) = vielhäufig* <ひんぱんの> によって形を変えられた *Zwiebel* <タマネギ>, *Petersilie* <オランダゼリ>, *Lattich* <チサ>, *Eibisch* <ウスベニタチアオイ>, *Kamille* <ローマカミツレ>, *Baldrian* <カノコソウ>, *Gamander* <ニガクサ>, *Liebstöckel* <トウキ> (民間語源でラテン語 *ligusticum* <リグリア産の植物>), *Raute* <ヘンルーダ>, *Radieschen* <ハツカダイコン>, (*Salbei* <サルビヤ>, *Schellkraut* <クサノオウ>, *Thymian* <タチジャコソウ>, *Lavendel* <ラヴェンダー>, *Polei* <ニガクサ>, *Anis* <アニス> など修道院の庭で栽培された芳香植物と薬草。

Butter <バター>, *Brezel* <ブレーツェル>, *Lebkuchen* <レープクーヘン>, *Barbe* <バーブ>, *Muschel* <貝>, *Kapaun* <去勢雄鶏>, *Mörser* <乳ばち>, *Tiegel* <るつぽ> (§ 11), *Mulde* <こわばち> などの借用は修道院の料理技術が進んでいたことを思わせる。建築 (*Bauwesen*) は、芸術を解する修道士によって促進され、一層進歩した、即ち初期の簡素なバジリカ様式建築からロマンティック聖堂の高尚な美へと発展した。*Turm* <塔>, *Portal* <正門>, *Gruft* <地下納骨堂> (*graben* <堀る> から。ギリシア語・ラテン語 *crypta* <洞穴> の意味を模倣して), *Mörtel* <モルタル>, *Gips* <石膏>, *Zement* <セメント>, *Grad* <目盛り>, *Marmelstein* <大理石> (当時 *Marmor* の代わりにこう言った, 今日子供たちはまだ *Murmel* <はじき石> のことをこう言う), *Granit* <花こう岩>, *Tuffstein* <凝灰岩>, *Quader* <切り石>, *Erker* <張り出し>, *Kamin* <暖炉>, *Model* <型> (古ドイツ語では後の *Modell* の代わりにこう言った) などのような借用語がこのことを証明している。手工業 (*das Handwerk*) は、しばしば修道院の定着に伴ない、やがて特に新しく出来た都市で発達して, *Schuster* <靴>, *Metzger* <肉屋>, *Masse* <集団>, *Messing* <真鍮>, *Pinzel* <ブラシ>, *Mennig* <鉛丹>, *Zinnober* <辰砂>,

Mergel <泥灰岩>, Alaun <明礬>, Ocker <赭土>, Grünspan <緑青>, Kreide <白墨> などの新しい語を作り出している。聖職者並びに俗人の衣服 (Bekleidung) は古代ゲルマンから全く離れた新しい姿を Albe <アルバ>, Kugel <頭巾> (lat. cuculla 頭巾), Kutte <修道服>, Zwillich <亜麻布>, Drillich <亜麻布> (この二つはラテン語に倣って作られている: bilix <二重糸の>, trilix <3本の糸で織られた>), Kappə <フード>, Mantel <マント>, Pelz <毛皮>, bunt <色とりどりの> (起源的には毛皮製品に関してのみ, lat. punctus <刺されたる> から), Matte <ござ>, Teppich <じゅうたん>, Seide <絹>, Perle <真珠> のような語に現わしている。

政治と行政 (Regierung und Verwaltung) の分野で古高ドイツ語時代の末期に重要なラテン語の専門用語が登場した, なぜならば1300年頃まで公用語と官庁語はラテン語だけであったから。Meier <地頭> (lat. maior <より大きい>), Bezirk <区域>, Rente <賃料>, Kanzlei <官庁>, Kanzler <文書起草官>, Vogt <代官> (mlat. vocatus <代訴人>), Titel <官職名>, falsch <にせの>, Glosse <注解>, Bulle <封印>, regieren <支配する> などの語が挙げられる。徹頭徹尾土着のゲルマン的観念に根づいている (§ 10参照) 法律用語は逆にドイツ語のままである。それらの数々のゲルマン的用法は今日まで保たれて来た (例えば Ding <物>, 本来の意味は「裁判集会」, これに関連して dingfest machen <逮捕する>, dingliches Recht <物権>, verteidigen <防ぐ>, 本来の意味は「裁判で弁護する」), Sache <係争事件>, Sachwalter <弁護人>, Rede stehen <釈明する>, vermählen <結婚させる> (本来の意味は「おごそかに祝言させる」), Umstände <事情> (本来の意味は「裁判集会における聴衆」), widmen <献呈する> (本来の意味は「結婚の贈物を与える」), auf den Schild erheben <指導者に選出する>, für vogelfrei erklären <法律保護外に置く>, in die Acht tun <追放する>, handhaft <具体的の> (何かを手の中に持っているほどに。手でつかみ得る), überführen <罪を確認させる> (恐らく起源的には, 証人を引き出すことによ

って), überzeugen <(罪を) 自認させる> (本来は, 「証人によって (罪を) 確認させる」の意味), wettmachen <償う> (ahd. wetti <賠償> から), ersessene Rechte <時効によって得た権利> など) (§ 18も参照)。

中世成期の言語

§ 15. 騎士階級の言語と宮廷文学の言語

古高ドイツ語時代の精神的・修道院文化は11世紀末頃騎士階級 (Rittertum) の文化にとって代わられる。この騎士階級は十字軍の時代にあってフランスの影響の下に, ミンネザングと宮廷叙事詩の形でドイツ文学の古典的な花を開かせた。同時に教会の影響の下にドイツのロマネスク様式は建築術と造形美術において熟成し, 独自の語彙を作り出した。それは古ゲルマンの英雄精神と古ドイツの敬虔さをなおいくつか保っているが, 他面においてフランスの影響の下に深い理性と魂を吹き込まれて社交語と文学語 (Gesellschafts-und Literatursprache) を発達させた。話し言葉の語彙の多様性は民衆語には残った。騎士階級は語彙の中にも "Maß,, <中庸> (中庸を守ること) の理想を確認した。彼らはごつくさくなまりのある, 百姓風で, 古風な語を避け, しっかりした規準を宮廷風の表現様式においた。

ゲルマン英雄詩の古来からの語彙は宮廷騎士階級には時代おくれ (altfränkisch) と感じられた。それは依然部分的に民族叙事詩 (Volksepos) と吟遊詩歌 (Spielmannsdichtung) にだけ残っていた。Recke <英雄>, Held <英雄>, Degen <剣>, Ger <投げやり>, michel <大きい>, balt <勇敢な>, gemeit <喜ばしい>, ellen <闘志>, wigant <戦士>, bouc <腕輪>, Hagen der grimme <猛きハゲネ>, breite Schwerter <広い剣>, sturmkühne Helden <猛き勇者たち>, steinharte Helme <石のように堅いかぶと>, stahlharte Spangen <鋼鉄のように堅い腕輪> などのように, 民族的な「ニーベルンゲンの歌」でなお重要な役割をはたしている語は騎士文学の言語からなくなる。

それにひきかえ宮廷文学は戦いの代わりに恋愛生活のきわめてきめ細かい動き、宮廷作法、騎士生活の祝祭と風習を表わすかずかずの語彙を発達させた。vrouwe <婦人>, riuwe <悲しみ>, hōchgezit <大祭, たいへんな喜び>, tugent <美点>, milte <善良>, edel <高貴な>, tump <愚かな>, kiusche <純潔>, kranc <弱い>, māze <克己>, stæte <持続>, vuoge または vuoc <たしなみ>, Zucht <行儀>, Minne <ミンネ>, schoene <美>, sælde <幸福>, hōvesch <みやびな> (これから nhd. hübsch <かわいい>), klar <清い>, fein <きゃしゃな>, stolz <誇っている>, fehlen <欠けている>, prüfen <ためす> (最後のフランス語からの5つの借用語は騎士の合いことば)。たくさんの新語, 特にたくさんの合成語, かなり古い語 (例えば edel <高貴な> は起源的には「生まれつき高貴な」の意, ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク以来初めて「精神の高貴さ」にも用いられる) の意味内容の変化もまた騎士文学の言語の特色である。この言語が精神的事象をどの程度まで表わすことが出来るかは, 例えば中高ドイツ語の辞書が接頭辞としての Minne を伴った少なくとも90の合成語を挙げていることから明らかである。

騎士階級とその文学のフランスの影響に応じて新しい語彙はフランスからの外来語によって強くつかぬかれている。その際特にフランスとの関係はフランデルとライン川下流地域を越えてなされた。これからの地域では新しい流行語が特に一番早く証明される, 例えば vlæmen mit der rede <フラマン語風に話す>, vlæmische hōreschheit <フラマン風のみやびやかさ> という言い方が特に好まれた。そのためにフラマン・低ドイツ語の音韻状態を有した語も好んで使われた, 例えば gebūrekin <百姓>, soete kindekin <かわいい子供>, schapellekin <花環>, ors <馬> (Roßの代わり), Ritter <騎士> (riter <騎馬武者> の代わり), Wappen <紋章> (wāpen <武器> Wappen の代わりに), blide <喜ばしい> など。百姓の蔑称 dōlpære——altfrarz. villain <百姓> の翻訳で nhd. Tölpel <ぶこつ者> になった——は今日まで低ドイツ語の音韻状態 p を保存していることは特色に値する。

いかにフランス語が騎士文学において一時的なものに終わったか、詩人タンホイザー (1250年頃) がこの変化をパロディー風にあざけて書いているのからわかる:

Ein riviere ich dā gesach,
durch ein fores gieng ein bach
zetal über ein plāniure.

私はそこである地方を見た。
小川が森を通して
平野を流れていた。

叙情詩人の中で一番強くこの流行におぼれたのはヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハであった。彼は作品の中にまるっとフランス語の詩行をまぜた (例えば, *Bien sei venūz* <ようこそ>, *bēās sir!*)。学問の素養のあるゴットフリート・フォン・シュトラースブルクもまた好んでフランス語の表現を用いた。全くドイツ的な「ニーベルンゲンリート」にさえ, *buhurt* <競技>, *garzūn* <小姓>, *puneiz* <突撃競技>, *tjoste* <槍試合>, *trunzūn* <槍の破片> のような外来語が出てくる。ミンネザンクのみ, 特にヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデはそのような借用語から解放されている。

フランス語に依存していたことは, この時代に 2, 3 のフランス語の合成綴までもドイツ語の中に入って来たことから明らかである。接尾辞 *-ie* (今日の *-ei*), ——元来 *partie* <区分>, *villanie* <無骨> のような外来語においてのみ使われた——じきにドイツ語の語幹にも付け加えられる: *vischerie* <漁業>, *dörperie* <素野なふるまい>, *jegerie* <狩猟>, *zouberie* <魔法>, など, そして今日 *Bäckerei* <パン屋>, *Fischerei* <漁業> などの語においてドイツ語として感じられる (外国語のアクセントを持っていたても)。例えば *parlieren* <外国語で話す> などの接尾辞 *-ieren* もこれに類する: *stolzieren* <いばって歩く>, *hausieren* <行商する>, *halbieren* <半分にする> などに現われる。 *mancherlei* <いろいろの> ,

vielerlei 〈多種多様の〉, allerlei 〈あらゆる〉などに現われる語尾 -lei (altfranz. lei=neufranz. loi 〈法, 種類〉) も同じである。外来語の受容と並んで翻訳借用語 (Übersetzungslehnwörter) と意味借用 (Bedeutungsentlehnungen) もまた重大な役割を演じている。例えば hövesch 〈みやびな〉は franz. courtois の, hövescheit 〈みやびやかさ〉は franz. courtoisie の翻訳である。以下 knappe 〈少年〉= garçon, vriedel 〈恋人〉= ami, ritter 〈騎士〉= chevalier など。広く、長い間、今日の百姓言葉にまで人気強く残っている古くから親しまれていた Duzen 〈du で呼び〉の代わりにみやびやかな呼び方 Ihrzen 〈Ihr で呼ぶ〉もフランス語に倣って助長された。ade 〈さようなら〉(franz. adieu) と merzi 〈感謝〉(franz. merci) のような丁寧な語もフランス語に由来する。

騎士階級が受容したフランスからの夥しい外来語のうちわずかしき今日までドイツ語のうちに生き続けることが出来なかった。大多数は騎士階級の没落と共に再び廃用となった。我々はそのためにこれらの流行語の多くの中から——それらの第一として Palast 〈宮殿〉, Tanz 〈ダンス〉, Turm 〈塔〉が1130年の「ローラントの歌」に立証される——今日まで保たれているもののみを概ね吟味してみよう。フランスの影響の一番強い騎士のスポーツは Turnier 〈馬上試合〉である。騎士の数多くの用語(例えば hurt 〈突撃〉(これから hurtig 〈すばやい〉が出来た), hurten 〈突撃する〉, buhurt 〈競技〉, tjoste 〈一騎打ち〉, tjostieren 〈一騎打ちをする〉, punieren 〈敵に向かって突撃する〉, garzun 〈小姓〉, buckel 〈楯の中高〉, puneiz 〈突進〉, leisieren 〈馬を手綱をゆるめて走らせる〉, trunzun 〈槍片〉など)のうち実に Turnier 〈馬上試合〉, turnieren 〈馬上試合をする〉, Lanze 〈槍〉, Harnisch 〈甲冑〉, Panzer 〈胸甲〉, Koller 〈カラー〉, Panier 〈旗〉, Wimpel 〈三角旗〉, Plan 〈闘技場〉などだけが今日まで生き残っている。騎士制度がとりわけ馬上試合に由来する若干の比喩的な表現を普通の語彙に加えたことも注目すべきである。例えば in die Schranken treten 〈競技にのぞむ〉, den Fehdehandschuh hinwerfen 〈挑戦

する>, die Spitze bieten<抵抗する>, eine Lanze brechen<勝負をする>, aus dem Sattel heben<打ち負かす>, auf den Sand setzen<打ち負かす>, unter die Arme greifen<世話をする> (元来, 負けた闘士の), jem. einen Korb geben<或人にひじ鉄砲を食わす> (籠に乗って城に上げてもらおうとしてきらわれた求愛者を實際底の抜けた籠で落とした)。

中高ドイツ語時代に condwieren<導く>, salwieren<挨拶する>, äventiure<冒険>のような語に反映されている騎士の社交上 (Geselligkeit) のしきたりはドイツ語に永続的に次のような語をもたらした: Tanz<踊り>, tanzen<踊る>, Manier<流儀>, fein<上品な>, klar<清い>, falsch<不実な>, stolz<誇っている>, fehlen<欠けている>, prüfen<ためす>, Platz<広場>, Preis<称賛>, Kompanie<仲間>, Kumpan<仲間>, Schach<チェス>, matt<弱った> (この二つは起源的にペルシア語), Abenteuer<冒険>, Fabel<寓話>, Tafelrunde<円卓> (アーサー王の table ronde にちなんで) など。洗練された住居と生活の様式の語には次のようなものがある。Palast<宮殿>, Turm<塔> (当時は turn), Pavillon<園亭>, logieren<滞在している>, Panel<鞍敷き>, Habit<制服>, Sauce<ソース> (当時は salse, まず「塩味を付けた肉スープ」の意味), Teller<皿> など。フランスからぜいたくな品が入って来た: Samt<ビロード>, Scharlach<緋色>, Litze<モール>, Kor-duan<コルドバ革>, Achat<めのう>, Granat<ざくろ石>, Jaspis<碧玉>, Alabaster<アラバスター>, Kristall<水晶>, Rubin<ルビー>, Smaragd<エメラルド>, Zinnober<辰砂> など。流行色は blond<ブロンド>である。これはそれ以前はゲルマン語圏では bleich<青白い>で表わされた。非常に人気があった楽器もフランス語の名前がついている: Flöte<フルート>, Schalmei<カラムス>, Posaune<トロンボーン>など。実に騎士の住まいのために関与している手工業もまた一時的に騎士の外国語化に加わっている。その中で次のような語が生き残っている: Fir-nis<ワニス>, Franse<縁>, Polier<職人頭>, Juwel<宝石>, Juwelier<宝石商人>, Konterfei<模写> など。

騎士階級の時代には狩猟 (Weidwerk) の言葉も全くフランス語で貫かれている: pirschen <猟犬を連れて狩猟する>, Koppel <(猟犬を縛っておく) 皮紐>, koppeln <(猟犬を) 革紐でつなぎ合わせる>, Pansen <瘤胃>, Ziemer <猟獣の背肉> など。ドイツ語の狩猟語は当時のフランス語の狩猟語の多くは有していずに、むしろ今日の特質から言えば全くドイツ語である (F. Kluge: Unser Deutsch, Leipzig, 3. Aufl. 1914; E. v. Dombrowski, Deutsche Waidmannssprache, Neudamm, 2. Aufl. 1897). 狩猟用語は種々な古いゲルマン用法を今日まで保存している、例えば Fähe <犬, 狐, 狼などの雌>, Schweiß <(傷ついた獣の) 血>, Welf <動物の子>, Welp <犬の子> など。個々の動物の種類の特質と行動の表わし方は綿密に分類されている (例えば Löffel <兎の耳>, Schüssel <イノシシの耳>, Lauscher <鹿, イノシシの耳>, Gehör <(猛獣) の耳>あるいは Lauf <(犬) の足>, Pranke <前脚>, Arm <前足>, 「あおさぎ」のような渉禽類の Ständer <足>, Fang <けづめ>, Tritt <臭跡>, 「野鴨」のような遊禽類の Ruder <足> など)。数々の狩猟語は普通の言葉に転換した、例えば bärbeißig <(猟犬が熊にかみつ়く粗暴な)>, vorlaut <生意気な>, unbändig <(猟犬が) 綱につながれたがらない奔放な>, naseweis <嗅覚が鋭い, さしでがましい> (「鼻で教える」すべては元来猟犬に関してのみ), wittern <かく>, stöbern <ちりのように飛び散る>, (auf)spüren <捜し出す>, berücken <不意打ちする>, Fallschick <落とし穴>, nachstehen <或人に及ばない>, ungarnen <わなにかける>, ins Garn gehen <或人のわなにかかる>, zur Strecke bringen <(犯人を) つかまえる>, ins Gehege kommen <邪魔する>, auf falscher Fährte sein <見当違いをしている>, durch die Lappen gehen <ある人の手からすり抜ける>, auf den Busch klopfen <ある人の意向を打診する>, Wildfang <いたずらっ子> (元来は「生きて捕えられたタカ」の意味) など。

§ 16. 市民の言語

十字軍とシュタウフェン王朝の時代、ほぼ1150年と1250年の間にその最盛期を向えた騎士階級は13世紀の末から社会的及び文化的に指導的役割を市民階級 (Bürgertum) に譲らねばならなかった。市民階級は商工業で力を増し、誇り高い身分意識を発達させた。brandschatzen <略奪する> と Brandschatzung <強奪> (1350年頃), Brandbrief <無心状>, Buschklepper <おいはぎ>, Schnapphahn <街道筋の追いはぎ>, Strauchritter <野盗>, Heckenreiter <追いはぎ>, sengen <焼き焦がす>, dem (Land) frieden nicht trauen <安心出来ない>, sich durch die Welt schlagen <戦いながら諸国を渡り歩く> などのような表現は残忍な強盗騎士階級の没落を表わしている。それに反して, Gilde <ギルド>, Innung <ギルド>, Zunft <ギルド> という形でかたまった市民階級の自意識は, 都市にかなりの数で集まった市民が貴族のまねをして二番目の名前をつけることにおいても表われている。第二番目の名前は, 世襲され, 姓 (Familiennamen) になる。

商工業の言葉の中で, きわめて特色的な例として商業の語彙に重きを置きたい。ゲルマン原始時代にはわずかのありきたりの商業用語しかなかったのにくらべて, 都市にしっかり組織だてられた商人階級が成立した時に初めて商人用語 (kaufmännische Fachsprache) が発達した。取引文書における商人階級の言葉は第一に世界的規模のラテン語であった。しかし口頭での取引のためにドイツ語の商人語が上部ドイツ語を基礎として南ドイツの商業中心の都市で発達した。これに並んでハンザ同盟都市間で広くドイツ語圏を越えて拡がる低地ドイツ語の商人語も発達した。ハンザ同盟の没落に伴ってハンザ同盟の商人語が消滅した (Makler <仲立ち人>, Stapel <堆積物>, Fracht <積み荷>, Bodmerei <船舶抵当貸借> のような低ドイツ語起源 <ハンザ同盟語 (Hansesprache)> のわずかの語のみが依然しのばれる) 一方で, 上部ドイツの商業語は中世から今日まで発展しつづけた。この中世の商業語のほぼ完全な分類化の印として次の

ような語が役に立つであろう。

Gesellschaft 〈会社〉, Geleite 〈同行〉, Geleitsbrief 〈送り状〉, gestehen 〈価する〉, Gewölbe あるいは Gadem 〈店〉, Gewandhans 〈呉服館〉, Gewandschneider 〈布地商人〉, Handgeld 〈手付け金〉, Höker 〈露店商人〉, Kaufmannschaft 〈商人〉, Kaufhaus 〈大商店〉, Kaufherr 〈豪商〉, Pfandbrief 〈抵当証券〉, Schuld 〈借金〉, Schuldner 〈負債者〉, Schuldbrief 〈債券〉, Unterpfang 〈抵当〉, Wechsel (第一に, Tauschhandel 〈交易〉の意味, 次に Wechselgeschäft 〈手形取引〉の意味), Wechselbrief 〈手形〉, verrechnen 〈清算する〉, Ziel 〈支払い期限〉など。

広く文書語であったラテン公用語から, quitt 〈貸し借りなしの〉, Rente 〈利子〉, Datum 〈日付け〉, Register 〈記録〉, Summe 〈合計〉, Fazit 〈総計〉, Nota 〈勘定書〉, Kopie 〈写し〉, kopieren 〈写す〉, Privileg 〈特権〉のような語が商人語に (同時にかなり広い範囲に) なった。特に南ドイツの商業都市と北イタリアの港との活発な取引関係がたくさんのイタリア語の商人語をドイツ語の商人語にもたらした, それらの語は今日なおドイツ語の商人語を特色あるものになっている。最も古い語に Lombard 〈質屋〉 (起源的には「両替業者」, 後に「担保にとって金を貸すこと」の意。ロンバルディア人の名にちなんで), Gant 〈競売〉 (今日は南ドイツでのみ。ital. incanto, lat. in quantum? 〈いくらか?〉), Tara 〈風袋〉 (アラビア語からイタリア語を経て) などが属する。1400年頃からイタリア語の商人語が多数ドイツ語に流れ込んだ。Bank 〈銀行〉 (ital. banco の意味借用語), Bankerott 〈破産〉, brutto 〈風袋込みで〉, ditto 〈前述の〉, Faktor 〈仲買人〉, Kassa 〈現金〉, Kassierer 〈会計係〉, Kollo 〈梱〉, Muster 〈見本〉 (ital. mostra から), netto 〈正味で〉, Posten 〈金額〉 (ital. posta から), Primo 〈月の初旬〉, Medio 〈月の中旬〉, Ultimo 〈月末〉, Porto 〈郵便料〉, Risiko 〈損失の危険〉, Skonto 〈割引〉, Tratte 〈為替手形〉, Vista 〈(手形の) 一覧〉など。15世紀の末頃ヴェネチアから有名になったイタリア式簿記と共に, Debet 〈借方〉

と Kredit <貸方> (起源的には ital. Debito と Credito), Konto <(貸借の) 勘定>, Kontokorrent <当座勘定>, Journal <仕訳帳> (起源的にはイタリア語の形で Giornale), Skonto <決算>, Strazze <帳簿>, Bilanz <決算> などの語が入った。これらの語のいくつかは今日イタリア語の音形をフランス語の音形に変えてしまっているのは、バロック時代にフランス語の外来語が好まれたせいである。この傾向は17及び18世紀のフランス語の商人語の夥しい受容においてもあらわれる (例えば, Adresse <宛名>, Emballage <包装>, Fonds <資本>, retourneren <返送する>, reell <信用のある> など)。さらに17世紀のドイツの商業はオランダ人の盛んな海外・植民地貿易に言語的に負っている: Aktie <株>, Dividende <配当金>, Leckage <漏損>, Refaktie <(商品破損・欠損のための) 割引>, Lotterie <富籤>, Niete <空籤>, piekfein <極上の> (holl. puik <優れた> から), Preiskurant <相場付け> (holl. prijs courant <時価> にならって) など。18世紀の末から商人語のこういう外来語混合に加えて, さらに強い英語の流入が加わる (例えば, Jobber <(株式) 仲買人>, Stock <ストック>, Banknote <銀行券>, Partner <社員>, Scheck <小切手>, Konsols <整理公債>, Limit <指値> など)。この英語の流入は特に輸出貿易の面で現代まで続いている。現代では商人語はもっとも, 外国の借用語を気のきいたドイツ語訳におきかえようと苦心されている。Ausbund <模範> (元来, 「外側に出してたばねた見本」), Kerbholz <割符>, Mißkredit (<不信用> → <悪評>) のような商人語は普通の言葉に移った。外来語の借用語からは (Schuld-) Konto <(債務) 口座>, Manko <欠損>, dito <同上> など。

近東との取引は中世末期にロマンス及びオリエント起源 (あとののはロマンス語を介して) の夥しい商品名 (Warenbezeichnungen) をドイツ語にもたらした:

Kordel <結び紐>, Stiefel <長靴>, Koffer <トランク>, Spezerei <香料>, Konfekt <菓子>, Schachtel <箱>, Marzipan <マルチパン>, Olive <オリーブの木>, Zibebe <大粒の干しぶどう>, Rosine <干しぶど

う〉, Ingwer 〈しょうが〉, Muskat 〈にくずくの種子〉, Zimt 〈肉桂〉, Korinthe 〈種のない小粒の干しぶどう〉, Kaper 〈西洋ふうちょうぼく〉, Spinat 〈ほうれんそう〉, Wirsing 〈ちりめんたまな〉, Mostrich 〈からし〉, Zwetschge 〈西洋すもも〉, Zitrone 〈レモン〉, Limone 〈レモン〉, Pomeranze 〈橙〉, Orange 〈オレンジ〉, Apfelsine 〈オレンジ〉, Papier 〈紙〉, Zucker 〈砂糖〉, Sirup 〈シロップ〉, Safran 〈サフラン〉, Kattun 〈キャラコ〉, Mull 〈モスリン〉, Atlas 〈縐子〉, Damast 〈どんす〉, Barchent 〈ファスチアン織り〉, Scharlach 〈緋色〉, Kork 〈コルク樹皮〉, Borax 〈硼砂〉, Salpeter 〈硝石〉 など。

通商とドイツの東方植民によるヨーロッパの東部の住民との接触は中世の最後の数世紀以来若干のスラブ語起源の語 (Wörter slawischen Ursprungs) をドイツ語にもたらした。その数は、ドイツの農民と市民がかえって自国語を東へ広めたので、かならずしも多くない。すでに11世紀以前に Zobel 〈黒てん〉 という語はロシア語から借用されている。Kürschner 〈毛皮製造者〉 もまたスラブ語の基礎語におそらくたどりつくであろう。東方起源の比較的後の借用語に次のようなものがある: Dolmetsch 〈代弁者〉 (1300年頃), Kummet 〈(牛馬の) 首輪〉, Grenze 〈境〉, Horde 〈軍勢〉 (タタール語), Kutsche 〈馬車〉 (Raab の近郊のハンガリアの村 Kocs から), Heiduck 〈(貴族の) 従僕〉, Petschaft 〈印〉, Kretscham 〈居酒屋〉, Halunke 〈ならず者〉, Jauche 〈水肥〉, Schöps 〈去勢羊〉, Graupe 〈もみ殻をとった大麦〉, Quark 〈凝乳〉, Gurke 〈きゅうり〉, Peitsche 〈鞭〉, Säbel 〈刀〉 など。

航海 (Seefahrt) の言葉も中世末期の数百年の間に現実の専門語に発達した。それらの基礎はゲルマン共通基語である (§ 10 参照), 例えば Schiff 〈船〉, Nachen 〈小舟〉, Mast 〈マスト〉, Segel 〈帆〉, Ruder 〈舵〉, Bug 〈舳〉, Steven 〈船首材〉 など。中世には船海に関する南ヨーロッパ起源の夥しい借用語が現われ、一世紀一世紀と数を増した: Aviso 〈通報船〉, Bai 〈湾〉, Barke 〈マストのない小舟〉, Besan 〈後帆〉, Boje 〈浮標〉, entern 〈かぎで引っ掛けて引き寄せる〉, Flotte 〈艦隊〉,

Fregatte <フリゲート艦>, Golf <湾>, Harpune <モリ>, Havarie <入港税> (arab.), Kai <波止場>, Kajüte <船室>, kalfatern <まいはだを詰める> (arab.), Kap <岬>, Kapitän <船長>, Kastell <前部上甲板>, Kompaß <羅針儀>, Korvette <コルヴェット艦>, Kurs <航路>, Marine <海軍>, Mole <突堤>, Pinasse <三本マスト帆船>, Port <港> など。地中海貿易の衰微と大西洋上での航海の勃興に伴ない, これらのロマン語系借用語の供給は後退し, 低ドイツの船乗りが親しんでいたオランダ語の船員語からの借用語が現われた: Matrose <船乗り> (holl. matroos. 古代フランス語を経て altnord. mǫtunautr <乗組員の食卓仲間> にさかのぼる), Maat <水夫> (mnd. mate <食卓仲間>), Büse <鯉漁船>, Kombüse <船の厨房>, Düne <固い砂丘>, Klüver <船首の三角帆>, Jacht <ヨット>, Fock <前しょう下帆> など。近代に英語からも一連の借用語を受用した (Boot <ボート>, Brise <軟風>, Log <測程器>, Lotse <水先案内人>, おそらく Flagge <船旗> も)。上記の低ドイツ・オランダの船員言葉から本質的に今日の船員言葉が発している。これはやはり中世のドイツの貿易航海におけるイタリア・ロマン語に端を発した名残りを保存している。普通の言葉に移された船員語を挙げておこう: Abstecher <予定以外の寄り道>, Ballast <バラスト→荷やっかい>, Flagge <船旗→旗>, flau <ないだ→弱い>, flott <浮んでいる→気楽な>, scheitern <難破する→だめになる> など。

鉱夫語 (Bergmannssprache) は外来語の構成要素からほとんど完全に免れている (ただ Kux <鉱山株> のみがチェコ語からの借用語である。1300年頃, エルツゲルビゲの南側の山腹で受容された)。鉱夫語は中世の最後の数百年の間に専門語として成立したようであり, 16世紀からまとまった形で登場する。その語彙は多くの古いドイツ語の言語財を保持している, 例えば Haspel <ウインチ>, Klafter <尋>, Lachter <ラハテル (長さの単位, 約 2 m)>, Bulge <革袋>, Schacht <立坑>, Schicht <鉱層>, muten <採掘権を申請する>, Stollen <坑道>, Zeche <鉱山> など。いくつかの鉱夫語は普通の言葉に転化された: Ausbeute <産出量→収

獲〉, Fundgrube 〈埋蔵量の多い新坑→宝庫〉, zutage fördern 〈採掘する→明るみへ出す〉, reichhaltig 〈豊富な〉(元来は、鉱石が), Stichprobe 〈溶解金属の試金→名ばかりの試験〉など。

§ 17. 中世末期の教会とラテン語の知識

教会の公用語として全中世を通してラテン語のみが認められていた。なぜならカール4世は1369年ドイツ語での宗教書を禁じ、また1486年マインツの大司教はドイツ語の翻訳聖書の印刷を禁じたから。そのため夥しい教会語(kirchliche Ausdrücke)が中世を通じてラテン語からドイツ語に移されたことは不思議ではない。それらを挙げてみよう (§ 14参照) :

Absolution 〈免罪〉, absolvieren 〈放免する〉, Anathema 〈破門〉, Chor 〈聖堂内陣〉, Exkommunikation 〈破門〉, exkommunizieren 〈破門する〉, Glorie 〈(神の) 栄光〉, Habit 〈僧服〉, inquirieren 〈審問する〉, Inquisition 〈宗教裁判所〉, Interdikt 〈聖務禁止〉, Kalender 〈暦〉, Kollekte 〈献金, 集禱文〉, Konklave 〈教皇選挙会〉, Konzil 〈公会議〉, Litanei 〈連禱〉, Pastor 〈主任司祭〉, Mirakel 〈奇跡〉, Reliquien 〈聖遺物〉, Sakrament 〈秘蹟〉(これは俗語で感嘆詞 Sapperment 〈ちくしょう, いまいましい〉になった), Passion 〈キリストの受難〉, Prozession 〈行列祈禱〉, Kanon 〈教理〉, Klerisei 〈聖職者〉, Tonsur 〈剃髪〉, Eremit 〈隠修士〉, Talar 〈聖職者制服〉, Kathedrale 〈司教座聖堂〉, Zeremonie 〈儀式〉, Brevier 〈聖務日課書〉, Hostie 〈祭餅〉, Monstranz 〈聖体顕示台〉, Konfession 〈告解〉, Testament 〈神と人との間の契約〉, Bulle 〈教書〉, investieren 〈叙任する〉, Investitur 〈司教職叙任〉, Kapitel 〈司教座聖堂参事会〉, Kurie 〈ローマ教皇庁, 教皇裁判所〉, Lektion 〈聖書の章句の読誦〉, Mandat 〈教皇の指令〉, Paternoster 〈主禱文〉, Sekte 〈宗派〉, Simonie 〈聖物売買〉, Diakon 〈助祭〉, Archidiakon 〈司教座聖堂助祭〉, Kantor 〈合唱指揮者〉, Novize 〈修練士〉, Organist 〈パイプオルガン奏者〉, Oblate 〈修道志願児童, 修道院学校生徒及び第3会員ー 労働修士, 奉献修道会修士, 聖餅〉, Ornament 〈装

飾〉, Sakristei 〈聖物納室〉, Ornat 〈祭服〉, Stola 〈ストラ〉, Hymnus 〈聖歌〉, Requiem 〈鎮魂曲〉, Sequenz 〈続誦〉 など。

教会のミサのラテン語と並んで、托鉢修道会士（ドミニコ会士とフランシスコ会士）の出現以来、ドイツ語による説教（deutsche Predigt）が徐々になされ、特にベルトホルト・フォン・レーゲンスブルク（Berthold von Regensburg）（1250年頃）によって大いに助長された。なかでも神秘主義者（Mystiker）（マイスター・エッケハルト、ゾイゼ、タウラー）（Meister Eckehart, Seuse, Tauler）が書いたものは信仰に関しての、特に精神生活の概念を表わすドイツ語の表現様式を作り出した。神秘的な神への沈潜を特色づける表現に次のようなものがある： Vereinigung 〈合一〉, Gleichheit 〈同一〉, Gemeinsamkeit 〈(神との) 交わり〉, Gegenwartigkeit 〈現存〉, Empfänglichkeit 〈受容力〉, Läuterung 〈浄化〉, Verwandlung 〈化体〉, Erleuchtung 〈開悟〉, Unendlichkeit 〈無限〉, Erhabenheit 〈崇高〉, Eindruck 〈印象〉, Einfall 〈思いつき〉, Einfluß 〈影響〉, Einkehr 〈瞑想〉, Ganzheit 〈全きこと〉, Geistigkeit 〈靈性〉, Unwesen 〈非有〉, übergöttlich 〈超神的な〉, übermenschlich 〈超人的な〉, übernatürlich 〈超自然的な〉, geistig 〈靈的な〉, wesentlich 〈実体のある〉, sachlich 〈具体的な〉, innerlich 〈心からの〉, beschaulich 〈瞑想的な〉, unaussprechlich 〈言い表わしがたい〉, gelassen 〈平静な〉, innig 〈親密な〉, einwirken 〈影響を及ぼす〉, entzücken 〈うっとりさせるとさせる〉, sich ergeben 〈没頭する〉 など。外来語はあまり多くない（Vision 〈幻影〉, Substanz 〈実体〉, spekulieren 〈思弁する〉, kontemplieren 〈瞑想する〉 など）。なお大胆なドイツ化が現われる： Objekt 〈客体〉の代わりに vürwurf あるいは gegenwurf, Subjekt 〈主体〉の代わりに underwurf, Emanation 〈流出〉の代わりに üzvluz など。神秘主義の言語は抽象的な概念を表わす確実なドイツ語の表現様式を作り出した。その際、-heit と -ung に終る名詞並びに不定詞の名詞化が好まれ（Dreiheit 〈三位一体〉, Vielheit 〈多数〉, Wesenheit 〈実体〉, Erneuerung 〈改新〉, Berührung 〈接触〉, Vermengung 〈混合〉; das Sein

〈存在〉など), またドイツ語の哲学用語の基礎が作られた (begreifen 〈把握する〉, einleuchten 〈わかる〉, einsehen 〈洞察する〉, wirklich 〈実在の〉, Eigenschaft 〈属性〉, eigentlich 〈真の〉, Verständnis 〈理解〉, unverständlich 〈理解できない〉, Zufall 〈偶然〉など)。先立つ数世紀の具体的・直観的な言葉の精神化への移行は神秘主義の語彙の特質である。

中世の学問は教会の下女としてくまなくラテン語を使用していたが故に学者語 (Gelehrtensprache) は教会のラテン語の表現様式から形成された。夥しいまず第一に神学の用語が普通の語に転化された, 例えば, disputieren 〈論争する→争う〉, Disputation 〈論争→討論〉, exponieren 〈開陳する→さらす〉, Glosse 〈聖書注解集録→語句注解〉, Text 〈聖書の章句→原典〉, Traktat 〈宗教上の論文→条約〉など。堅苦しい哲学のラテン語の専門語はドイツ語でも一般的である: Philosoph 〈哲学者〉, Philosophie 〈哲学〉, Argument 〈証明〉, definieren 〈定義を下す〉, Definition 〈定義〉, Logik 〈論理〉, Materie 〈質料〉, Metaphysik 〈形而上学〉など。数学 (Mathematik) と自然科学の言葉はラテン語の外来語が豊富である:

addieren 〈加える〉, dividieren 〈割る〉, duplieren 〈2倍にする〉, Exempel 〈算術問題〉, Geometrie 〈幾何学〉, Grad 〈度〉, Minute 〈分〉, multiplizieren 〈掛ける〉, Produkt 〈積〉, Quadrat 〈二乗〉, subtrahieren 〈引く〉, Triangel 〈3角形〉, Zentrum 〈中心〉, Zirkel 〈円〉 (数世紀後になって初めて独自のドイツ語が出来る。Dürer, Kepler, Chr. Wolff); Astronomie 〈天文学〉, Astrologie 〈占星術〉, Firmament 〈天空〉, Komet 〈彗星〉, Magnet 〈磁石〉, Orient 〈東〉, Okzident 〈西〉, Planet 〈惑星〉など。ラテン語の月名は, カール大帝 (Karl der Große) が擁護した古いドイツ語の月名を漸次駆逐した (Hornung 〈2月〉のみはわりに長く保たれた), なお少くともわずかはドイツ語化されている (März 〈3月〉, Mai 〈5月〉, 南部ドイツ語で Jänner 〈1月〉, Feber 〈2月〉)。

錬金術 (Alchimie) の専門語もラテン語の基礎の上に成り立っている: Elixier <靈液>, Essenz <エキス>, Extrakt <エキス>, destillieren <蒸留する>, Element <要素>, Filter <濾過器> (mlat. filtrum <フェルト>, germ. filt <フェルト> が元)。fix(ieren) <固定した (させる)>, hermetisch <錬金術の>, Mixtur <混合>, Tinktur <色合い> (これらは現代化学の専門語のための基本を与えている)。医学 (Medizin) の言葉はおもにラテン語の外来語からなりたっているが, しかし病気の通俗名はドイツ語である (例えば, Hexenschuß <腰痛症> (古い異教信仰の名残り), fallende Sucht <癲間>, Veitstanz <舞踏病>, Schlagfluß <卒中> など)。医学用語として次のような語を挙げておこう: Apotheke <薬局>, Arterie <動脈>, Embryo <胎児>, Fistel <瘻> (lat. fistula), Karbunkel <疔>, Klistier <浣腸>, Kolik <疝痛>, kurieren <治療する>, Medikament <薬剤>, Medizin <医学>, Pestilenz <ペスト>, Pille <丸薬>, Podagra <足痛風>, Puls <脈>, Pulver <散薬>, Rezept <処方> など。まさに本質的には教会音楽である芸術的な音楽 (Musik) の言葉においてもラテン語の専門語がまさっている: Diskant <最高音部>, Dissonanz <不協和音>, Harmonie <和声>, intonieren <音を出す>, komponieren <作曲する>, Melodie <旋律>, Note <音符>, Oktave <オクターブ>, Pause <休止符>, Quarte <4度音程>, Quinte <5度音程>, Resonanz <共鳴>, Symphonie <交響楽>, Takt <拍子>, Tenor <主旋律, テノール>, Terz <3度音程> など。しかし音楽の専門語はその真の特質をイタリアの歌劇音楽の影響によって17世紀に初めて得る (§ 20参照)。

人文主義, ルネッサンス, 宗教改革

§ 18. 人文主義のラテン語の氾濫

全中世を通じてドイツ語にはラテン語起源の外来語が欠けることがなかったにもかかわらず, その徹底化はギリシア・ローマの言語財によって人

文主義 (Humanismus), 即ち古代精神の再生の影響の下に学者の間に強まり, そのためドイツの民族性は語彙と文体が外来語の影響を受けることによって一時的に危険にさらされたようである。学者たちはこの時代には学問上の問題に関してもはやドイツ語で話さなくなった。彼らの書いたものはくまなく古典ラテン語であった(ただ一人人文学者ウルリッヒ・フォン・フッテン (Ulrich von Hutten) はドイツ語で書くことを敢えてし, この企てを勇敢であると誇った)。1520年の神学論は特別の章で, ミサでの民衆語の使用に反対して論じてはっきりとこう述べている: "So nun drü Haupt- und reguliret Sprachen zu dem Dienst Gottes verordnet sein——hebräisch, kriechisch, latinisch——und wir Latiner seind, sollen wir billich die latinische Sprach zu der Messen bruchen. „, <今やミサには3つの主な正式の言葉が規定されている。ヘブライ語, ギリシア語, ラテン語である。我々はラテン人であるので, ラテン語をミサに当然を使用しなければならない>。人文主義の学者世界は教養語としてラテン語しか知らなかった。教養を求める限り, 出来るだけたくさんラテン語の外来語 (zahllose lateinische Fremdwörter) を話の中に織り込むのが, 広い範囲の階級にわたっての流行となった。

さらに新しい点が加わる。全中世を通じてギリシア語 (das Grieschische) は直接にドイツ語に影響を与えることはほとんどなかったが(しかし § 12参照), ギリシア語の学習は, ロイヒリン (Reuchlin 1455-1522) と宗教改革に尽力したメランヒトン (Melanchton) によって大いに奨励され広がった。それでギリシア語の語 (griechische Wörter) も以前よりも数多くラテン語を介してドイツ語, 特に学者語に入ってくることが生じた。この時代に古典の影響がいかに強くなったかは, 姓 (Familiennamen) でさえいくつかラテン語とギリシア語に翻訳されるか, あるいは少なくともラテン語の語尾が付けられたことから明らかである。例えば, Agricola, Avengrius, Faber, Mercator, Pistorius, Textor; Melanchton, Neander, Oecolampadius; Schulerus, Scultetus,

Hoffmanius など。古典語の接尾辞がきわめて自由にラテン語あるいはギリシア語の語幹と結合した。例えば, -os, -erz, -tor, -ian, -al, -aticus, -a, しかもドイツ語起源の語と結合した, 特に学者語及び官庁語において, 例えば, Grobian <無骨ないなか者>, Schlendrian <旧習>, morganatisch <貴賤相婚の> (Morgengabe <朝の贈り物> から)。

この時代には古典語の受用がいかに夥しかったかを, この人文主義の末に発刊されたジモン・ロート (Simon Roth) の手になる最初の外来語辞典が示している (1571年), それは約200のほとんどがラテン語の外来語を載せている。今日なお大きな外来語辞典はそのたくさんの語彙の中で約4分の3がラテン語とギリシア語に由来する学問教養語を含んでいる。その基礎は本質的に人文主義の時代に置かれた。後の時代 (現代に至るまで) になれば, 学問の専門語, 特に化学, 続いて医学, 生物学において外来語が加わる。上記の自然科学の分野で国際的に均一化せんとする語は形から言えばたいてい外来語である。

高等学校と大学が17世紀の終りまで本質としては講義の言葉としてラテン語を保持して来たことにより, 今日まで持続している学問講義 (gelehrter Unterricht) に関するラテン・ギリシア語の外来語を挙げてみよう:

Abitur(ium) <高等学校卒業試験>, Abiturient <高等学校卒業試験の受験生>, Akademie <学士院>, Aktus <学校行事>, Antiquität <古代の美術品>, Auditorium <講堂>, Aula <学校の式場>, Autor <創始者>, Autorität <権威>, Bibliothek <図書館> (これと並んで Liberey), Botanik <植物学>, deklamieren <朗読する>, demonstrieren <実地教授する>, diktieren <口授筆記させる>, Examen <試験>, Exkursion <修学旅行>, Fakultät <学部>, Famulus <助手>, Ferien <休暇>, Fauna <動物相>, Flora <植物相>, Geographie <地理学>, Glossar <用語解>, Grammatik <文法>, Gymnasium <高等学校>, Humanität <人間性>, interpretieren <解釈する>, Karzer <大学の禁固室>, Katheder <講壇>, Klasse <学年>, Kollege <同僚>, Kommentar <注釈>, Kompendium <便覧>, Korrektur <添削>, korrigieren <採点する>, Lek-

tion 〈課業〉, Lineal 〈定規〉, Lyzeum 〈女子高等学校〉, Magister 〈師〉, memorieren 〈記憶する〉, Opus 〈作品〉, Pädagog 〈教育家〉, Pensum 〈課業〉, Prädikat 〈成績〉, präparieren 〈下調べする〉, Professor 〈教授〉, Rektor 〈学長〉, repetieren 〈復習する〉, rezitieren 〈朗読する〉, Scholar 〈学生〉, Prima 〈第一学年〉 から Sexta 〈第九学年〉 (学年の名称として), Stilistik 〈作文の教科書〉, Student 〈学生〉, studieren 〈勉強する〉, Studium 〈研究〉, Universität 〈大学〉, Vokabel 〈単語〉, Vokabularium 〈単語集〉, Zensur 〈成績〉 など。

ほとんどこれらの語はまるっとラテン語の語尾を伴なってドイツ語に移され, そればかりかドイツ語のテキストの中で今日まで厳密にラテン語あるいはギリシア語の規則に従って活用している, 例えば Examina 〈試験〉と Themata 〈題目〉, Tempora 〈時〉と Kommata 〈区切り〉のような複数形成あるいは Jesus Christus 〈イエス・キリスト〉 (与格では Jesu Christo) の格変化において。

人文主義の学問の学者ラテン語から学生言葉 (Studentensprache) の基礎が生じた: fidel 〈愉快的〉, Kommers 〈(大学生の) コンパ〉, Mone-ten 〈ぜに〉, Prosit 〈乾杯〉, Vivat 〈万歳〉, Pereat 〈やっつけろ〉, Silentium 〈沈黙〉, Pros(i)t は一般語に入れられた。諸諺的なドイツ・ラテン語の混成語, いわゆる "makaronisches,, Latein 〈マカロニラテン語〉には次のようなものがある: Pfiffikus 〈おうちゃく者〉, Schwachmatikus 〈腰抜け大将〉, Schwulität 〈難儀〉, Paukant 〈決闘者〉, Exkneipe 〈昔かよった飲屋〉, Konkneipant 〈飲み友達〉。ギリシア語の副詞, 接尾辞-ikos が好まれた。burschikos 〈陽気な〉はその名残りである。本来の意味の学生言葉 (Burschensprache) は17及び18世紀になって初めて作られた。特にイエナ, ハレ, ギーセンの大学で。これは, Fuchs 〈新入生〉, Frosch 〈高校生〉, Affe 〈青二才〉, Kater 〈酔い〉, foppen 〈からかう〉, pumppen 〈借りる〉, Moos 〈金〉 (このいくつかは隠語に由来する) などのようなドイツ語と並んで, いきな時代の幾多のフランス語のなごりを示している: Blamage 〈恥辱〉, Renommage 〈大言〉, re-

nommieren <大言を吐く>, Kontrahage <決闘の約束>, Kneipier <飲兵衛>, trist <悲しい> など。

この時代の官庁 (Kanzleien) はラテン語の語と言い回しに囲まれてわかりにくく民衆には謎のようであったことは確かであった:

Akten <文書>, Aktuar <裁判所書記>, antizipieren <先取する>, Archiv <公文書保管所>, Audienz <謁見>, Auktion <競売>, authentisch <真正の>, cito <急いで>, Deputat <現物給与>, dispensieren <免除する>, disponieren <自由に処理する>, Disposition <処分>, Distrikt <管区>, Exekution <執行>, Faktum <事実>, Familie <家族>, fingieren <捏造する>, Fiskus <国庫>, general <一般の>, gratis <無料で>, inklusiv <含めて>, instruieren <整える>, Instruktion <整理>, Inventar <財産目録>, kassieren <(金を) 徴収する>, Kautel <保留>, Klausel <約款>, Kommission <委任>, Konferenz <会議>, konform <同一の>, Kontrakt <契約>, Konzept <草案>, Motiv <動機>, Nation <国民>, Residenz <居住地>, Skrupel <疑い> など。

称号 (Titel) はカール5世の時代から公式には常にラテン語で呼称された, 例えば Majestät <陛下> (その前にはドイツ Hoheit あるいは Gnaden で呼ばれた), Monarch <君主>, Potentat <君主>, Regent <君主>, Exzellenz <閣下> など。

ローマ法 (das römische Recht) は——ドイツ民族本来の法律観 (§ 14参照) との戦いにおけるその勢力をゲーテの「ゲッツ・フォン・ベルリヒゲン」(第1幕) は明白に描いているが——多量の法律ラテン語をもたらした。それは最近になってやっとまた平易なドイツ語の法律用語にとってかわられた。1945年の上級裁判所の命令によりローマ法全典 (Corpus Juris) がドイツ語の法生活に登場する。これよりドイツ語の法律語にラテン語の外来語が使われる: adoptieren <養子にする>, Advokat <弁護士>, Agnaten <男系の男子>, Alimente <(とくに離別した妻や私生児などの) 扶養料>, Amnestie <大赦>, annullieren <無効を宣する>, appellieren <控訴する>, Appelation <控訴>, Arrest <仮差押え, 拘

禁〉, Assessor 〈陪席判事〉, Delinquent 〈犯罪者〉, Exzeß 〈暴行〉, Hypothek 〈抵当権〉, Injurie 〈名誉毀損〉, inquiren 〈審問する〉, insinuieren 〈交付する〉, Jura 〈法律学〉, Justiz 〈裁判〉, Kaution 〈担保〉, Kodizill 〈遺言〉, konfiszieren 〈没収する〉, konfrontieren 〈対決させる〉, legal 〈法律上の〉, Legalität 〈合法性〉, protestieren 〈異議を申したてる〉, Prozeß 〈訴訟〉 など。刑罰執行の民族本来の表現はドイツ語のままである: über einen den Stab brechen 〈ある人に死刑を言い渡す〉 (古い法律習慣), brandmarken 〈焼き印を押す〉, Steckbrief 〈逮捕状〉, Henkersmahlzeit 〈処刑前の食事〉, Feuerprobe 〈火による神明裁判〉, radebrechen 〈車裂きの刑に処する〉, sich wie gerädert fühlen 〈車裂きにされたように感じる〉, Daumschrauben ansetzen 〈或人を責めたてる〉, こう言った今日ほとんど完全に比喩的に使われた言い方が出来てるように。18世紀にますます強く今日に至るまでだが, 法律規定を単純な国民にもわかりやすく作成し始めた時, 適当なドイツ語の語彙が方言の中から求められた。こうして最初の方言辞典が登場した。現代, 明析なドイツ語の表現様式を求め, 例えば「全ドイツ国語協会」(Allgemeiner deutscher Sprachverein) のような企ての中で第一線をつらねているのは法律家である。ところで, 医学の言葉は専門家の意志により一般にはわからないことを旨としている。これは患者を傷つけるかもしれない。

職業語 (Berufssprache) の中で, まさしく学問の世界と近い印刷者 (Buchdrucker) (最初の印刷者はしばしば自堕落な学生であった) の言葉は人文主義の外来語の波によって決定的な影響を受けた。たしかに15世紀の中頃グーテンベルクによって広められた技術の基礎語はドイツ語 drucken 〈印刷する〉である。この専門語が今日まで上部ドイツ語の音形 (drücken の代わりに drucken) を保持してきたことは特徴的である。印刷術は南ドイツで発明され, まず広められた。ドイツ語の専門語はまだ生き残っている: Buchdrucker 〈印刷者〉と Buchbinder 〈製本者 (15世紀初頭以来)〉, Buchhändler 〈書籍商人〉 (初めは Buchführer), ver-

legen <出版する>, Verleger <出版者> と Verlag <出版社> (verlegen はもともと「本の印刷にかかる費用を立て替える」の意味), setzen <植字する> と Setzer <植字工>, Schweizerdegen <植字兼印刷工>, など。並びに Hochzeit <重複>(二重に植字した語), Leiche <脱漏語句>, Zwiebelisch <乱雑になった活字の組>, Fliegelkopf <伏せ字>, Spieß <よごれ> (間違って一緒に印刷されたスペーサー), Speck <空白> などのような誤植を表わすいくつかの技術語。だが普通印刷工はラテン語の専門用語を使っていた: Abbreviatur <略語>, Alinea <段落>, Autor <印刷者>, Divis <ハイフン>, Divisorium <固定棒>, Exemplar <冊>, Faksimile <ファクシミリ>, Format <判>, illustrieren <挿画を入れる>, Impri-matur <印刷出版許可>, Initialen <頭文字>, Kolumne <段>, korri-gieren <校正する>, Korrektor <校正者>, Korrektur <校正>, Man-uskrip <印刷のための原稿>, Makulatur <刷りぞこない>, Noten <注>, Pagina <丁付け>, paginieren <丁付けする>, Presse <印刷機>, Reri-sion <校正>, Spatium <字間>, Tenakel <原稿架>, Type <活字> など。さらに Folio <二つ折り判>, Quart <四つ折り判>, Oktav <八つ折り判>, Duodez <四六判> などのような判の名, Cicero <12ポイント活字>, Corpus <10ポイント> などのような活字の大きさ (後にパリの活字鋳造の優勢により, Colonel <7ポイント>, Petit <8ポイント>, Non-pareille <6ポイント> のような2, 3のフランス語の名が登場する)。

手工業 (Handwerke) はルネッサンスの時代に美的な面及び工芸の面で最盛期に達した。必要な語は本質的にはドイツ語で補なわれた。建築術には中世の聖堂建築以来たいていラテン語に由来する外来語が認められる: Abseite <教会の後陣> (griech. -lat. absida), Erker <出窓> (北フランス方言 arquièrre <銃眼> から), Kapitell <柱頭>。これらに16世紀には Architekt <建築技師>, Architektur <建築術>, Architrav <台輪>, Fries <フリーズ> などが加わる。絵画, 彫刻, 鋳金, 金細工は, 他のドイツ語の手工業用語のように, 大部分ドイツ語で足りている。今日もはや使われなくなったいくつかの適当な語が当時使われていた, アルブレ

ヒト・デューラーが *Tafel* 〈絵〉とか *Schilderei* とか言ったように。遠近法 (*Perspektive*) という新しく出来た理論は外来語で名付けられた。ところでイタリア・ルネッサンスの外来語は17世紀に初めて多量に入ってきた (オペラ音楽の新しい芸術において一番強い, § 20参照)。この粗野な時代にしばしばがさつな茶番劇, 庶民的ななぐさみ, 政治的・宗教的な闘争文学に限定されていたドイツ文学 (*Dichtung*) は概ね母国語でこと足りた。16世紀の末になってやっとギリシア・ラテン語の外来語を好む傾向が増した, そして徐々にフランス語起源の表現が好まれるようになった。この時代の言語創造力が相変らずいかに強かったかは, ドイツ語をしやれ, 冗談, 大胆な造語においてたくみに扱っているフィシュアルト (*Johann Fischart* 1546~90) の語彙から明らかである。新しい外来語のための民間語原学はその際少なからず役割を演じている, たとえば彼は *melancholisch* 〈憂鬱な〉の代わりに *maulhenkolisch*, *Podagra* 〈足痛風〉の代わりに *Pfotengram*, *Profession* 〈職業〉の代わりに *Brotfrission*, *abenteuerlich* 〈冒険的な〉 (これ自体民間語原によって *franz. aventure* から) の代わりに *affentheuerlich* を作った。

アメリカ大陸 (*Neue Welt*) とインドへの航路の発見はそれに伴って外国の商品と動物が知られることによっていくつかの外来語をドイツ語にもたらした, 例えば *Mais* 〈とうもろこし〉 (1500年頃ハイチ島から), *Kaffee* 〈コーヒー〉 (1582年アラビア語), *Kakao* 〈ココア〉 (メキシコから), *Ananas* 〈パイナップル〉, *Kanarienvogel* 〈カナリア〉, *Kannibale* 〈人食い〉, *Orkan* 〈ハリケーン〉 (この二つは元々カリブ語), *Bambus* 〈竹〉 (マライ語), *Tabak* 〈タバコ〉など。

§ 19. マルチン・ルターと新高ドイツ語の文章語

ルターの宗教改革のきわめて重要な言語的成果として, 本書の扱う範囲で *Sieg des Deutschen über das Lateinsche in der Kirchen-und Büchersprache* 〈教会語並びに文章語におけるラテン語に対するドイツ語の勝利〉ということが挙げられなければならない。ルターの影響はその

際十二分に高く評価されねばならない。「言語とは何かを知っている人はルターを尊敬しなければならない。ルターほど自分の言葉を形成した者は他の民族には見られない。」とクロップシュトックが言ったのは正しい。ルターは、かつて信じられていたように、新高ドイツ語の文章語 (*neuhochdeutsche Schriftsprache*) の創造者ではない。新高ドイツ語の文章語はドイツ文化に新しく開かれた東中部ドイツの植民者の通用語から出来上がった。ルター (*Wittenberg*) は彼の聖書翻訳の言語をクールザクセンの官庁の言語とし、彼の宗教改革書の遠くに達する勢いによってそれを決定的に促進させた。ラテン語時代の只中であって、つまり人文主義世界の外来語の洪水の只中であって、ルターはこの新しいドイツ語の民衆語を文章語までにした。それはラテン語時代の書籍生産量を一目すればわかる。1518年までドイツで1年にドイツ語で出版される書籍数は100冊弱であり、それに反して全印刷物の90%はラテン語であったが、ルターの出現によってすでに260冊を数えていた1519年からその数は増し、20年代の中頃には1000冊に達した。もちろん1570年にはラテン語で書かれた印刷物の数は依然全体の約70%であった。18世紀の初めになって初めて30%に落ち18世紀の終りには5%になる。1681年に初めてドイツ語の書籍はラテン語の書籍を上回る。ラテン語に対するドイツ語のこの勝利は、*Muttersprache* 〈母国語〉という語がルター時代に意味を見出し、16世紀の終りからドイツ語がしばしば *Haupt-und Heldensprache* (主要語・英雄語) という尊敬を得たことからもうかがわれる。§ 24参照。

今や語彙の領域における神学の分野の言語的成果は、プロテスタントの専門語 (*protestantische Fachausdrücke*) のかなりが普通の言葉に転化するということであった: *Protestant* 〈プロテスタント→抗議者〉と *protestantisch* 〈プロテスタントの→抗議の〉自体もちろん後になって初めて一般に用いられるようになった (1529年のシュパイアの帝国議会後)。 *protestantisch* に対する最初の表現は *lutherisch* 〈ルター派の〉であった。 *evangelisch* 〈プロテスタントの〉は1520年から符丁語及び党派語として登場する (まず *evangelische Lehre* 〈プロテスタントの考え〉)。

さらにプロテスタントに関する今日使われている用法には次のようなものがある： *Konfession* 〈信仰告白〉（特に 1530 年の「アウクスブルク信仰告白」以来），*Reformation* 〈宗教改革〉と *reformieren* 〈革改する〉（これらはもちろん 15 世紀の改革会議の時代にもすでに大いに用いられていた），*Kommunion* 〈聖餐式〉，*konfirmieren* 〈堅信礼を施す〉，*Dissident* 〈他宗者〉，*Kantor* 〈聖歌隊指揮者〉，*Kultus* 〈礼拝〉，*Konsistorium* 〈宗教局〉，*Pastor* 〈牧師〉，*Superintendent* 〈プロテスタント教区の監督〉など。新しい意味の下にそして新しい感情の内容で，一般的になったのはたいていかなり古い教会語であった。これと並んで教会闘争の時代は夥しい新しい言葉を作り出した。そのうちの一部のみは今日生き残っている。例として挙げてみよう：*Martinisch* 〈ルターのような〉，*Eckisch* 〈エックのような〉，*Freiheit* 〈自由〉，*Evangelium* 〈福音〉，*Ketzzer* 〈自由信仰主義者〉，*Bilderstürmer* 〈聖像破壊論者〉，*Schwärmer* 〈狂信者〉，*Schwarmgeist* 〈狂信〉，*Rottengeist* 〈党派心〉，*Antichrist* 〈反キリスト〉，*Papist* 〈教皇主義者〉，*Romanist* 〈ローマ法学者〉，*Lutherischer* 〈ルター派の信者〉（後には *Lutheraner*），*Zwinglianer* 〈ツヴィングリー派教徒〉など。*Feuereifer* 〈燃えるような熱意〉，*Bubenstück* 〈卑劣な悪事〉，*Lästernaul* 〈悪口屋〉，*Mördergrube* 〈人殺したちの巣〉，*Wehklage* 〈嘆き〉，*Wehmut* 〈悲哀〉などのような語創造はルターにさかのぼる。数多くの聖書の言い回しや慣用句は，表現様式を選ぶさいに，外国の文字ではなく，家庭の母，路上の子供，市場の平凡な男に尋ねたルターの大衆的な聖書の翻訳によって，普通の言葉に転化した：*je-mand die Leviten lesen* 〈ある人をきびしくしかる〉，*Hiobspost* 〈悪い知らせ〉，*der ungerechte Mammon* 〈悪銭〉，*Zeichen der Zeit* 〈時代の徴候〉，*Stein des Anstoßes* 〈つまずきの石〉，*mit Blindheit geschlagen* 〈失明した〉，*Krethi und Plethi* 〈有象無象〉，*ein Dorn im Auge* 〈目ざわりなもの〉，*Splitterrichter* 〈あげ足取り〉，*mit fremdem Kalbe pflügen* 〈人のふんどしですもうをとる〉，*im Schweiß seines Angesichts* 〈額に汗して〉，*ein Kind des Todes* 〈死ぬべき運命〉，

Linsengericht <(だいじなものを捨てて手に入れる) くだらないもの>, sein Licht unter den Scheffel stellen <けんそんして自分の才能を隠す>, sein Scherflein beitragen <少しばかりの寄進をする>, mit reinem Pfunde wuchern <自分の才能を発揮する>, durch die Finger sehen <ある人のことを大目に見る>, herrlich und in Freuden leben <気楽に暮らす> など。

この時代の宗教上の特色が名 (Vorname) を選ぶさいににも反映されている。まず第一に聖書からのそして古典からの名, 例えば, Johannes, Martin, Thomas, Desiderius, Phillipp, Sebastian などが好まれたが, 続く時代 (特に18世紀) にはドイツ語で作られた宗教的な名が使われた: Fürchtegott, Ehregott, Traugott, Gotthold, Gottfried Gottlieb など。19世紀の初めになって初めて世俗的な名が再び多くなって来た。

ルター時代の特徴であり, 毒舌の名人であったルターも高く評価している「粗野な精神」(grobianischer Geist) は Dr. Eck <エック博士> の代わりに Dreck <糞>, これに反して Luther <ルター> の代わりに Luder <畜生>, Dekretal <教皇の教令> の代わりに Dreckental <糞+谷>, Jesuiter <イエズス会士> の代わりに Jesuwider <イエスの+敵対> などのような乱暴な語の曲解にまで手をのばしたり, Babylonische Hure <バビロンの売春婦>, Teufelsmäuler <悪魔口>, Teufelskinder <悪党>, Teufelsgeschmeiß <悪魔が生んだもの>, Schlangenbrut <悪人連中>, pestilenzisch Übel <ペストのような悪> などのような罵言にまでも手を出した。

ルター時代の圧倒的な外来語の勢力に対してルターは穏健な態度をとった。散文の中では彼は外来語 (Fremdwort) を完全には拒絶しなかった。例えば Majestät <尊厳>, Glorie <栄誉>, Pestilenz <ペスト>, Finanz <財政>, Lektion <課業>, disputieren <論争する>, Element <要素>, Exempel <例>, fanatisieren <狂信的にする>, Artikel <箇条>, Kapitel <章>, Person <個人> などがしばしば見られる。だがルターの聖書

翻訳は外来語からほとんど完全に離れている。彼の論敵エックの翻訳にはまだ prophetisieren 〈予言する〉, Fundament 〈基礎〉, Orient 〈東洋〉, Glorie 〈光栄〉, Ampel 〈つりランプ〉, Regent 〈支配者〉などの外来語が出てくるが、ルターはそれらを weissagen, Grund, Morgen, Herrlichkeit, Fackel, Herr にした。ツヴィングリー (Ulrich Zwingli 1484-1531 スイスの宗教学者) も彼の言語においてほとんど完全に外来語から離れている。

ルターの聖書翻訳の言語的に主要な意義は、若干の元元は中部ドイツの方言 (mitteldeutsche Landschaftswörter) ——そのいくらかは以前に低地ドイツ語から東中部ドイツ語に移されていた——が文章語になったこと、そしてそのことにより当該の上部ドイツ語を駆逐したことにある。中部ドイツ語起源の語には次のようなものがある: Götze 〈偶像〉 (obd. Abgott), Grenze 〈境界〉 (obd. Mark), beben 〈震える〉 (obd. bidmen), Pflaster 〈舗石〉 (obd. Estrich), Lippe 〈唇〉 (obd. Lefze), harren 〈待つ〉 (obd. warten), fühlen 〈感じる〉 (obd. empfinden ないし spüren), bunt 〈色とりどりの〉 (obd. gesprenkelt), fett 〈肥えた〉 (obd. feist), Pfuhl 〈池〉 (obd. Teich), Ufer 〈岸〉 (obd. Gestad), Kahn 〈小船〉 (obd. Nachen), Hügel 〈丘〉 (obd. Bühel), Ziege 〈山羊〉 (obd. Geiß), Splitter 〈破片〉 (obd. Spreiß), täuschen 〈欺く〉 (obd. trügen), empören 〈激怒させる〉, ernten 〈収穫する〉, freien 〈求婚する〉, gehorchen 〈或人に従う〉, albern 〈無思慮な〉, lüstern 〈熱望する〉, schüchtern 〈内気な〉, wichtig 〈重要な〉, Heuchler 〈偽善者〉, Stachel 〈針〉, tadeln 〈非難する〉など。「職, 地位」の意味での Beruf (以前は「召命」の意味) 及び「理由」の意味での Grund (以前は「根底, 基礎」の意味) も同じようにルターの語法にさかのぼる。ルター聖書翻訳の初期には上部ドイツ向け版はしばしば語彙索引がついていた。それは親しみのない新しい表現を南ドイツの人々のために彼らのドイツ語に翻訳したものである。時が経つにつれてルターによってもたらされた語は、1600年頃にはスイス人が使うほど一般化した。ドイツ語圏のいく

つかでは、新しい語法が完全に滲透するまでには無論長い間かかった。特に低ドイツは新しい語に長く抵抗した。ルターの言語が真の勝利を得たのは、18世紀の古典作家がルター聖書にさかのぼる文学語に芸術的な力を与えた時が最初であった。語彙の完全なる単一化はもっともドイツ語圏では今日まで果されていない。日常語には夥しい方言の相違がある、例えば「肉屋」を表わす *Fleischer/Metzger/Schlachter/Selcher*,あるいは「指物師」を表わす *Tischler/Schreiner*,「ブリキ職人」を表わす *Klempner/Spengler* などの手工業者の名称において、「土曜日」を表わす *Sonnabend/Samstag*,「生クリーム」を表わす *Sahne/Rahm*,「キャベツ」を表わす *Kohl/Kraut* などのような同義語において。文学の語法においても見られる。その場合はたとえばオーストリアとかスイスとか低ドイツ出身の作家の場合全く方言を用いていない著述の中にさえ方言的な特色が依然として感じられる (§ 7 参照)。そのような地方的な語を選ぶことは非常に好まれ得る。

バロック時代と当世風な言語

§ 20. 音楽の語彙

中世及び16世紀に至るまで発達した音楽専門語彙は概ね教会音楽と宗教歌のためにのみ存在していた（再び零落した職匠歌人歌の表現様式を除いて）。音楽の専門用語は本質的にはカトリック教会のラテン語に由来している (§ 17 参照)。厳密な意味での音楽専門語 (*musikalische Fachsprache*) は1600年頃になって初めて、16世紀の末以来、オラトリオとオペラ音楽が栄えたイタリアからドイツ語にもたらされた。古い教会音楽の夥しいラテン借用語が今日の音楽用語に至るまで残っている。例えば *Alt* <アルト>, *Baß* <バス>, *Diskant* <最高音部>, *Tenor* <主旋律>, *Musik* <音楽>, *Choral* <コラール>, *Note* <音符>, *Harmonie* <和音>, *Rhythmus* <リズム>, *Takt* <拍子>, *Komposition* <作曲>, *Instrument* <楽器>, *Orgel* <パイプオルガン>, *Melodie* <メロディー>, *Kontrapunkt* <対位

法〉(この語から通俗語 *kunterbunt* 〈ゴチャゴチャした〉が出た。元の意味は「多声の」)。音楽芸術の今日の表現法はイタリア語の外来語にさかのぼる。17世紀に、そればかりか一部は18世紀になって初めて大量にもたらされた。音楽のきわめて単純な通俗的な基礎語のみが元からドイツ語である: *singen* 〈歌う〉, *spielen* 〈演奏する〉, *blasen* 〈吹き鳴らす〉, *Stimme* 〈声〉など。*Leier* 〈リラ〉, *Laute* 〈リュート〉, *Fiedel* 〈フィーデル〉, *Harfe* 〈ハープ〉, *Geige* 〈バイオリン〉などの大衆的な楽器にさえ、ロマン語から借用された(すでに中世に)名がついている。厳密な意味での技術的な専門用語はやはりすべてイタリア語 (*Italienisch*) からとり入れられている。イタリア語の音楽語の最も古い層として、すでに16世紀に借用されたが、次のようなものが挙げられる: *Kapelle* 〈聖歌隊〉, *Sonate* 〈ソナタ〉, *Motette* 〈モテット〉など。1600年頃イタリア語が夥しく入って来た: *Adagio* 〈アダジオ〉, *Allegro* 〈アレグロ〉, *Arie* 〈アリア〉, *Bariton* 〈バリトン〉, *Bombardon* 〈低音らっぱの一種〉, *Bratsche* 〈ヴィオラ〉, *Finale* 〈終楽章〉, *forte* 〈強く〉, *Fuge* 〈フーガ〉, *Konzert* 〈協奏曲〉, *Oper* 〈オペラ〉など。18世紀の初めにはさらに次のような語が加わる: *Mandoline* 〈マンドリン〉, *Duett* 〈2重唱〉, *Operette* 〈オペレッタ〉, *Solo* 〈独唱〉, *Sopran* 〈ソプラノ〉, *Violine* 〈バイオリン〉, *Violincello* 〈チェロ〉(後に *Cello* に縮められた) 及び *accelerando* 〈次第に速く〉, *andante* 〈ゆるやかに〉, *piano* 〈弱く〉, *pianissimo* 〈非常に弱く〉, *forissimo* 〈極めて強く〉, *decreasing* 〈漸次弱く〉などのたくさんの演奏語の名前。イタリア語の用語と並んでフランス語の専門用語がもたらされた: *Fagott* 〈ファゴット〉と *Flöte* 〈フルート〉(1600年頃フランス語から), *Hoboe* 〈オーボエ〉(1700年頃フランス語 *hautbois* から)。 *Klavier* 〈ピアノ〉, *Taste* 〈鍵〉(18世紀), *Pianoforte* 〈ピアノ〉, *Piano* 〈ピアノ〉(19世紀) のような音楽用語は比較的新しい。

§ 21. 軍 事 用 語

厳密な意味での軍事専門語は中世にはまだなかった。戦闘と戦略は普通

の人の問題であったので, **Krieg** 〈戦争〉, **kampfen** 〈戦う〉, **Heer** 〈軍〉, **Schlacht** 〈戦い〉, **Sieg** 〈勝利〉 などのように, 戦争を表わす表現は, 騎士階級がフランス語の専門用語を借用しない限り, 一般の語彙を用いていた (§ 15 参照)。中世末期における職業的軍隊としての傭兵隊の成立と共に, 以前とは違ったあらゆる軍事を表わす真の意味での専門語 (*wirkliche Fachsprache für alles Militärische*) が出来上がった。それらの表現はまず第一にたいていフランス語からの借用語 (*zunächst meist französische Entlehnungen*) である。例えば **Sold** 〈給料〉, **Söldner** 〈傭兵〉, **Rotte** 〈分隊〉, **Standarte** 〈軍旗〉 (これらすべてすでに中高ドイツ語にあった) などはフランス語から, **Kartaune** 〈カルタウネ砲〉 (1475年頃) と **Soldat** 〈兵士〉 (1500年以後) はイタリア語に由来する。それでも外来語と並んで, **Fähnrich** 〈旗手〉, **Hauptmann** 〈大尉〉 のようなかなり古いドイツ語が引き続き使われたか, あるいは **Feldwebel** 〈曹長〉, **Feldherr** 〈将帥〉, **Feldscher** 〈軍医〉, **Feldzeichen** 〈隊旗〉, **Feldzeugmeister** 〈造兵廠の長官〉, **Feldzug** 〈出征〉, **Kriegsknecht** 〈兵卒〉, **Landsknecht** 〈傭兵〉, **Oberst** 〈大佐〉, **Wachtmeister** 〈曹長〉, **Zeughaus** 〈兵器庫〉 (すべて16世紀の用語) などの新しいドイツ語が作られた。*lat. exemptus* 〈(衛兵勤務から) 解放されて〉 の直訳借用語, **Gefreiter** 〈上等兵〉 も同様に16世紀の末に登場した。

これらのドイツ語の用語と並んで, 16世紀以来そして三十年戦争の時代にはますます量を増して, たくさんの種々な外来の軍事語がヨーロッパのほとんどあらゆる言語から, その時代の傭兵隊の種々な出身に応じて, ドイツ語の軍隊語に入った。

それらの外来語は由来から言えばかならずしもある一定の言語に帰され得ない。しばしば種々なロマン系言語が競い合っている。フランス語に起源語 (*Ursprungssprache*) として特にスペイン語 (*das Spanische*) とイタリア語 (*das Italienische*) が加わる。2, 3の語のスペイン語起源は音形から証明されうる (例えば, **Brigade** 〈旅団〉, **Infanterie** 〈出兵〉 など)。

次のような軍事専門語はロマン語起源 (Romanischer Ursprung) である:

Adjutant <副官>, Alarm (元々, イタリア語の呼び声 all' arme <武器を取れ>, Alarm と並んでかなり古い形 Lerman は Lärm <雑踏> になった), Armee <軍勢>, Arsenal <兵器庫> (元々アラビア語, ヴェニスを経てドイツ語に入った), Artillerie <大砲>, Bagage <行季>, Bajonett <銃剣> (フランスの都市 Bayonne にちなんで), Bande <一隊>, Bataille <会議>, Bataillon <大隊>, Batterie <砲台>, blockieren <封鎖する>, bombardieren <砲撃する>, Bombe <爆弾>, Bresche <突破口>, Brigade <旅団>, Chef <指揮者>, Defensive <防御>, defilieren <分裂行進する>, Deserteur <逃亡兵>, desertieren <逃亡する>, Division <軍団>, Dragoner <竜騎兵>, Epaulette <肩章>, Eskadron <騎兵隊>, Etappe <兵站>, exerzieren <訓練する>, Flanke <側面>, Fort <とりで>, Front <戦線>, Furage <馬糧>, furagieren <糧秣を受領する>, Füsilier <軽歩兵>, Galopp <ギャロップ>, galoppieren <馬をギャロップで駆けさせる>, Gamasche <ゲートル>, Garde <近衛兵>, Garnison <駐屯地>, General <将軍>, Granate <榴弾>, Grenadier <てき弾兵>, Gros <主力>, Infanterie <歩兵>, Ingenieur <工兵> (本来の意味は「要塞構築師」), Kaliber <口径>, Kamerad <戦友>, Kanone <大砲>, Karabiner <騎銃>, Karree <方陣>, Kartusche <弾薬筒入れ>, Kasematte <(要塞の) 防弾室>, Kaserne <兵営>, Kavallerie <騎兵>, Kommandant <指揮官>, kommandieren <指揮する>, Kommando <命令>, Kommiß <兵士への官給品>, Kompanie <中隊>, Kornett <騎兵旗手>, Korporal <伍長>, Korps <兵団>, Kürass <胸甲>, Kürassier <甲騎兵>, Lieutenant <少尉>, Major <少佐>, Marketender <従軍商人>, Munition <軍需品>, Offizier <将校>, Palisade <矢来>, Parade <観兵式>, Pardon <助命>, Parole <合言葉>, Patrone <弾薬筒>, Patrouille <斥候>, Pionier <工兵>, Ronde <巡察>, Sergeant <軍曹>, Spion <スパイ>, Train <輜重>, Truppe <部隊> など。

これらのロマン語起源の語と並んで、トルコ戦役 (Türkenkriege) 及び三十年戦争の東方民族の参加の結果、若干のスラヴ及び近東の言葉 (slawische und orientalische Ausdrücke) がドイツ語の軍隊用語に入り込んだ: Attila <驃騎兵服> (ハンガリア語), Dolman <驃騎兵の毛皮付きの上着> (トルコ語), Haubitze <榴弾砲> (チェコ語, フス戦役 (1420-1434) 以来), Horde <軍勢>, Husar <驃騎兵> (ハンガリア語, got. hansa <従者> からスラヴ語を経て, Kluge Wb. 参照), Kalpak <驃騎兵の毛皮帽>, Litewka <折りえり軍服> (ポーランド語), Pallasch <直身刀>, Pandur <ハンガリア出身の歩兵>, Pekesche <筐縁のある毛皮外套>, Säbel <刀> (ハンガリア語かポーランド語), Schabracke <飾り馬衣>, Tschako <軍帽> (ハンガリア語), Ulan <槍騎兵> (ポーランド語) など。きっとスウェーデン語から三十年戦争の時に Flinte <火打石銃> (スウェーデン語 flinta <火打ち石>) は借用されたにちがいない。

すでに17世紀に国語愛護者を悲嘆たらしめた外来語のこういう氾濫は何度も改めようとされたにもかかわらず大部分は現代の軍隊語にまで生き残っている。近代になって初めてドイツ語化が成功している, 例えば Premierleutnant の代わりに Oberleutnant <中尉>, Avantageur の代わりに Fahnenjunker <旗手>, Terrain の代わりに Gelände <地形>, Reveille の代わりに Wecken <起床>, Patrouille の代わりに Spähttrupp <偵察隊> など。軍事の官制専門語はかなり古いドイツ語を新しくよみがえらせた (Schützengraben <散兵壕>, Unterstand <地下壕>, Verhau <鹿砦>, Stellung <陣地> など) かあるいは新しい物にドイツ語の名を付けた (英語の Tank の代わりに Kampf あるいは Panzer/wagen/ <戦車>, Kampfflieger <爆撃機>, Abwehrschlacht <防衛戦> など)。

§ 22. 隠語と戦場語

軍隊用語, 即ち軍事専門概念の具体的名称 (§ 2 参照) と並んで三十年戦争の時代には特殊語及び秘密語としての兵隊語も発達した。それは軍事をも日常事をも特殊な表現で表わしている。こういう “戦場語”, (Feld-

sprache) は強く隠語的な色彩をおびている (§ 7 参照)。傭兵と流浪民の間にはあまり区別がなかった。しばしば隠語と戦場語は同義語として扱われた, 例えばシュレージエン人 Wencel Scherffer による Geist-und Weltlicher Gedichte, Erster Teil, Brieg 1652, 420: Teutsche Ordonantz vermischet mit gewöhnlicher Feld-oder Rotwälschen Sprache (普通の戦場語あるいは隠語とまじったドイツ語の命令)。ブランクの「愚人の船」(Narrenschiff) (1494) の中の乞食の章によって, 隠語はドイツ文学に登場する。それと並んで, 1510年以来 Liber Vagatorum 『流浪者の書』の題で, 乞食及び他の賤民との付き合いのための助言書として種々な版が出された。それらにはその都度隠語の用語集が付けている。そのような傾向によってルターは1528年 "Von der falschen Betler buberey,, 「にせ乞食の悪行について」の題で小冊子を発刊した (Weim. Ausg. 1, Bd. 26 [1909] 634)。その当時ゲーゲンバッハとモッジェロッシュが隠語と戦場語の研究をした。文献学者としてホッフマン・フォン・ファラスレーベンはそれに携わった。それらの語のほとんどは文献上豊富に伝承されているにもかかわらず現代の兵隊語に生き残らなかった。現代の兵隊語は国民皆兵義務の時代 (Zeitalter der allgemeinen Wehrpflicht) の所産であり, 比喻に満ち, しばしばユーモア豊かな多様性をもって, 一般の日常語, 一部は方言の語彙に基づいている。それでも, abgebrannt <一文無しの>, heller Haufen <大挙>, Vorteil <利益> (元々「先取りされ戦利品の分け前」の意味), Spießbruten laufen <二列の兵隊の間をむちで打たれながら通らされる→あざけりの目でジロジロ見られる>, Fersengeld geben <ずらかる>, unsicherer Kantonist <頼りにならない人>, aufs Korn nehmen <槍玉に上げる> などのような戦場語に由来するいくつかの語や言い回しは比喩的表現として一般語となっていて残っている。モッジェロッシュの語彙集の中から Moos <金> と foppen <からかう> のみが知られている。かなり古い隠語の中からはさらに Ranzen <腹>, schäkern <からかう> (foppen のように元々は「嘘をつく, だます」の意味), schwänzen <ぶらぶらする>, Stromer <浮浪人>

などが知られている。

§ 23. 当世風の外来語の悪趣味と言語協会

三十年戦争の時代のような時代は、文化史の上で、外国の (welsch) 流行が好まれたことにちなんで当世風の時代 (alamodische Zeit) と名付けられている。この時代は人文主義の時代の外来語の導入を継承している。ただ今度は、ラテン語表現に対する愛着が本質的にはほとんど後退しなかったにもかかわらず、ラテン語表現はずっと少なくなった。外来語といえばロマン語起源、特にフランス語起源の語である。今度の対象は学者ではなく、宮廷・上流社会である。彼らはきわめてフランス語で（これと並んでイタリア語でも、あるいはウィーンのように、スペイン語で）話しそもそもドイツ語を使うとすれば、外国語を織り交ぜて話した。こういう悪習がはびこった三十年戦争の時代のみはその罪を帰せるのは正しくない。ロマン語の外来語の洪水はすでに16世紀の末に始まった。16世紀の末の時代の言語に普通であり可能であったそのような語の流行を、例えばニュールンベルクのグスタフ・アドルフ軍を撃退したヴァレンシュタインの手紙が示している: Das combat hat von frühe angefangen und den ganzen Tag caldissimanente (ital. = hitzig) gewährt. Alle Soldaten Ew. Kaiserl. Armee haben sich so tapfer gehalten, als ichs in einer occasion mein Leben lang gesehen, und niemand hat einen fallo (ital. = Fehl) in valor (ital. = Tapferkeit) gezeigt. Der König hat sein Volk über die Maßen discouragirt (entmutigt), daß er sie hazardosamente (span. = auf gut Glück) angeführt, daß sie in vorfallenden Occasionen ihm desto weniger trauen werden. Ew. Majestät Armee aber, indem sie gesehen, wie der König repussirt (franz. = zurückgewiesen) wurde, ist mehr denn je assekurirt (sicher gemacht) worden., 「戦いは朝早くから始まり、一日中激しく続けました。陛下の軍隊は、私の生涯のうちで初めて目にしたほど、勇敢にもちこたえました。誰も勇気の欠けている

者はいませんでした。グスタフ王は運を天にまかせて部下を率いるほど、彼らを過度に落胆させました。それで彼らは彼を不意に起った場合にそれだけですす信用しないでしょう。しかし陛下の軍隊は、グスタフ王が撃退されたのを知ったことで、前よりも一層強国になりました」。当世風の表現様式の例証としてさらに恋文の冒頭を挙げておこう、これはリストの "Rettung der Edlen teutschen Hauptsprache,, (1642) に載っている：

A Tresnoble Damoselle Adelheit von Ebrenberg, ma treschere maitresse. Meine allerliebste Dame, die große perfection, womit der Himmel selber euwre glorificirte Sehle hat erfüllet, zwinget alle amoureuse Cavalliers, daß sie sich für euwrer hochwürdigen grandesse humliijren und alß unterhänigste gehorsamste Schlaven zu den Scabellen (=Schemeln) euwrer prächtigen Füëße nieder legen. Sie perdonnire mir, aller schönste Dame, daß ich die hardiesse (=Kühnheit) gebrauchte, mich jren allerunterhänigsten Serviteur zu nennen: Der grimmige Amor, welchem zu resistiren keine einzige Creatur bestandt (=fähig) ist, hat mich mit einem solchen Titul und Nahmen schon lengst privilegiret, deme sich zu opponiren ich mich viel zu schlecht und gering erkenne,,

「高貴なる婦人アーデルハイト・フォン・エーレンベルク様、私の忠実で愛する女主人へ。私の最愛なる婦人、天自らあなたの輝かしき魂に与えた偉大なる完全さは、すべての恋する男を、彼らがあなたの尊敬すべき威厳のためにへりくだり、卑屈なる従順なる奴隷としてあなたの美しき御足台の前にひざまずくようにさせます。うるわしき婦人よ、私があるの最も卑屈なる下僕と自分を呼ぶ勇気を授けたことをお許し下さい。何ものも抵抗することが出来ない怒り狂った愛の神アモールはもうすでに次の称号と名前を誰よりも私に対して与えてくれました。それらに私は抵抗するのに私はつまらなすぎて、小さすぎると認識している」

かくしてこの時代には呼びかけの形式はまったくフランス語となった (Monsieur 〈……氏〉, Madame 〈……夫人〉, Mademoiselle 〈……嬢〉 (これから Mamsell が出来た), Baron 〈男爵〉, Baronesse 〈男爵令嬢〉 など)。ほめ言葉はフランス語でなされた。いきな紳士がのろう時には、彼はその時にさえフランス語を選んだ。平凡な親族名, Vater 〈父〉, Mutter 〈母〉, Oheim 〈伯父〉, Muhme 〈伯母〉, Vetter 〈従兄弟〉, Base 〈従姉妹〉などでさえこの時代には Papa, Mama, Onkel, Tante, Cousin, Cousine などのフランス語の名称に置き換えられた, 今日まで生き残っている習慣である。まさに標語的性格を帯びている語が特にしばしば用いられた: Mode 〈流行〉, nach der Mode 〈当世風に〉あるいはいたいてい à la mode, alamodisch 〈当世風の〉, Alamodist 〈いきな人〉, brav 〈けなげな〉, exzellent 〈すぐれた〉, nett 〈親切的な〉, nobel 〈高貴な〉, Dame 〈貴婦人〉, Demoiselle 〈令嬢〉, Kavalier 〈紳士〉, Galan 〈恋人〉 (スペイン語から), galant 〈(女性に) いんぎんな〉, Favor 〈好意〉, Courtoisie 〈いんぎん〉, Pläsir 〈楽しみ〉, karessieren 〈愛撫する〉, Kompliment 〈おあいそ〉, Mätresse 〈恋人〉, Reputation 〈評判〉, Splendeur 〈気前のよさ〉, Estime 〈評価〉 など。Pöbel 〈下層民〉という語は、すでに中世に「民衆」(vgl. engl. people) の意味で franz. peuple からとり入れられたが、この時代から軽蔑的な意味でのみ用いられた。

この時代にドイツ語に多量に流れ込んだ外来語を数え上げようとするならば、一冊の辞書を編纂することができるであろう。そのうちの多くは一時的な意味しか持たなかった。当時とり入れられた外来語のおおよそ半数が今日まで残っている。特にフランス語の影響を受けた上流社会の生活の分野の語を挙げておこう。

住 居 と 庭 園

Galerie 〈回廊〉, Loge 〈さじき〉, Fassade 〈ファサード〉, Balkon 〈バルコニー〉, Nische 〈壁がん〉, Kuppel 〈小丸屋根〉, Terrasse 〈テラス〉,

Stuck <化粧しっくい>, Korridor <廊下>, Garderobe <衣装室>, Kabinett <小室>, Salon <サロン>, Etage <階>, Alkoven <アルコーフ>, Hotel <館>, Palais <宮殿>, Möbel <家具>, Sofa <ソファ>, Schatulle <金箱>, Büfett <食器棚>, Tasse <カップ>, Karaffe <水差し>, Gardine <窓掛け>, Allee <並木道>, Boskett <植え込み>, Rondell <円形花壇>, Fontäne <噴水>, Bassin <水盤>, Grotte <洞室>, Spalier <格子垣>, Rabatte <花縁> (以上がレノートル様式の庭園の専門用語である)。

服 装 と 美 容

Mode <流行>, Kostüm <服装>, Taille <腰>, Robe <夜会服>, Weste <チョッキ>, Korsett <コルセット>, garnieren <縁縫いする>, Agraffe <留め金具>, Perücke <かつら>, Puder <おしろい>, pudern <化粧粉をつける>, Pomade <ポマード>, frisieren <調髪する>, Frisur <調髪>, Toupet <かもじ>, Parfüm <香水>, Teint <顔色> など。したがって今日まで服装と美容の専門用語は本質的にフランス語である。19世紀に男子服にイギリスの影響が加わった (Vgl. § 29)。

食 事, 食 物, 飲 物

tranchieren <切る>, servieren <給仕をする>, Serviette <食卓布>, Sevrice <一組の食器類>, Kuvert <1人前の食器>, delikat <味よい>, Delikatesse <おいしい物> (この意味では非フランス語), Frikassee <フリカッシー>, Ragout <シチュー>, Kotelette <カツレツ>, Karbonade <肋骨肉の焼肉>, Omelette <オムレツ>, Sauce <ソース> (古くは Salze), marinieren <マリナーデにつける>, Poularde <肥育鶏>, Prünelle <干しハタンキョウ>, Bouillon <ブイヨン>, Gelee <ゼリー>, Kompott <コンポット>, Konfitüre <ジャム>, Marmelade <マーマレード>, Torte <ケーキ>, Biskuit <ビスケット>, kandieren <砂糖づけにする>, Limonade <レモネード> など。料理法 (Kochkunst) ではフランス語の影響

が持続的に及ぼした。上流家庭の台所のメニューは現代に至るまで大部分フランス語が用いられて来た。他の国は少ししか寄与しなかった (イタリアからは例えば *Salami* 〈サラミ〉, *Makkaroni* 〈マカロニ〉, *Cervelatwurst* 〈セルヴェラートソーセージ〉, *Mortadella* 〈貯蔵できるソーセージ〉 など。イギリスからは *Roastbeef* 〈ロースト・ビーフ〉, *Beefsteak* 〈ビーフステーキ〉, *Rumsteak* 〈ランプステーキ〉, *Pudding* 〈プディング〉)。ドイツ語はきわめて簡単な基礎語にとどまった。最近ドイツのメニューはまたさらにドイツ語がふえて来た。

宮廷社会の娯楽と遊興 (*Vergnügungen und Lustbarkeiten*) を表わす表現は、徹頭徹尾フランス語かイタリア語であった:

Pläsir 〈娯楽〉, *amüsieren* 〈楽しませる〉, *Ballet* 〈バレエ〉, *Ball* 〈舞踏会〉, *Menuett* 〈メヌエット〉, *Quadrille* 〈カドリユ〉, *Maske* 〈仮装〉, *maskieren* 〈仮装させる〉, *Maskerade* 〈仮装舞踏会〉, *Redoute* 〈仮装舞踏〉, *Illumination* 〈照明〉, *Karussell* 〈メリーゴーランド〉, *Promenade* 〈散歩道〉, *Kavalkade* 〈騎馬行進〉, *galoppieren* 〈ガロップを踊る〉, *Parforcejagd* 〈追猟〉, *Meute* 〈猟犬の群れ〉, *dressieren* 〈調教する〉, *apportieren* 〈(犬が撃たれた獲物を) 捜して持って来る〉, *Hasard* 〈賭博〉, *basta* 〈けっこうだ (ital. 賭博の表現)〉, *Pikett* 〈ピスケット (2人で遊ぶトランプの一種)〉, *Solo* 〈ソロ (トランプで一人で多数を相手にすること)〉, *Lomber* 〈ロンバー (トランプ遊びの一種)〉, *At-out* 〈切札〉, *Billard* 〈ビリヤード〉, *Scharade* 〈判じ絵〉 など。

フェンシングの技の表現はフランス語 (あるいはラテン語) である: *Florett* 〈フルーレ〉, *Prime* 〈上段からの打込み〉, *Sekunde* 〈下から上へ切りつけること〉, *Terz* 〈第3の働き (相手の右耳から左腰へかけての)〉, *Finte* 〈佯撃〉, *parieren* 〈防ぐ〉, *Duell* 〈決闘〉, *duellieren* 〈決闘する〉, *Sekundant* 〈(決闘の) 立会人〉, *sekundieren* 〈(決闘で) 立会う〉 など、さらに社交的旅行と美術品収集 (*gesellschaftliches Reisen und Kunstsammeln*) の多くの表現もフランス語である。これは、身分ある青年は誰でもヨーロッパの首都を廻って彼らの “*Kavalierstour*,”

〈伊達者の旅行〉をしたからである: *Kuriositäten* 〈珍奇な物〉, *Raritäten* 〈珍品〉, *inkognito* 〈匿名で〉, *Hotel* 〈ホテル〉, *Chaise* 〈半蓋馬車〉, *Equipage* 〈馬車〉, *Route* 〈旅程〉, *Tour* 〈旅行〉, *retour* 〈後方へ〉など, とりわけ, 上流社会のために役立っている芸術や手工業 (*Künste und Handwerke*) の専門用語はフランス語かイタリア語である:

Tapezierer 〈室内装飾工〉, *Gobelin* 〈ゴブラン織〉, *Karton* 〈下絵〉, *Barock* 〈バロック〉, *Rokoko* 〈ロココ〉, *Kolorit* 〈色彩効果〉, *Skizze* 〈見取図〉, *Prospekt* 〈概観図〉, *Profil* 〈側面〉, *Kontur* 〈輪郭線〉, *Porträt* 〈肖像画〉, *Fresko* 〈フレスコ画〉, *tuschen* 〈水彩画を描く〉, *Palette* 〈パレット〉, *Draperie* 〈掛け布〉, *Statue* 〈立像〉, *furnieren* 〈被せ板をかぶせる〉, *lackieren* 〈ラックを塗る〉, *Porzellan* 〈磁器〉, *Fayence* 〈ファエンツァ焼〉, *Email* 〈エナメル〉, *Bronze* 〈青銅〉, *Facette* 〈小面〉, *ziselieren* 〈彫り物をする〉, *gravieren* 〈彫り込む〉, *Plüsch* 〈フランテン〉, *Brokat* 〈錦襪〉, など。

音楽の専門用語もフランス語かイタリア語である。外来語は引き続き演劇 (*Theater*) とオペラ (*Oper*), 馬術 (*Reitkunst*), *Diplomatie* (外交術) の領域で特に強く保持された。

独自の国民性とドイツ文化に対する新しく覚醒した感情と共に語彙のかような外来語の増大を好まぬ者が現われた。ヨハン・ラウレムベルクは低地ドイツ語で書かれた "*Veer Schertz Gedichte*„ (1652) の第3の詩で当世風の表現と称号を嘲弄している。シュレージエン人フリードリッヒ・フォン・ログウは辛辣な短詩の中で国語破壊者を攻撃している。今や言語協会 (*Sprachgesellschaft*) は国語浄化 (*Reinigung der Muttersprache*) のために戦った, そのメンバーのうちハルスデルファ, ツェーゼン, ショッテルについては述べるだけの価値がある。彼らは数々のみごとなドイツ語を作った。ハルスデルファに由来するもの: *Akt* 〈幕 (ドラマの)〉の代わりに *Aufzug*, *observieren* 〈観察する〉の代わりに *beobachten*, *Korrespondenz* 〈文通〉の代わりに *Briefwechsel*, *Teleskop* 〈望遠鏡〉, *Labyrinth* 〈迷路〉の代わりに *Irrgarten*, *Methode* 〈方法〉の代

わりに *Lehrart*, ツェーゼンに由来するもの: *Adresse* 〈宛名〉の代わりに *Anschrift*, *Moment* 〈瞬間〉の代わりに *Augenblick*, *Märtyrer* 〈殉教者〉の代わりに *Blutzeuge*, *Bastion* 〈稜堡〉の代わりに *Bollwerk*, *Bibliothek* 〈図書館〉の代わりに *Bücherei*, *Geometer* 〈測量師〉の代わりに *Feldmesser*, *Horizont* 〈地平線〉の代わりに *Gesichtskreis*, *Fundament* 〈土台〉の代わりに *Grundstein*, *Annalen* 〈年鑑〉の代わりに *Jahrbücher*, *spazieren* 〈散策する〉の代わりに *lustwandeln*, *Nekrolog* 〈死亡記事〉の代わりに *Nachruf*, *Epigramm* 〈風刺詩〉の代わりに *Sinngedicht*, *Gouverneur* 〈総督〉の代わりに *Statthalter*, *Plenipotenz* 〈全権〉の代わりに *Vollmacht* などその他数多く。いくつかのすぐれた文法的かつ辞書的著作を物にした (特に “*Ausführliche Arbeit von der Teutschen Haupt-Sprache*,, 1663) ショッテルは特に言語学専門用語のドイツ語化 (*Verdeutschungen der sprachwissenschaftlichen Fachausdrücke*) に成功した, 例えば *Mundart* 〈方言〉, *Sprachlehre* 〈文法〉, *Wörterbuch* 〈辞書〉, *Wortforschung* 〈語の研究〉, *Geschlechtswort* 〈冠詞〉, *Hauptwort* 〈名詞〉, *Zahlwort* 〈数詞〉, *Zeitwort* 〈動詞〉, *Strichpunkt* 〈セミコロン〉 (*Semikolon* の代わり), さらに *Sauce* 〈ソース〉の代わりに *Tunke*, *Komödie* 〈喜劇〉と *Tragödie* 〈悲劇〉の代わりに *Lustspiel* と *Trauerspiel*, *Säkulum* 〈一世紀〉の代わりに *Jahrhundert* など。哲学者ライプニッツも “*Unvorgreiflichen Gedanken*,, (1697) の中でドイツ語の浄化を力説している。ドイツ語はクリスチャン・トーマシウスとかクリスチャン・ヴォルフのような人々の影響の下で学問の言葉としてのラテン語に徐々に入れかわっていった。哲学のドイツ語の専門語 (*Fachsprache der Philosophie*) は本質において, *Aufmerksamkeit* 〈注意〉, *Bedeutung* 〈意味〉, *Bewußtsein* 〈意識〉, *Verständnis* 〈理解〉などのような表現に今日的な意味を与えたヴォルフにさかのぼる。

§ 24. バロック時代の詩人語

この時代の文学は上流社会の言語ほど強く外来語がまじっていない。文学の大部分（特にマルチン・オーピッツ派）を占めていた抒情詩では美的な理由から外来語の過度の使用は避けられた。その上、いく人かの詩人（オーピッツ、ロガウ、グリュピウスなど）は言語協会の国語浄化運動に加わった。ツェーゼン（Philipp von Zesen 1619-1689）は彼の小説の中で大胆な新語を使って、書名でもある「主要語・英雄語の輝き」（Glanz der Haupt-und Heldensprache）を証明した。これに反して多くの詩人、特にいわゆる第二シュレーゲン派の詩人たちはいわゆる誇張表現（Schwulst）というけばけばしく飾りたてられた語を使って不自然な言葉使いをしている。例えば Mond 〈月〉の代わりに der Sonne Kammermagd 〈太陽の下女〉, Ochse 〈雄牛〉の代わりに der Kühe lieber Mann 〈雌牛の愛する夫〉, Brust 〈乳房〉の代わりに das Zeughaus süßer Lust 〈甘い快楽の創造場所〉, Purpur 〈緋〉の代わりに Schneckenblut 〈カタツムリの血〉, Perle 〈真珠〉の代わりに Muschelkind 〈貝の子供〉など。奇抜な形容詞が好まれた, 例えば gläserne Gewässer 〈透明な海〉, gesalzene Zähren 〈塩からい涙〉, schwarze Sterne 〈黒い星〉など。強い香料を表わす名前が好んで使われた, 例えば Ambra 〈アンブラ〉, Bisam 〈ジャコウ〉, Aloe 〈ろかい〉, Zibet 〈じゃこう〉, Myrrhe 〈モツヤク〉, Balsam 〈香油〉など。さらに次のような語が好まれた, Alabaster 〈雪花石膏〉, Kristall 〈水晶〉, Marmor 〈大理石〉, Koralle 〈さんご虫〉, Granat 〈ざくろ石〉, Rubin 〈ルビー〉, Purpur 〈緋〉, Nektar 〈ネクトル〉, Honig 〈蜂蜜〉, Koloquinte 〈コロシント〉, Safran 〈サフラン〉, Manna 〈マナ（イスラエル人が神から受けた食物）〉, Jasmin 〈ジャスミン〉, Palme 〈ヤシ〉, Löwe 〈ライオン〉, Rose 〈バラ〉, Dorn 〈とげ〉。これらは数多くの大胆な比喻やへ理屈めいた直喩に利用された。宗教的概念の範囲内の語は世俗的な意味に転化された。göttlich 〈神の→すばらしい〉, Opfer 〈(神への) 捧げ物→犠牲〉, (auf)

opfern <犠牲に供する→身をささげる> のように。地位の高い者の呼びかけの際、こういう肩書をむやみに求めたがりそしておせじを喜んだ時代には、höchstgeneigt <きわめて恵み深い>, hochberühmt <名高い>, hochwert <価値の高い> などの形容詞が好まれた。詩人は気前よく "unserer Phöbus <われわれのポイボス>, 演説者は unserer Cicero <われわれのキケロ> と呼ばれたが、一方書き手の方は meine Wenigkeit <不肖> という形式で謙遜な態度を取った。奇抜な造語と合成語が敢えて作られた: Nektarlippen <甘露のごとき唇> Lilienbrüste <百合のごとき乳房>, Zinnobermund <唇砂のごとき口>, Gunstmagnet <人気者>, Augenstrahl <かわいい子>, Wollustgluten <歓喜のほむら>, jammerreich <悲しみに満ちた>, goldgekämmtes Haar <金髪>, loderndhell <燃え立つように明るい>, schimmerndlicht <ちらちらと明るい>, hochmächtigtiggrößer <大きい>, schneegebirgt <雪におおわれた山の> など。これらの創造語の理屈っぽい特質によって -ung, -nis, -heit, -keit で終る抽象名詞が好まれた: Danksagung <謝辞>, Verfinsterung <暗黒化>, Voraugenstellung <明瞭にすること>, Herzunahung <近づくこと>, Bildnis <模像>, Verwundernis <驚き>, Gleichnis <肖像, 比喻>, Dienstbarkeit <隷属>, Zärtlichkeit <こまやかな愛情> など。こういう詩人語の新語の多くは今日廃語となってしまったとはいえ (例えば Allengefallenheit <すべてに好かれること>, Lasterfleckmal <罪の痕跡> などのような奇妙な語), 根本的な目的は達せられた, 即ちドイツ語の語は続いて花咲く古典文学と学問の高い功績のための力を得た。16世紀の民衆的な言語からバロック時代のロマン語のルネッサンス文学の影響の下で, それから敬虔主義の精神の言語の影響の下で, クロップストックの情緒的な詩のための言葉の奇跡が, レッシングの水晶のように透明な散文が, ゲーテの抒情詩の魔力が, シラーのドラマチックな力強い表現が生まれた。

古典時代の言語

§ 25. 18世紀の古典文学の言語

18世紀の文学の開花のための精神的に豊かな土地を耕やした啓蒙主義 (Aufklärung) の時代は世界観 (Weltanschauung) と美術論 (Kunstlehre) の概念を表わす洗練された表現法を発達させた。フランスの文献がドイツの啓蒙主義の文献にしばしば影響を及ぼしたと同じように、フランス語は独立していると判断される模範として残った。ギリシア・ラテンからの借用語は自由な語選択のゆとりを表わしている。すぐれたドイツ語の専門語の多くは広い標語的な注目を得た。それに属するのには次のようなものがある: Aufklärung <啓蒙主義>, aufgeklärt <啓発された>, vernünftig <理性的な>, voraussetzen <仮定する>, wahrscheinlich <ありそうな>, Weltbürger <世界市民>, Weltgeist <世界精神>, Freidenker <自由思想家>, Freigeist <自由思想家>, Denkfreiheit <思想の自由>, Menschenliebe <人間愛>, empfinden <感じる>, Empfindung <感情>, Geschmack <好み> (芸術品に関する比喩的な意味ではヴィンケルマン以後), Schöngeist <文学愛好家> など。この時代の西洋文化の共通性を証明している重要な外来語は例えば次のようなものである: Toleranz <寛容>, Humanität <人間性>, Esprit <エスプリ>, Grazie <優雅>, Ideal <理想>, idealisieren <理想化する>, Publikum <公衆>, Stil <様式>, Stilist <名文家> など。文芸学は多面的な外国語を形成した (例えば Ballade <バラッド>, Epos <叙事詩>, Elegie <哀歌>, Idylle <田園詩>, Hymne <頌歌>, Lyrik <抒情詩> など)。芸術史は Gemme <陰刻入り宝石>, Genre <ジャンル>, Antike <古典古代>, Dilettant <好事家> などのような外来語をもたらした。演劇はまとまった職業語を発達させた (Akteur <俳優>, Regie <演出>, Regisseur <監督>, soufflieren <プロンプトする>, Kulisse <書き割り>, Statist <端役> まで)。

文学においては、18世紀の中頃ドイツの芸術界を支配したゴットシェッ

ト (Johann Christoph Gottsched 1700-66) は前世紀の誇張表現と外来語の洪水に反対し ("Grundlegung einer deutschen Sprachkunst,, 1752), その代わりに Bombast <大字壮語> という標語を作り出した。彼は言語の理想として明瞭さと明晰さをもち出すことにより, 古典作家に言語を提供する手助けをした。彼の好んだ語に次のようなものがある: Anmut <優雅>, anmutig <優雅な>, Art <性質>, artig <おとなしい>。さらに彼はたくさんの新語を作り, (ただしいていはいはよく知られた語の合成語である, 例えば letzte Hand <最後の仕上げ>, Lehrerstand <教師の職> など), 若干のかなり古い表現を復活させた。スイスの詩人 (Schweizer Dichter), 特にハラー (Albrecht von Haller 1708-77) によって, いくつかの元々スイス方言の語が文学語となった, 例えば Abbild <模写>, Abhang <傾斜>, Schutz-und Trutzbündnis <攻守同盟>, stauen <もの思いにふける>, Unbill <不正> など。さらにそのほかのスイス方言の語をヴィーラント (Christoph Martin Wieland 1733-1813) (例えば abschätzig <軽蔑的な>, Augenschein <外観>, entsprechen <相応する>, Heimweh <郷愁> など) ととりわけシラー (Friedrich von Schiller 1759-1805) は「テル」(例えば, Ammonshorn <アンモン貝>, anstellig <有能な>, Fluh <絶壁>, Föhn <狡猾なやつ>, Lawine <なだれ>, tagen <夜が明ける>, Wildheuer <山の尾根で草を刈る人> など) においてドイツ語の一般語にもたらしした。

クロップシュトック (Friedrich Gottlieb Klopstock 1724-1803) が語彙に及ぼした影響は特に強かった。すでにヘルダー (Johann Gottfried von Herder 1744-1803) はクロップシュトックの創造力 (Schöpfermacht) を強調した。クロップシュトックは彼の時代の言語を自分にとっては狭すぎるように感じなければならなかった (die Sprache seiner Zeit notwendig für sich zu eng finden mußte), そして彼と共に, 言語においても新しい時代が始まる (auch in der Sprache eine neue Zeit anfängt)。クロップシュトックの語彙は驚くべき豊かで, 驚くべき造語力に満ちている。クロップシュトックは注意深くきわめて高尚なかつきわめて

力強い語を選んだ、彼がスイスのブライティンガー (Johann Jakob Breiting 1701-76) と一緒に呼んでいるようにいわゆる強い (starke) 語である。彼は語にそれらの意味にある力のすべてを与えようとした。そのため彼は、彼の時代の語の使い方の中にぴったりした表現がない場合には古い時代 (彼が知っている古ドイツ文学にさかのぼって) の語彙から創造した。同じ理由から彼は外来語と戦ったが、しかし方言的表現が文学から追い払われることを望んだ。彼は大胆な新語にたいしてひるまなかった。彼が青春時代に好んだ語は ätherisch <かぐわしい>, そのほか strömen <みなぎり流れる> である。この語を50年代の初めから可能なかぎりの合成語 (be-, durch-, ent-, ver-など) で使用した。さらに彼は brünstig <熱烈な>, zärtlich <愛のこもった>, donnern <とどろく>, eisern <鉄の> (戦争に関するあらゆることを表わす形容詞), seraphisch <熾天使の>, jauchzen <歓呼する>, jubilieren <歓呼する>, Myriade <1万>, Deutschheit <ドイツ魂>, wandeln <さまよう>, schauen <見る>, Heil! <万歳> などの語を好んだ。感情と感覚の表現法はクロップシュトックによって本質的に豊かになった, 例えば empfindungsvoll <感情豊かな>, entzückungsvoll <うっとりして>, seelenvoll <深い情に満ちた>, Wehmut <悲哀>, wehmütig <哀れな>, weinen <泣く> (たくさんの合成と共に)。クロップシュトックは、言葉に力を与えるために、複合動詞の代わりに単独動詞を好んで選んだ: schrecken <びっくりさせる>, decken <おおう> (bedecken の代わり), schatten <かわく>, fertigen <造る> など。彼は独特の動詞の構成をなした, つまり äugeln <目と目をかわす>, kleineln <コセコセしている>, kunstwörteln <人工的に作った語を使う>, die zusammengebirgten Gestade <もり上がっている高い岸> のように。彼は -e で終る短い女性名詞を -heit で終る女性名詞よりも好んだ: Bläue <青いこと>, Frische <新鮮>, Frühe <早朝>, Irre <迷い>, Süße <甘美>, Schöne <美>, Weiße <白いこと>, Röte <赤いこと> など。しかし -ung で終る語はかなりしばしば現われる (Ähnlichkeit <類似>, Einung <合一> など)。行為的表現のために非常に好

んだ -er 男性名詞を彼は数多く作った, 例えば Allvollender <創造者>, Donnerer <怒りっぽい人>, Krittler <あら捜しする人>, Zukunftswisser <先を見通す人> など。特に分詞との奇抜な合成語を用いた, 例えば, flammenverkündend <炎を知らせて>, schnellherschmetternd <いきおいで早く飛んで来て>, blütenumduftet <花の香りで包まれて>, bangzerrungen <心配でひきさかれて>, wahnsinnstrunken <妄想にかかっているように>, weisheitverlassen <つまらない> など。-gesang, -lied, Todes- との合成語は特に多い。3 語からなる合成語も彼はあえて作っている: Bardenliedertanz <英雄叙事詩にあうような踊り>, Sphärensangeston <この世でないような音>。

新しい詩人語, 加えて学問的, 批評的散文の創造者の中にレッシング (Gotthold Ephraim Lessing 1729-81) も挙げられうる。彼はしばしば批判的に言語の持つ手段に携わり, 過去から呼び戻されるにふさわしい優れた古い語を引合いに出し, ロガウの文学のために——その中から Besonnenheit <思慮のあること>, herzlich <心からの>, Unzahl <無数>, Wegelagerer <追いはぎ> などの語を彼は推めている——短かい辞書を編纂した。レッシングは彼の時代の新しい語として次のような語を感じ, 使用している: aufklären <啓蒙する>, Aufklärung <啓蒙>, bemitleiden <同情する>, Bildung <教養>, empfindsam <感傷的な>, gemeinsam <共通の>, Kultur <文化>, Liebchen <愛らしい人>, Maßregel <方策>, rührend <感動的な>, staunen <びっくりする>, Tatsache <事実>, weinerlich <泣きやすい>, zerstreut <散乱した> など。最初は外来語に愛着を持っていたヴィーラントは後に意識的な外来語のドイツ語化を重んじた。その際彼はしばしば多少狭量であるが, しかし首尾一貫性によって結局は成功した国語浄化者 J. H. カンペ (Joachim Heinrich Campe 1746-1818) の著作と辞書に従った。dechiffrieren の代わりに entziffern <解読する>, Freistaat <共和国>, Staatsbürger <国民>, Trugschluß <誤った結論>, Weltall <宇宙> などのようなドイツ語化の勝利を我々はヴィーラントに負っている。最初は多いに嘲笑されたカンペ

のドイツ語化は何百という数になる。特に成功したものとして次の語を挙げよう: Zerrbild (Karikatur) 〈戯画〉, Beweggrund (Motiv) 〈動機〉, Zartgefühl (Delikatesse) 〈やさしさ〉, gegenständlich (objektiv) 〈客観的な〉, Bannware (Konterbande) 〈禁制品〉, Eilbote (Kurier) 〈急使〉, Stelldichein (Rendezvous) 〈あいびき〉, Sternwarte 〈天文台〉, Fallbeil 〈断頭台〉, Festland 〈大陸〉, Dienstalter 〈在職年限〉 など。Volksseele 〈人心〉, das Selbst 〈自己〉, Humanität 〈人間性〉, Heldenstolz 〈英雄の誇〉, traumhaft 〈夢のような〉, Verhimmelung 〈賛美〉, Richtlinie 〈方針〉, abschatten 〈輪郭を描く〉, Anschaulichmachung 〈明白にすること〉, Befremdnis 〈驚き〉 などの表現はヘルダーにさかのぼる。彼は夥しい新しい合成語を作った(特に All-, un-, Wort-と共に)。アナクレオン派の詩人たち (Anakreontiker) は Elysium 〈歓楽境〉, Grazien 〈美と優雅の女神グラティア〉, Charitinnen 〈優美の女神カリス〉, munter 〈生き生きとした〉, Wollust 〈歓喜〉, zärtlich 〈愛のこもった〉, Zephir 〈穏やかな風〉, Weihrauch 〈香〉, süß 〈甘い〉, gaukeln 〈あちこち飛び回る〉, wiegen 〈揺する〉, Triebe 〈衝動〉 などの表現に酔いしれた。70年代のシュトルム・ウント・ドラング運動の文学者たち (Stürmer und Dränger) は Genie 〈天才〉, Originalgenie 〈独創的天才〉, Kraftgenie 〈大天才〉, genial 〈天才的な〉, original 〈独創の〉, originell 〈独特の〉, dämonisch 〈超自然的な〉, schöpferisch 〈創造力のある〉, hochsinnig 〈気高い〉, Vollkraft 〈あふれる生气〉 のような力強い語を使いだした。

ゲーテはドイツ語の語彙にきわめて強く影響を与えた。彼は初期の詩の中でアナクレオン派が好んだ語を重んじている。例えば munter 〈生き生きした〉, Lust 〈喜び〉, Trieb 〈衝動〉, zärtlich 〈愛情こまやかな〉, seufzen 〈ため息をつく〉, küssen 〈口付けをする〉, Tal 〈谷〉, Hain 〈林苑〉, Bach 〈小川〉, Busen 〈乳房〉, Zephir 〈軟風〉, Weihrauch 〈香〉, gaukeln 〈チラチラする〉, rosenfarben 〈ばら色の〉 など。そのつぎに彼はシュトルム・ウント・ドラングの語彙を重んじ、豊かにした。

若きゲーテが好んだ語は dumpf <はっきりしない> (そして Dumpfheit <はっきりしないこと>, 反対は Klarheit <澄明>), Dust <塵> である。さらにゲーテが好んだ表現は次のようなものである: Behagen <快適>, behaglich <快適な>, bedeuteud <重要な>, heiter <明るい>, rein <純粋な> と reinlich <清潔な>, stetig <絶えない> と Stetigkeit <不変>, Gegenwart <現存>, Freiheit <自由>, die Menge <群集>, der Kreis <円>, das Stille <静寂>, verrucht <極悪な>, Zustand <状態>, Wesen <存在>, beschränken <制限する>, bedingen <制約する>, begrenzen <制限する>, streben <努力する>, steigen <登る>, Vollendung <完成>, Typus <型>, vorzüglich <りっぱな>, außerordentlich <特別の>, würdig <品位のある>, tüchtig <有能な>, trefflich <すぐれた>, absurd <ばかげた>, problematisch <問題の>, widerwärtig <しゃくな>, Forderung <要求>, leidenschaftlich <情熱的な> など。古典時代のドイツ語の詩人語の内面化は最高度に達した。ゲーテが使用したために定着した語のうちから挙げてみよう: Aar <鷲> (かなり古い語の復活), ähneln <似ている>, ahnen <予感する>, banal <平凡な>, Belletrist <文学者>, Christbaum <クリスマスツリー> (「ヴェルテル」で), Christkindchen <みどりごキリスト>, Degen <勇士>, Frack <燕尾服>, Katzenjammer <ふつか酔い>, Rätsel <謎>, Wahlverwandschaft <親和力>, Weltkind <現世主義者>, Weltliteratur <世界文学> (1827) など。gältlich <かなり大きい> と kanzen <しゃがむ> のようなチューリングン方言も折にふれて取り入れた。

シラーは彼の時代以前にはほとんど用いられていなかった語のうちで次のような語を使用した: Aar <鷲>, Blaustrumpf <文学かぶれの女> (engl. blueslocking, franz. bas bleu の翻訳), entgöttern <神々を奪う>, Gaukelbild <幻影> (Phantom の代わり), Gedankenfreiheit <思想の自由>, verhängnisvoll <宿命的な> など及び「テル」に現われる先に挙げたスイス方言。フォスによるホメロス翻訳の影響は, löwenherzige Jungfrau <豪胆な乙女>, tränenvoller Krieg <悲慘な戦争> (ゲーテに

も次のようなものが見られる: männertötende Schlacht <男たちを殺す戦い>, erdgeborene Menschen <大地から生まれた人間>) のような合成された形容詞が好まれたことから明らかである。

もちろんしばしば奇妙な方法ではあるが新造語を数多く生んだジャン・パウルは Doppelgänger <分身>, Ehehälfte <ベターハーフ>, Fleugeljahre <生意気盛りの年頃>, Krähwinkel <こせこせした田舎町>, neureich <成金の> 及び Weltschmerz <世界苦> という表現でドイツ語を豊かにした。耳ざわりでかつ必ずしも必要ではない新造語 Jetztzeit <現代> (Gegenwart の代わり) も彼にさかのぼる。

古典時代に、良い使い方 (guter Gebrauch) を規定し、はびこっている弊害を批判的に論じようとする包括的な辞書 (Wörterbücher) の中にドイツ語の語彙が集められた。アーデルングの大辞典 (1784年以降, リプリント版1969年) は5巻の中に上流階級 (上部ザクセンの) の語法を挙げまたこの辞書が数々の作家によって規準として使用されたが故に、語彙の発展に決定的に逆に影響を与えた。アーデルングは、有罪の宣告を下したにもかかわらず残っていた時代遅れの (veraltet) あるいは田舎風の (provinziell) 多くの語とももちろん戦った。彼は今日なお全く一般的に用いられている次のような語を時代遅れとして特色づけた, abhold <きらいな>, Absage <取消し>, Fehde <反目>, Gau <地方>, Hader <不和>, Schlacht <戦い> など。次のような語をお国なまり (Provinzialismen) としてのろった, Ärger <立腹>, beschwichtigen <なだめる>, blank <輝く>, Bucht <湾>, dicht <密な>, düster <薄暗い>, flau <弱い>, flink <すばやい>, hastig <大急ぎの>, verblüffen <びっくりさせる> (すべて低地ドイツ語といわれている), abhanden <手もとにない>, behelligen <煩わす>, behende <すばやい>, deuten <示す>, dumpf <うっとりしい>, gemeinsam <共同の>, kosen <かわいがる>, lügen <見る>, unbefangen <とらわれない>, Unbild <異形のもの>, weitschichtig <広大な> (すべては上部ドイツ語として特色づけられる)。しばしばまさしく独断的な J. H. カンペの批判 (Wörterbuch der deutschen

Sprache 1807-1811) よりもアーデルングの批判のほうが一般的に正しいと確証された。しかしカンペが提案した夥しいドイツ語化は、彼の敵が期待した以上に成功した (vgl. 上記及び § 6)。

§ 26. フランス革命と政治専門語の発達

フランス革命 (Französische Revolution) がドイツで果たした特に注目すべき点は、言語的に見て、革命運動の標語がフランス語の外来語としてあるいは翻訳語としてドイツでも急速に人口に膾炙したということであった。Menschenrechte <人権> という表現はすでに1776年に北アメリカから入って来た。Freiheit <自由> と Gleichheit <平等>, Brüderlichkeit <友愛>, Vernunft <理性>, Philanthropie <博愛>, Aristokrat <貴族主義者>, Menschenliebe <人間愛> などは1789年にドイツへもたらされた。フランス革命時の政治的標語にさらに次のようなものがある: Revolution <革命>, revolutionär <革命の>, liberal <自由な>, Reaktion <反動>, Royalist <王権主義者>, Monarchist <君主政体主義者>, Propaganda <宣伝>, Terrorismus <テロ>, Marseillaise <マルセイエーズ>, öffentliche Meinungen <世論>, Fortschritt <進歩>, fraternisieren <親しげに交わる>, Guillotine <ギロチン>, Initiative <首唱> (まず政治的な意味で), Agitator <扇動者>, Anarchist <アナキスト>, Sanskulotte <サンキュロット党>, Jakobiner <ジャコバン党员>, Bürokratie <官僚政治>, Defizit <赤字>, Insurgent <反逆者>, Kokarde <記章>, Komitee <委員会>, Demokrat <民主主義者>, Emigrant <亡命者>, Klub <政治クラブ>, Konstitution <憲法>, Organisation <体制>, Koalition <連合> など。

特にフランスの政治的影響の下で、政治 (Politik) と議会制度 (Parlamentarismus) の事象を表わすドイツ語の専門用語が成立した。イギリスはすでに17世紀にしっかり整った政治及び議会の表現法を使用し、フランスは啓蒙主義時代に (しばしばイギリスの模範にならって) 自国の表現法を発達させたが、ドイツ語の議会語は19世紀の初めになってやっと普及

した。それ以前には Redner 〈演説者〉, tagen 〈会議を開く〉, Tagung 〈会議〉 (元々スイス方言), Session 〈会期〉, Opposition 〈野党〉, Präsident 〈大統領〉, votieren 〈投票する〉 などのごくわずかな一般的な表現しか知られていなかった。啓蒙主義の時代はともかくイギリスの議会制度、及び英語の専門表現の知識をもたらした: Bill 〈議案〉 (ほぼ1700年以来), Adresse 〈請願書〉, Debatte 〈討議〉, Kommission 〈委員会〉, Parlament 〈議会〉 など。その際しばしばドイツ語への逐語的な翻訳がなされた: Sprecher 〈議長〉 (speaker), eine Gesetzesvorlage lesen 〈法案を発表する〉 (to read a bill), Lesung 〈読会〉, ein Gesetz einbringen 〈法案を提出する〉 (to introduce a bill), zur Ordnung rufen 〈(議長が議員に) 言動を慎むように命じる〉 (to call to order), zur Sache! 〈問題に返れ〉 (the question!), Parlamentsmitglied 〈国会议員〉 (member of Parliament) など。19世紀の初めにはこれらの表現の数と用法が増した。さらに次のような表現が加わった: Hört! hört! 〈謹聴, 謹聴〉 (hear, hear!), Thronrede 〈開院式の勅語〉 (speech from the throne), Jungfernrede 〈処女演説〉 (maiden-speech) など。19世紀の中頃になって初めて, Herrenhaus 〈貴族院〉 (House of Lords), Tisch des Hauses 〈委員会〉, Meeting 〈集会〉 などの表現が登場した。これらはすべて英語になっている。

フランス革命議会制度は次のような議会語をドイツ語にもたらした: Abgeordneter 〈議員〉, einstimmig 〈一致した〉, Wahlmann 〈選挙人〉, Stimmenmehrheit 〈過半数の得票〉, Nationalversammlung 〈国民議会〉, Tagesordnung 〈議会日程〉 (ordre de jour), Fraktion 〈議員団〉, Linke 〈左派〉 — Rechte 〈右派〉, abstimmen 〈投票する〉, Geschäftsordnung 〈議事日程〉, Kandidat 〈候補者〉, Majorität 〈多数〉 — Minorität 〈少数〉, legislativ 〈立法の〉, Veto 〈拒否〉 など。

これらの政治・議会語彙がドイツ憲法の発動と共に実際にためされて以来、すぐに拡張した。特に1848年の革命によって数々の新しい語彙が加わった (vgl. § 30)。

19世紀と現代

§ 27. ロマン主義の語彙

ロマン主義者の語彙 (Wortschatz der Romantiker) はドイツ古代の文学と芸術に対するロマンチックな愛着に相応して、夥しい中世の語の復興 (Wiederbelebung zahlreicher mittlelaterlicher Wörter) によって特色づけられている。この言語上の出来事はロマン主義が最初で唯一ではなかった。すでにそれ以前の詩人や作家はかなり古い詩人の中に出て来る語を的確であると指摘した。例えばライプニッツ (vgl. § 23) は "die Wiederbringung alter verlegter Worte, so von besonderer Güte,, (特によい語であれば古い忘れられた語の再興) を勧め、レッシングはログハウの語彙を勧め吟味し (§ 25), ゲーテとシラーはルター聖書の語彙からかなりの刺激を得た。18世紀の中頃から、スイス人ポートマーとブライティンガーによってもたらされた中高ドイツ語文学の盛期の文学に関する知識がうなぎのぼりに活躍した。ミンネゼンガーの言語はゲッチンゲン森林同盟の文学, 特にビュルガー, フォス, ヘルティなどに影響を与えた。Minne <愛>, Minnelied <恋歌>, Minnesang <ミンネの歌> などの語が新しく復活した (1500年頃 Minne は下品な語としてみなされ, それから完全に忘れられた)。Fehde <私闘>, Gau <部族定留地>, Hain <森>, Halle <広間>, Hort <宝>, Kämpfe <戦士>, lobesam <功績のある>, さらに hehr <気高い>, minnewund <愛に傷ついた>, preislich <賞賛すべき>, vielgetreu <すこぶる忠実な>, wonniglich <喜ばしい>, die Selde <家>, die Schöne <美> などのように古ドイツ語の表現は森林同盟詩人の確かにしばしばわざとらしく響く文体の中で再びとり上げられた。他の詩人は, allzumal <同時に>, einträchtlich <一致して>, eitel <空の>, gen <に向かって>, Herzeleid <心痛>, sintemal <~なるがゆえに> のような古風な語形式を復活させた。クロップシュトックはタキトゥスによって記されている非ゲルマン語の Bardiet <関の声> を

“Bardengesang,, (古代ゲルマンの吟唱詩歌風の宗教的愛国歌謡) の意味で使用した。

こういうかなり古い言語財の再興はロマン主義文学において、ウーラント、リュケルト、グリム兄弟などの若きロマン主義者たちにおいて初めて一般的な表現手段となった。ウーラントは中世の気分を呼び起すために、Gauch <おろか者>, Ger <投げ槍>, stäte <絶え間のない>, Brünne <よろい>, Turnei <馬上の槍試合>, Ferge <渡し守>, Buhle <恋人>, das Gemahl <奥方>, das Waffen <武器>, Wat <衣服>, gesippt <血族関係のある>, lustsam <喜ばしい>, zutal <下へ>, allstund <いつも>, fromm <有能な>, Elend <異郷>, wundermild <優にやさしい>, Tartsche <小形の円楯>, Marschalk <馬丁> などの語を用いた。リュケルトは Gaden <部屋>, Wind=Windhund <軽率な人>, Kunft <到着>, Durft <必要>, sehren <傷つける>, Fahr <危険>, Ruch <香り>, Schmack <味覚> などを使用した。これらの語の一部のみが言語の慣用に固定して同化させられた。体操の父ヤーンは古いドイツ語の語を復活させた。その際それらに体操語 (Turnsprache) の上で新しい意味を与えた。例えば turnen <体操する>, Barren <平行棒>, Kürturnen <自由体操>, Riege <組 (体操の)>, Wippe <上体前倒> など。他の語を彼の故郷の低ドイツ語からもたらした, Reck <鉄棒> のように, これは低ドイツでは家畜囲いの横けたである。この分野におけるロマン主義者の後の後継者はリヒャルト・ヴァーグナーである。彼は Minne <愛>, Brünne <よろい>, Sippe <種族>, Fahr und Sehr <危険と痛み>, Glast <輝き>, freislich <恐ろしい>, sehrende Not <痛む苦しみ> のような語や言い回しを使って彼の文学に古代ドイツの色合いをつけた。もちろんその際誇張や不明瞭なところがなしですまされなかった。

今日の言葉使いと18世紀の辞書の記載事項を比較してみると, ロマン主義者及び彼らの言語上の先駆者の革新的な語選択によって新しい生命を得た語にぶつかる。辞書 (特にアーデルング) は今日完全に生きている語を時代遅れとして片付けている, 例えば Aar <鷺>, Absage <取り消し> ,

Ahn <先祖>, Aue <美しい牧場>, befehlen <戦う>, Elfe <妖精>, eitel <純粹の>, Fee <運命の女神>, Fehde <反目>, Feme <(ドイツ中世の) 秘密裁判>, frommen <或人に役だつ>, fürlieb <がまんする>, Gau <部族定留地>, Ger <投げやり>, Hain <林苑>, Halle <広間>, hehr <気高い>, Heim <わが家>, Hort <財宝>, Imbiß <軽い食事>, Knappe <小姓>, kosen <かわいがる>, künden <知らせる>, lügen <のぞく>, munden <おいしい>, raunen <ささやく>, rügen <とがめる>, samt <〜もろとも>, Satzung <規約>, Seher <見る人>, Sippe <部族>, Söller <バルコニー>, sühnen <償う>, Tafelrunde <円卓>, tagen <夜が明ける>, Ungetüm <怪物>, wallen <沸き立つ>, Wehrmann <兵士>, Weidwerk <狩猟>, weidlich <元気な>, Windsbraut <旋風>, Wonne <歓喜>, wundersam <驚くべき>, zag <臆した>, zeihen <とがめる> など。

ロマン主義の語の使い方のさらに他の特色は不可思議的・神秘的表現の愛好 (Vorliebe für geheimnisvoll-mystische Ausdrücke) である。そのため, Geheimnis <秘密>, Rätsel <なぞ>, Seltsamkeit <奇妙>, Wunder <不思議>, Zauber <魔法>, Schicksal <運命>, Verhängnis <宿命>, fatal <運命的な>, Vorsehung <先見>, seltsam <独特の>, sonderbar <異常な>, unbeschreiblich <言葉では表現出来ない>, verzaubert <魔法にかけられた>, wunderbar <驚くべき>, wundervoll <驚くべき>, geheimnisvoll <神秘的な>, geisterhaft <幽霊のような>, feenhaft <妖精のような>, gespensterhaft <幽霊の>, sonderlich <異常な>, Waldeinsamkeit <森の静寂>, Waldesdunkel <森の暗がり>, Waldesnacht <森の暗闇>, Waldesgrün <森の緑> などの語がたいそう好まれた。Wunder—を伴ったたくさんの新しい合成語が作られた (ティークとノヴァーリスだけで約60)。また—lich で終る形容詞も好まれた (bedächtiglich <思慮深い>, herzinniglich <心からの>)。ロマン主義者の合い言葉 (ノヴァーリス1802), blaue Blume <青い花>, Universum <宇宙>, objektiv <客観的な> と subjektiv <主観的な>, echtdeutsch

〈純粹にドイツ的な〉, *reindeutsch* 〈純粹にドイツ的な〉などの表現は標語としての役割をはたした。*Romantik* 〈ロマン主義〉と *romantisch* 〈ロマン主義の〉自体特別の意味を得た(語源的には *Roman* 〈長篇小説〉に由来する。元来は「ロマン語による文学」の意味)。

解放戦争 (*Befreiungskriege*) の時代は、古ドイツ語の表現に対するうなぎのぼりの愛好 (ヤーン) と並んで、*Gamaschendienst* 〈(軍隊で) 服装・教練に非常に厳格なこと〉 (1807), *Landwehr* 〈国防〉, *Landsturm* 〈国家総動員〉 (復活したかなり古い表現), *Wehrmann* 〈兵士〉, *Wehrpflicht* 〈兵役義務〉, *Alldeutschland* 〈全ドイツ国〉 (アルント), *teutonisch* 〈ドイツ人の〉 (ヤーン), *Volkstum* 〈民族性〉 (ヤーン 1809), *Völkerschlacht* 〈ライプチヒの戦い〉, *Kleinstaaterei* 〈小国分立主義〉 (ヤーン 1814), *Legitimität* 〈正当性〉, (1814), *Guerillakrieg* 〈ゲリラ戦〉 (スペイン義勇団 *guerillas*, 1807-1814 の戦闘にちなんで), などをもたらした。

absolut 〈絶対的な〉, *Idee* 〈理念〉, *Weltseele* 〈世界靈魂〉などの表現はヘーゲル哲学 (*Hegelsche Philosophie*) に由来する。

§ 28. 新発明と科学

19世紀はそれにもかかわらず決してロマン的な時代にはならず、まさしく実用的、技術的、物質的な時代となった。自然科学と技術 (*Naturwissenschaft und Technik*) での19世紀の成果は幾多の新造語の中に現われている。そのいくつかは18世紀にさかのぼる。すでに18世紀に次のような語が見られる: *Elektrizität* 〈電気〉, *elektrisch* 〈電気の〉, *elektrisieren* 〈電流を通ずる〉 (すべて18世紀の初め), *Chemie* 〈化学〉 (1775年頃, 古くは *chymie*), *Gas* 〈ガス〉 (1784年頃, しかし学術専門語として *griech. chaos* 〈混沌〉にちなんですでに17世紀の初めにブリュッセルの化学者ヘルモントによって作られた)。1800年頃には次のような語が現われた: *Galvanismus* 〈ガルヴァーニ電気〉, *galvanisch* 〈ガルヴァーニ電気の〉 (1796年イタリアで物理学者ヴォルタによってルイジ・ガルヴァ

ーニに敬意を表して作られた), Telegraph <電信>, explodieren <爆発する> など。最初 Feuermaschine と呼ばれていた Dampfmaschine <蒸気機関> はこの頃登場した。1830年頃フランスから industriell <産業の> という表現 (これに加えて Industrialismus <産業主義> も。この二つは1817年サン・シモンによって作られた) が入りこんだ。鉄道に関する語彙はほぼ1830年に現われた: Eisenbahn <鉄道> (1825), Lokomotive <機関車> (1838)。その際, 発明された場所ということで英語からの借用語が用いられた: Puffer <緩衝器> (engl. buffer), Tender <炭水車>, Tunnel <トンネル>, Lori <無蓋貨車>, Waggon <車両> など。航空に関する表現はすでに18世紀の終りに (Montgolfiere <モンゴルフィエー氏軽気球>) 使われるようになった。Aeronaut <飛行士> (1784), Luftballon <軽気球> など。19世紀の初めには特に化学が豊かな語彙を発達させた: Kohlensäure <炭酸>, Kohlenstoff <炭素> (1800年頃), Leuchtgas <燈用ガス> など。じきに化学は古代語の語幹 (Oxyd <酸化物>, Karbol <石炭酸>, Azetylen <アセチレン> など) から全く新しい専門表現を大胆に作ることによって果てしなく語彙を増やし, 日々さらに多くの語彙を必要とした。-itis, -om, -ose で終る多くの病名を有する医学及びその従者なる薬産業も上記のような古典語を借りた名前の創造をますます多く作り出した。その際逸話めいた語創造がしばしばどの程度異常なまでに行なわれていたかを睡眠薬の名前 Veronal <ヴェロナール> が示している。この薬の発明者エミール・フィシャーは命名に関する討議を次のような言葉で結んだといわれている: "In einer halben Stunde geht mein Zug; ich habe schon in Verona Nachtquartier bestellt「半時間後に私の乗る汽車が出る。私はすでにヴェロナに宿を取っている」。それでヴェロナールという名前に意見がまとまったであろう。しかし, この語は別の方法で生まれたと, 他の人は言う。Schnulze は映画 (Film) や文学での文句や音楽のお涙ちょうだい物である。この語は1948年, 北西ドイツ放送の音楽部門のディレクター H. H. シュピッツが番組編成会議の際, 質の悪い流行歌を表わす語を探していた時, 出来上がった。彼は

Schmalz 〈いやに感傷的な曲〉と Schmachtfetzen 〈お涙ちょうだい物〉という語を口に出しかけた。そこから Schnulze が出た (Kluge-Mitzka, Etymolog. Wb.)。同じことは 流行語 Knüller 〈スクープ記事〉(音楽, オペラ, 映画) について, これは1920年あるジャーナリストによって作られた (ZfdWortf. 1961, 122) と言われている。その他イディッシュ語と見做されている。

19世紀の新しい自然科学観は Biologie 〈生物学〉(1802), Eiszeit 〈氷河期〉(1837), Darwinismus 〈進化論〉, Kampf ums Dasein 〈生存競争〉(英語1859年, ドイツ語的1870年以来), Abstammung 〈血統〉, Zuchtwahl 〈淘汰〉, Auslese 〈選択〉, Bazillus 〈バチルス〉(1885), Reinkultur 〈純粹培養〉, Hygiene 〈衛生〉(1879年以来標語), Welträtsel 〈世界の謎〉(1880年以来) のような語において現われた。これらの第一に自然科学の専門表現の多くは, 比喩的にも使用されて, 一般的に使われた。19世紀の技術精神は, 技術専門語の多くの語や言い回しが一般語の比喩や直喩になったことにおいても示されている。例えば auslösen 〈呼び起す〉(1882年以来), ausschalten 〈除外する〉, Spannung 〈緊張〉, Entspannung 〈ゆるみ〉, Belastungsprobe 〈試験〉, Entgleisung 〈過失〉, Dampf hinter etwas machen 〈せきたてる〉, mit Volldampf 〈全速力で〉, unter Hochdruck 〈あわただしく〉, Schwungkraft 〈活動力〉, toter Punkt 〈死点〉, Sicherheitsventil 〈安全弁〉など。

§ 29. ドイツ語語彙に及ぼした英語の影響

数世紀の間に多くの外国語がドイツ語の語彙に影響を与えたが, 英語 (das Englische) は初期においては借用源としてはたいした意義を持っていなかった。もちろん啓蒙主義時代におけるイギリスの精神生活やイギリスの文学への関与, 後にはイギリスの議会制度の知識はすでに18世紀に幾つかの英語をドイツ語にもたらした。ドイツ語における英語からの最も古い外来語は次のようなものである: Dogge 〈グレートデーン〉(16世紀), Elfe 〈妖精〉(ボードマー1742年), Humor 〈ユーモア〉(1760年), Spleen

〈偏屈〉(1770年頃), Bowle 〈ボール〉(1773年), boxen 〈拳闘する〉(1774年), Gentleman 〈紳士〉(1777年), Jobber 〈相場師〉(1778年, これに加えて Banknote 〈銀行券〉と Stock 〈元金〉のような他の商人語), Jockei 〈競馬騎手〉(1787年), Jury 〈審査委員会〉, fashionable 〈流行の〉(1890年, それからウィーン方言 fesch 〈粋な〉が出来た), Budget 〈予算〉(1812年), Grog 〈グログ〉(1821年), Sport 〈スポーツ〉(1828年) など。Ballade 〈バラッド〉と Sekt 〈シャンパン〉(シェクスピアによる) のような語も英語の影響にさかのぼる。翻訳借用語は例えば Blaustrumpf 〈閨秀作家〉, Gardinenpredigt 〈女房の小言〉, Heißsporn 〈熱血漢〉, Kronzeuge 〈主たる証人〉, Schwindler 〈詐欺師〉など。

19世紀にドイツ語と英語の借用関係は豊かになった。それどころか幾つかの分野(スポーツ, 商業, 流行など)ではその関係は今日まで続いている。船員言葉(Seemannssprache)はすでに早くから英語の専門語を借用した。例えば Boot 〈ボート〉, Kutter 〈短艇〉, Schoner 〈スクーナー〉, Lotse 〈水先案内人〉, loggen 〈測程器で船の速度を測る〉など(vgl. § 16)。Bunker 〈トーチカ〉, chartern 〈チャーターする〉, Gig 〈軽2輪馬車〉, Hulk 〈廃船〉, Messe 〈見本市〉, Pantry 〈(船の) 調膳室〉, Pier 〈埠頭〉, Steward 〈スチュワード〉, Tank 〈タンク〉, Topp 〈先端(マストの)〉, trimmen 〈釣り合いをとる〉などの語は比較的新しい。商工業(Handel und Gewerbe)は Partner 〈組合員〉, Export 〈輸出〉, Import 〈輸入〉, Bonds 〈証書〉, Clearing 〈清算〉, Scheck 〈小切手〉, Humbug 〈ペテン〉, Trust 〈企業合同〉, Konzern 〈コンツェルン〉などのような表現を受け入れた。英語起源のスポーツ用語は非常に数が多い, 特に19世紀の30年代以来ますます数をましてドイツ語に入り込んだ。かなり古い boxen 〈拳闘する〉と Jockei 〈競馬騎手〉に続いて競馬の様々な専門語が取り入れられた: Tattersall 〈馬市場〉, Start 〈スタート〉, Trainer 〈調教師〉, Totalisator 〈競馬賭け金表示金〉, Outsider 〈勝つ見込みのない選手〉(Außenseiter に翻訳されている), Derby 〈ダービー競馬〉, Finish 〈フィニッシュ〉, Handikap 〈ハンディキャップの

ついた競馬), Spurt <スパート>, Turf <競馬場>, Pace <ペース>, Kanter <並かけあし>, Favorit <人気馬>, Tip <予想>, Buchmacher <(競馬の) 賭け屋> (engl. bookmaker の翻訳借用語)。他のスポーツ種目は Tennis <テニス>, Sportsmann <スポーツマン>, Match <勝負>, Champion <チャンピオン>, Rekord <レコード>, Fußball <フットボール> (engl. football の翻訳借用語), Kriquet <クリケット>, Hockey <ホッケー>, Polo <ポロ>, Golf <ゴルフ>, Bobsleigh <ボブスレー> などの表現をもたらした。メニューもまた英語によってその前までほとんどもっぱらフランス語だったよそおいの若干の変化をこうむる (vgl. § 23) : Pudding <プディング>, Beefsteak <ビフテキ>, Roast-beef <ロースト・ビーフ>, Rumpsteak <牛の臀部の焼肉>, Toast <トースト>, Keks <ビスケット>, Drink <アルコール性混合飲料> など。それまで同じようにフランス語の当然の分野であったモード (Mode) は特に紳士服の分野で英語に譲歩しなければならなかった: Frack <燕尾服> (すでに1774年にゲーテに現われる。engl. frock から), Havelock <ケープ・コート>, Ulster <アルスター外套>, Raglan <ラグラン型外套>, Smoking <タキシード>, Cutaway <モーニングコート>, Plaid <格子縞の肩掛け>, Schal <ショール>, Cape <ケープ>, Boxkalf <ボックス皮>, Moleskin <ビロードの組織を用いた一種の厚地綿織物>, Schirting <ワイシャツ地>, Twist <綿糸> など。社会生活もしばしば英語の形態を取り入れた: Flirt <ふざけ>, flirten <ふざける> (1890年頃), Komfort <快適>, Weekend <週末> (Wochenend に翻訳された) など。サーカス (Zirkus) と見世物 (Variété) は英語の語で人の注意を惹いた (Clown <道化師>, Artist <曲芸師>, Attraktion <アトラクション>, Manager <支配人>, Sketch <寸劇>, Exzentrik <道化曲芸>, Girl <踊り子> など)。さらにその上, ドイツのホテルやファッション店に英語名を付けるだけでなく, ドイツの子供に英語の名を付けることも行なわれた (Harry, Ellen, Fanny, Liddy)。いくつかの比較的新しい英語表現はアメリカから入った。例えば, Dumping <ダンピング>, smart <スマートな>, Knick-

erbocker <ニッカボッカ>, Jazz <ジャズ> など (さらに § 32を見よ)

英語の借用語は, ゲルマンにおけるローマの借用語同様 (vgl. § 11), おもに物質 (materiell) 生活の事物を表わしている。

§ 30. 1848年の革命と社会主義

1848年の革命の年 (Revolutionsjahr 1848) が符丁語の中に生き続けたように, tolles Jahr <狂った年> はかなりの数の新造語をもたらし, 政治及び議会の語彙 (vgl. § 26) をさらに形成し, それを一般語に移した。Rechtsstaat <法治国>, Polizeistaat <警察国家>, Junkertum <ユンカー階級>, gesinnungstüchtig <志操堅固な>, Kamarilla <君側の奸党>, Kastengeist <カースト的排他心>, Finsterling <反啓蒙主義者>, Preßfreiheit <出版の自由>, Krawall <小規模の一撥> (1830) などの表現や標語はその前のメッテルニヒの反動時代に由来するが, 今や特に次のような符丁語は広範囲な意味を得た (それらの一部すでに革命に先立つ文学運動の中で作られた): Fortschritt <進歩>, Freisein <自由であること>, freisinnig <自由思想の>, Kladderadatsch <破壊>, Putsch <暴動> (元々はスイス方言), Attentäter <暗殺者>, Errungenschaft <成果>, niederkartätschen <打ち倒す>, Rechtboden <法の基盤>, Wucher <暴利> (1847年以来標語として), maßregeln <処罰する>, großdeutsch <大ドイツの>, kleindeutsch <小ドイツの>, ruhiger Bürger <静かな市民>, Säbelregiment <軍政>, Brandredner <アジ演説家>, Bundesstatt <連邦機関>, Überzeugungstreue <信念に忠実なこと>, Richtung <方針 (党の)>, Streber <野心家 (政治の)> 1855年), Wühler <扇動家> など。Biedermeier <ビーダー様式> という表現は1855年以後に現われた。

社会主義 (Sozialismus) (この語は30年代の末以来フランスから。Sozialdemokrat <社会民主主義者> は1850年頃) は Kommunist <共産主義者> (1841年)。Kommunismus <共産主義> (1841年), Proletariat <無産階級>, Proletarier <無産者>, Bourgeois <ブルジョア> (1840年

頃), Bourgeoisie <ブルジョアジー> (1847年), Massen <大衆>, arbeitende Klassen <労働階級>, weiße Sklaven <白い奴隷>, Klassenkampf <階級闘争> (カール・マルクス1847年), Invalid der Arbeit <労災者>, Streik <ストライキ> (英語から1854年頃, 加えて Generalstreik <ゼネスト> 1878年), Internationale <インターナショナル>, Konsumverein <消費組合>, Arbeiterbataillone <労働者大隊>, Aussperrung <ロック・アウト> (engl. lockout の直訳借用語), Dividendenschlucker <株主> (1861年), soziale Frage <社会問題>, Klassenstaat <階級国家>, Recht auf Arbeit <労働権>, Völkerfrühling <民族の目覚め>, Völkerversöhnung <民族の和解>, Zukunftsstaat <未来国家>, Solidarität <団結>, Gewerkschaft <労働組合> (鉱業から政治的には1868年から), Genosse <同志> (1879年以来呼びかけの形式として, フランツ・メーリング), Boykott <ボイコット> (1880年, 英語から), Streikbrecher <スト破り>, Umsturz <革命>, Umstürzer <革命家>, fortwursteln <どうかこうかやってゆく> (1895年頃), Arbeitswilliger <スト不参加者> (1897年) などのような符丁語をもたらした。19世紀の後半世紀のその他の政治符丁語には次のようなものがある: Zivilcourage <市民の勇気> (ビスマルク1864年), Byzantinismus <ビザンチンの精神> (1866年), Militarismus <軍国主義> (1869), Nihilist <無政府主義者> (1870年頃ロシア語から), Liebesgabe <献金> (1870年), Chauvinismus <狂信的国粹主義> (1870年), ultramontan <教皇至上権論の> (1870年), Kulturkampf <文化闘争> (1873年), Agrarier <地主党员> (1874年), Gründer <創立者> (1872年), Krach <恐慌> (1873年), Antisemit <ユダヤ人排斥主義者> (1879年), alldeutsch <全ドイツ主義の>, Scharfmacher <扇動家> (1895年), Ostelbien <エルベ川の東の地方> (1897年), Kuhhandel <妥協> (1877年) など。

§ 31. 青年ドイツ派から現代までの芸術と文学の言語

19世紀の文学運動は夥しい標語の中に反映されている。青年ドイツ派

(das Junge Deutschland) (1833年) は例えば次のような表現を用いた: Charakter! Leben! Individuum! 〈性格/ 生/ 個人/〉 (1832年頃), Zerrissenheit 〈傷心〉 (H. ハイネ), Ton 〈調子〉, Schule 〈学派〉, Manier 〈作風〉, Kunstkenner 〈芸術通〉, taufisch 〈生き生きとした〉 (ヴィーンバルク 1834年), ästhetische Teeabende 〈美的なお茶の会〉, zeitgemäß 〈時流にかなった〉, Schöngeist 〈文芸家〉, europamüde 〈ヨーロッパに飽きた〉 (1828年), Stimmung 〈気分〉, Hinterwäldler 〈いなかっぺえ〉 (1833年) など。nervös 〈神経質な〉 はほぼ1830年以来今日の意味を得た。それ自体比較的古い語 Pessimismus 〈厭世主義〉 はショーペンハウアーによって一般に用いられるようになった。Epigonen 〈亜流〉 という名称は特にインマーマンの同名の小説 (1836年) によって紹介された。写実主義 (Realismus) は realistische Kunst 〈写実的芸術〉 や Wirklichkeitskunst 〈現実芸術〉 のような表現を広めた。フランスから Bohème 〈自由放縦な文士〉 (1851年フランス語, 186年以來ドイツ語), Milieu 〈背景〉 (70年以來, テーマとゾラに倣って) などの文学上の外来語が入って来た。グスタフ・フライタークは1853年に無定見なジャーナリストを表わす Schmock という語を作った (schlesisches Wörterbuch)。

80年代来, 自然主義的な芸術傾向 (naturalistische Kunstrichtung) (ゾラにおける Naturalismus 1876年, ドイツ語1885年以來) は Suggestion 〈暗示〉, suggestiv 〈暗示的な〉, hochmodern 〈最新の〉, die Moderne 〈モダニズム〉, Dekadenz 〈デカダン主義〉, Symbolismus 〈象徴主義〉 (1885年), Fin de Siècle 〈世紀末〉, Heimatkunst 〈郷土芸術〉 (F. リーンハルト 1896年), Jugendstil 〈ユーゲントシュティール〉 (1897年), Sezession 〈セセッション式〉, Impressionismus 〈印象主義〉, Schlager 〈流行歌〉, Kitsch 〈お涙頂だい〉 (1881), Kabarett 〈寄席〉, Brettel 〈寄席〉, Überbrettel 〈寄席〉, Couplet 〈時事小唄〉, Chanson 〈シャンソン〉 など。これらの多くの表現形式が示しているように, この運動の芸術上の及び言語上の出発点はたいていフランスであった。語や用法の強力な造語者として Nietzsche があらわれた。Übermensch 〈超人〉 (こ

の語自体は古い。例えば Goethe の「ファウスト」にあらわれる), Herrenmensch <君主的人間>, Herdentier <群居動物>, Bildungsphilister <教養ある俗物>, Umwertung aller Werte <一切価値の転換>, blonde Bestie <ブロンドの野獣> などのような表現は彼に帰する。Richard Wagner は (§ 27 参照) 彼の作品をめぐる同時代人の論争から Leitmotiv <ライトモチーフ>, Musikdrama <音楽劇>, Zukunftsmusik <未来音楽> という符丁語を受け入れた。1900年頃の文学の流行語は次のようなものであった: auslösen <呼び起こす>, sich auswirken <作用を及ぼす>, aufzeigen <示す>, entfesselt <解放された>, kolossal <巨大な>, sozial <社会の>, kosmisch <宇宙の>, Gebärde <態度>, Geste <身ぶり>, Lebensgefühl <生の感情>, Zeitgeist <時代精神>, Sensation <センセーション>, Subjektivität <主観性> など, 及び-ismus で終るおびただしい外来語の造語。

世紀末及び20世紀初頭の文学——これに対して表現主義 (Expressionismus) という表現が流行した——は大いなる的確性と力のこもった簡潔性の語を好んだ (Klopstock に似ている § 25 参照)。この時代の文学的符丁語は例えば Ausdruckskunst <表現芸術>, Ichkultur <自我芸術>, Plakatstil <広告様式>, Dadaismus <ダダイズム>, Futurismus <未来派>, Kubismus <立体派> などである。表現主義文学において steil <けわしい> (これから sich aufsteilen), ballen <丸める> (例えば geballte Finsternis <まっ暗闇>), Ballung <密集>, wuchten <力を入れて持ち上げる>, Wucht <力>, schreien <叫ぶ>, Schrei <叫び>, jäh <急の>, dumpf <陰にこもった> (若い Goethe の場合のように), Flamme <炎>, Verzückung <法悦>, verzückt <うっとりした>, besessen <憑かれた>, Dämon <超自然力>, dämonisch <超自然的な力をそなえた>, Aufbruch <破り開くこと>, Sturm <嵐>, Ekstase <恍惚>, ekstatisch <恍惚とした>, Dynamik <原動力>, dynamisch <動的な> などの表現が好まれた。技術的に正確な記述をする写実主義や自然主義の文体が形容詞を好んだが、表現主義の芸術傾向は好んで、特に非合成の語を (例えば, inseln

〈自分の島を作る〉, schluchten 〈大きな町を通り走る〉, baumen 〈木のように歩く〉 など) 好んだ。一方合成された語は好んで分離せずに用いられた (例えば Ausbleibt Antwort 〈答えが出ない〉)。

次の時代の文学は俗受けをねらった不自然な語を断念し、造形美術の新即物主義 (Neue Sachlichkeit) (1925) への願望に似て、短い素朴な語によって、特に名詞によって、完全な文体的効果を得ようと努めた。その際、特に物語において、地方がったかあるいは古い時代から出ている語が好んで選ばれた。

§ 32. 最近の語彙

1914年から18年までの世界戦争とそれに続く政治的、経済的、精神的生
活の変革はドイツ語の語彙に跡を残さずにはすまされなかった。世界戦争
に先立つ時代は, Imperialismus 〈帝国主義〉, Nationalismus 〈国家主
義〉 (両方とも語自体は古い, しかし世紀末以来の符丁語), Expansions-
politik 〈拡張政策〉, Hurrapatriotismus 〈盲目的愛国主義〉 (1900年頃),
Rüstungsfieber 〈軍備熱〉 (1913), Einkreisung 〈討鎖〉 のような政治的
符丁語や戦闘語によって特色づけられている。世界戦争自体は言語の面で
まず外来語に対する激しい戦いをもたらした, それはもちろん外見上姿を
消したのもまれではなく, またその戦いの成果はあらゆる分野において長
続きしなかった。なぜならば, 流行, スポーツ, メニューなどの, 戦争の
間タブーとなっていた夥しい外来語は戦争が終るとじきに使われるようにな
ったからである。同じように外来語による飲食店や店の看板も再びあら
われた。幾多の分野において外来語, 特に英語・アメリカ語 (Jazzband
〈ジャズバンド〉, Foxtrott 〈フォックストロットダンス〉, Couch 〈ソフ
ァベッド〉) からの勢いが1918年以後増した。これに対立して, 行政, 立
法における計画的なドイツ語化によって以前は不可欠とされていた多くの
外来語が排除された。

軍隊用語の語彙は最後の2つの戦争によって広くもたらされた。古い基
盤の上に, 第一次世界大戦における就中陣地戦の表現 (それ自体たいてい

古い、例えば Schützengraben 〈塹壕〉, Drahtverhau 〈鉄条網〉, Sappe 〈対壕〉, Unterstand 〈待避壕〉 など。また部分的に新しく作られもした例えば Bunker 〈防空壕〉, Trommelfeuer 〈連続砲火〉 など) 及び野戦航空の表現 (Flieger 〈飛行士〉, Flugzeug 〈飛行機〉, Bomber 〈爆撃機〉 など) が加わった。1939年から45年までの戦争は機械化されかつ装甲された軍隊の領域で、就中空中戦及びそれと関わる民間防空の領域で語彙を拡大した (Luftschutzkeller 〈防空地下室〉, Sirene 〈サイレン〉, Fliegenalarm 〈空襲警報〉, entrümpeln 〈がらくたを取りのける〉, verdunkeln 〈燈火管制する〉, entdunkeln 〈燈火管制を解除する〉, warnen 〈警報を出す〉, entwarnen 〈警報を解除する〉)。兵隊語もまた広く知られるようになった、しかし戦況報告で好んで使われた (Marmelade 〈マーマレード〉 のかわりに Heldenfett, Armeebutter, Kommißbrotschminke など) 夥しい諸譚表現は前戦兵士 (故郷では Feldgraue 〈緑灰色〉 と呼ばれた) の現実の表現法とかならずしも一致していない。

ドイツが戦中戦後に体験した経済的苦難とショックは夥しい新語の中に反映している: Aushungerung 〈飢餓〉, (Hunger-) Blockade 〈(食糧) 封鎖〉, durchhalten 〈持ちこたえる〉, Brotkarte 〈パン配給券〉 (1915), anstehen 〈(食糧を求めて) 並んで待つ〉, Schlange stehen 〈長蛇の列を作る〉, Butterpolonäse 〈バターを求めて行きまわること〉, hamstern 〈買いだめをする〉, Hamsterer 〈買いだめをする人〉, Schleichhandel 〈やみ商売〉, Schwarzschlachtung 〈密殺〉, hinterrum kaufen 〈やみで買う〉, schieben 〈やみ取引きする〉, Schiebung 〈やみ商売〉, Schieber 〈やみ屋〉, strecken 〈薄める〉, Streckmittel 〈薄める材料〉, Ersatz 〈代用品〉, Kunsthonig 〈人造はちみつ〉, Planwirtschaft 〈計画経済〉, Rationierung 〈配給〉, Höchstpreise 〈最高価格〉, Kriegsgewinnler 〈戦争成金〉, Schwerarbeiter 〈重労働者〉, Preisabbau 〈値下げ〉 など。Devisen 〈外国為替〉, Valuta 〈為替相場〉, Index 〈指数〉, Inflation 〈インフレ〉, Dumping 〈ダンピング〉, Kontingent 〈配当〉, Hortung 〈死蔵〉, Golddeckung 〈正貨準備〉, Preisstopp 〈価格停止〉, sta-

bilisierung〈安定化〉などのような純粋な経済用語でさえ一般的に使われるようになった。

政治の変革もまた夥しい新語をひろめた（あるいは古い専門語を一般的に使わしめた）: Selbstbestimmungsrecht〈人民自決権〉, Reparationen〈賠償〉, Nationalversammlung〈国民議会〉, Verhältniswahl〈比例代表制〉, Volksentscheid〈国民投票〉(1919, Referendumの代わりに), Sozialisierung〈国有化〉, Pazifismus〈平和主義〉, Volksbeauftragter〈人民委員〉, Aktionsausschuß〈実行委員会〉など。Bolschewismus〈ボルシェヴィズム〉, Bolschewik〈ボルシェヴィキ〉(これと並んで非ロシア語 Bolschewist), Sowjet〈ソヴィエト〉, Komintern〈コミンテルン〉のような語はロシア語に由来している。Arbeiterrat〈労働委員会〉や Soldatenrat〈軍事委員会〉, Räteregierung〈ソヴィエト政府〉のような語における Rat はロシア語の Sowjet の意味を受け入れている。

1922年頃, イタリアから Faschismus〈ファシズム〉と Faschist〈ファシスト〉(イタリアではほぼ1915年以来 fascio〈戦闘同盟〉)。反対語として Antifaschist が作られた。Nationalsozialismus〈国家社会主義〉と Nationalsozialist〈国家社会主義者〉は1919年にはやり出した(nationalsozial は, もちろん別の意味ですでに1896年 Friedrich Naumannによって使用された), これに対する短縮形は Nazi, Nazismus, nazistisch である。この語は独裁政治における政治宣伝の道具となる。この統制された言葉は全体主義的制度の闘争手段である。国家社会主義は Ausrichtung〈整頓〉, Einsatz〈注入〉, Bewegung〈運動〉(多くの合成, 派生を伴って) などをはやらせた。これらは1945年以後共産主義において再現される。世界観, つまり政治的イデオロギー間の闘争において就中意味が問題となる。従って, 今や Freiheit〈自由〉, Friede〈平和〉, Demokratie〈デモクラシー〉, Koexistenz〈共存〉などの語はそのような方向で現代ドイツ語の辞書の中で説明されている。Fanatismus〈狂信〉, fanatisch〈狂信的な〉は消極的な意味から積極的な意味に引き上げられ

た。政治的な語に次のような語があった: Ahnenpaß <素姓証明書>, Arbeitsdienst <労働奉仕>, arteigen <特有の>, entartet <退化した>, Gau <地区>, Gleichschaltung <統合> など。Bundesversammlung <連邦議会総会>, Volkskammer <人民議会>, Grenzschutz <国境警備>, demokratische Volkspolizei <民主人民警察>, Luftbrücke <空のかけ橋>, Depublikflucht <東ドイツからの逃亡> などは政治語である。新しい語 Einzelbauer <単独農家> は Genossenschaftsbauern <組合農家>, さらには Kollektivbauern <集合農家> に比べて価値が低い。財産は他人の賃労働の資本主義的私物化であり得、他方において財産形成の手段によって高い政治的目的であり得る。客観主義はいみ嫌われるか、高く評価され得る。今日のドイツの分割は言語の分化をもたらし、語とその意味における分割になりかけている。

体育とスポーツのみごとな発達、それらの語彙がすべての人々に知られるようになったということである。例えばテニスの際の英語による得点の計算にまで及んでいた、スポーツ用語の古い夥しい外来語は、計画的なドイツ語の結果として強く後退した（例えば, Racket <ラケット> の代わりに Schläger, Service <サービス> の代わりに Aufschlag など。また時々 Ski に対する Schi <スキー>, crawl に対する kraulen <クロールで泳ぐ> のような借用語の定着も）。しばしば専門領域外でも用語のスポーツ語化を確かめることが出来る。例えば fair <フェアな>, Rekord <記録>, Sport <スポーツ> (例えば Denksport <謎とき>), starten <スタートを切る>, Start <スタート>, spurten <スパートをかける>, stoppen <ストップする>, Training <トレーニング>, Außenseiter <アウトサイダー>, Schrittmacher <ペースメーカー>, in Form sein <調子がよい> のようなスポーツ用語は一般語の中で比喩的に使用される時。

技術の語彙はさらに発達した、特に電力供給の分野で (Dynamo <発電機> 1882, Kraftwerk <発電所>, Umformer <変換機>, Hochspannung <高圧> など) 及び交通の分野で (Automobil <自動車> 1893, Kraft-

wagen 〈自動車〉 1900, Motorrad 〈オートバイ〉, tanken 〈給油する〉, parken 〈駐車する〉, Flugzeug 〈飛行機〉, Eindecker 〈単葉機〉, Doppeldecker 〈複葉機〉 など)。全く新しい語野がタイプライターの発明によって生じた (Anschlag 〈タッチ〉, Taste 〈キー〉, Farbband 〈タイプライターリボン〉, Durchschlag 〈タイプ複写〉, tippen 〈タイプする〉 など)。化学は夥しい新しい原料を示した (Kunstseide 〈人絹〉, Glanzstoff 〈人絹〉, Zellwolle 〈スフ〉, 一部は不可解な新造語も: Vistra 〈ビストラ〉, Buna 〈ブーナ合成ゴム〉, Bakelit 〈ベークライト〉 など)。

すでに1839年に発明された写真にさかのぼる映画は19世紀末に出来, まず lebende Bilder 〈生画〉(1896) や Kinematograph 〈映写機〉 (1896, まもなく Kino あるいは通俗的に Kintopp と縮められた) のような名とともに公に知られた。今日これは, 就中 Film 〈映画〉 (filmen 〈映画にする〉, filmisch 〈映画の〉, Verfilmung 〈映画化〉, Filmkunst 〈映画芸術〉, Filmtheater 〈映画館〉, Stummfilm 〈サイレント映画〉, Tonfilm 〈トーキー〉), Licht 〈光〉 (Lichtspiel 〈映画〉), drehen 〈クランクする〉 (Drehbuch 〈シナリオ〉) などの表現のまわりに群なし, これと並んで若干の外来語を示す (Diva 〈スター〉, Star 〈スター〉, Prominenter 〈名士〉, Komparse 〈エキストラ〉, Gag 〈ギャグ〉) 広範囲な語彙を示している。最後に1924年にドイツに導入された Rundfunk 〈ラジオ〉は全く新しい専門語彙を発展させた (まもなく一般には最初に使われた Radiotelegraphie ないし Radiotelephonie の縮小形外来語 Radio が)。最後にテレビの専門語彙を発達させた。例えば Fernseh-Interview 〈テレビ対談〉。最初は外来起源の技術専門語が普通であった, 例えば Antenne 〈アンテナ〉, Detektor 〈検波器〉, Fading 〈フェーディング〉, Mikrophon 〈マイクロホン〉 など。しかしまもなく当を得たドイツ語の新造語が成立した, それは今日一般に採り入れられている, 例えば Empfang 〈受信〉, Empfänger 〈受信機〉, Senden 〈送信〉, Sender 〈送信機〉, Sendung 〈送信〉, erden 〈接地させる〉, Welle (nlänge) 〈波 (長)〉, Röhre 〈管〉, Lautsprecher 〈拡声器〉, Verstärker 〈増幅器〉, Rückkopplung

〈フィードバック〉, *Ansager* 〈アナウンサー〉, *Hörspiel* 〈ラジオドラマ〉, *Nachrichtendienst* 〈ニュース放送〉, *Auf Wiederhören* 〈ではまた〉。例えば *Feature* 〈ドキュメンタル特集番組〉, *Musical* 〈ミュージカル〉, *Quiz* 〈クイズ〉 (おそらく *inquisitive* 〈質問好きの〉 から)。概して, *Bestseller* 〈ベストセラー〉, *Lobbyist* 〈ロビイスト〉, *Slogan* 〈スローガン〉, *Teenager* 〈ティーンエージャー〉, *Party* 〈パーティ〉, *Trend* 〈傾向〉, *Tendenz* 〈傾向〉, *Slang* 〈スラング〉, *Jeep* 〈ジープ〉, *Come-back* 〈カムバック〉, *Team* 〈チーム〉, *fit* 〈コンディションのよい〉, *mixen* 〈混ぜる〉, *Manager (krankheit)* 〈マネージャー (病)〉, *Job* 〈副業〉, *Make-up* 〈メイクアップ〉, *Hobby* 〈趣味〉, *Camping* 〈キャンピング〉, *Festival* 〈フェスティヴァル〉, *Fan* 〈ファン〉, *Bestseller* 〈ベストセラー〉, *Twist* 〈ツイスト〉, *Minirock* 〈ミニスカート〉 などのようなかなり多くの新しい外来語はアメリカに由来する。

§ 33. 未来への展望

事象とともにそれに関する語も衰微する。これを示しているのは、たいまつから鉄あるいは錫製のなたね油ランプを経て電球に至る照明方法の道程、あるいは政治上の革命に至るまでの変化である。事象、概念、語の価値の上昇あるいは下降、新造と消失は未来においても絶えず変化しながらそして世代から世代への世界像の常に新しい解釈において語彙を保持する。こういう発達の過程について確実な予言はほとんど出来ないとはいえひょっとして2・3の発達の進路を暗示することができるかもしれない。それはドイツ語語彙の発達過程のためにおそらく決定的なものであろう。

原創造による語彙の拡大は非常に限られた範囲であられるであろう。とにかく長い合成語の最初の文字あるいは綴りからなる今日好まれている略語は新しい語幹を提供することであろう。例えば, *Talmi* = *Tallois mior* 〈タルミ〉, *Flak* = *Fliegerabwehrkanone* 〈高射砲〉, *Krad* = *Krafttrad* 〈オートバイ〉 など今日すでになされているように。固有名詞からも将来全く新しい語幹が成立するであろう。かつての *röntgen* 〈レントゲ

ン写真をとる〉や *einwecken* 〈びん詰めにする〉のように。けれども、新しい語が必要になった時のカバーの普通の方法は、ドイツ語の歴史的に明らかになっている過去数百年におけるように、すでに存在している語幹からの派生語や合成語の形成によるものであろう。この方法は、最近におけるそのような夥しい新造語が証明しているように、まさにドイツにおいてなお豊かな可能性を残している。こういう新造語を計画的に規制することが種々に試みられて来た。言語の発達へのそのような意図的な干渉が可能であることを、例えば *Auskunftei* 〈興信所〉なる語が示している。この語はゲルマニストの H. v. Pfister によって1889年に *Kauffahrtei* 〈海外貿易〉, *Hausvogtei* 〈陸軍監獄〉の例に倣って作られた、またこの語は今日一般に侵透しているのみならず、さらに類似の造語を作っている (*Kartei* 〈カード式索引〉, *Detektei* 〈探偵事務所〉など)。そのような経験に基づいて、近代特に学問、経済、技術における専門語彙の拡大のために、新語の創造のためのしっかりした形成規則が提案された、それは一定の語尾、前綴か後綴がしっかりと一定の意味のグループに関係づけることによってである。例えば、ある行為を職業的に行使する人は常に語尾 *-ner* によって特色づけられねばならない (*Bankner* 〈銀行業者〉, *Drogner* 〈薬屋〉, *Kaßner* 〈会計係〉, *Auslagner* 〈飾り付け屋〉), 一方語尾 *-el* は道具あるいは材料をあらわす (*Härtel* 〈コンクリート〉, *Wendel* 〈らせん〉, *Schreibel* 〈文房具〉), そのような語創造のしばしば強引な新造語は一般的な言語感情を時々曲げているとはいえ、専門語 (部分的には一般語に) におけるそのような計画的な新造語がすでに受け入れられていることは確認されねばならない。例えば, *normen* 〈規格化する〉, *Normung* 〈規格化〉, *verkräften* 〈自分の力で片付ける〉, *Regler* 〈調整機〉 (*Regulator* の代わり), *lacken* 〈マニキュアする〉 (*lackieren*)。既存の語に対する反対語の創造によっても語彙は今日時々計画的に拡大される, 例えば *erblinden* 〈失明する〉に対する *ertauben* 〈つんぼになる〉, *verbauern* 〈いなか者くさくなる〉に対する *verstädtern* 〈都会ふうにする〉など。計画的な新語創造のこのような方法が将来においてもなされる

ことは想像され得る。

ドイツ語の語彙に今日なお特有である地方的特色は疑いもなく後退している。経済と交通、新聞とラジオが言語の統一をますます強く押し進めるからである。しかし、いぜんとして地方的な特別語が一般語に移っている（例えば、低地ドイツ語 *stur* 〈がんこな〉, *Trecker* 〈牽引車〉, 上バイエルン方言 *rodeln* 〈ローデルで滑降する〉, スイス方言 *Stumpen* 〈フェルト帽〉）。古い言語財の復活による語彙の増加の方がまれである（経済用語としての *horten* 〈退蔵する〉, スポーツにおける *Kür* 〈自由競技〉, 軍隊用語での *tarnen* 〈偽装する〉）。

外来語の借用はヨーロッパ諸民族の密接な政治的、経済的、文化的関係において引きつづき重要な役割をはたすであろう。新しい発見や学問や生活形態などは外国から入ってまずその外国語の表示で我々に知られるようになるであろう。これらの外来語を計画的にドイツ語化することが可能であることを、たくさんの例で証明されて来た。数百年前に刊行された外来語辞典と今日の外来語辞典を比較してみれば、ドイツ語における外来語は後退していることがはっきりわかる。なくてもすむ外来語のドイツ語化の最も当を得た方法は（*Film*, *filmen*, *kraulen* の場合のように、借用語への移植が可能でない限り）どうみても翻訳借用語の形成によっている。なぜならば、翻訳借用語は渦渡期において代用され外来語とその意味を垣間見せているからである。再び、*Truhen* 〈長持ち〉が作られる。今では *Musiktruhen* 〈ステレオ〉や *Tiefkühltruhen* 〈ディープリーズ 冷蔵庫〉を提供するのは工業である。部屋や路上の照明のために *Ampeln* 〈ランプ〉を提供し、あげくの果てに *Atommeiler* を作る。これについて炭焼き人は彼らの炭焼きがまの前で何も気づかなかった。このような方法は将来においても確実に成果を収めて語創造や語選択のさいになされるであろう。

新しく登場する概念にふさわしい表現様式を創造し、それにより、民族の内部での意志の疎通と義務づけの重要な手段としてその課題を満たすことは将来もドイツ語にはなくなりはないであろう。

効果拔群の新しい語は容易にすたれる。gammeln 〈ふしだらな生活を送る〉や Gammler 〈生活のくずれた若者〉についてはもはやしばしばは聞かれないし書かれない。その際まだ Gammler はちゃんと存在している。あらゆる階級において新しい語が知られている、失職から解放される Job 〈副業〉のように。上流の人々は Job を持っている。それらは Manager 〈支配人〉である。彼らは Lobby 〈ロビー〉や Hobby 〈道楽〉を知っていて、経済において何が Trend 〈傾向〉であるかを知っている。しかし、その語がドイツ語の trennen 〈分ける〉と元々関係があることを知らない。

ドイツ西部とアングロサクソンの言語世界との出会い、ドイツ東部とソ連との出会いはそのつどかなりの借用語を、さらに語内容の借用を現存の語財へもたらした： attraktiv 〈魅力のある〉, kontrollieren 〈統制する〉, weltweit 〈世界的な〉, bügelfrei 〈ノーアイロンの〉, Kolchosbauer 〈コルホーズ農家〉, volkseigen 〈人民所有の〉, Plansoll 〈割り当て額〉, Brigade 〈作業班〉など。略語の数もおびただしい。CDU/CSU 〈ドイツキリスト教民主同盟/キリスト教社会主義同盟〉, SPD 〈ドイツ社会民主党〉, FDP 〈自由民主党〉, HO 〈国営百貨店〉。特に自然科学と技術は絶えず新しい語を作り出す。それらはこれらの領域の理論家や実務家によって伝統的にあるいは外来の言語財から作られるかあるいは解釈される。またそれらはしばしば数学、物理学、化学の記号語と関係が深い。新しい工業社会のこの言語創造に関係なく、現存の語彙の意味、語内容は絶え間ない変化、意味範囲の制限、拡大(社会的、消極的、反語的、積極的)、価値改訂、完全な消滅に至るまでの頻度、言語の流行、さらに政治的な言語統制の中にさえ含まれている。これらすべては文語及び口語の中に、気まぐれでそしてひょうきんな日常会話の中に含まれている、標準語ではこれまでまた今日も詩人、特に言葉の芸術家が発言権を持っている。

あ と が き

本稿は Alfred Schirmer/Walther Mitzka の Deutsche Wortkunde, Kulturgeschichte des deutschen Wortschatzes 1969⁶ (Sammlung Götschen Bd. 929) の全訳である。第3版までは A. Schirmer の単独執筆であるが、第4版から W. Mitzka の手が加えられている。A. Schirmer は語彙研究者として Kluge/Götze, Etymologisches Wörterbuch, Trübners Deutsches Wörterbuch, Paul, Deutsches Wörterbuch の改訂, あるいは Wörterbuch der deutschen Kaufmannssprache の編纂などを行っている。一方, W. Mitzka は長らくマールブルク大学の教授として, 方言研究所を主宰し, 方言学においていちじるしい業績を残している。

本稿は副題の示す如く, 語彙論を文化史の一分野として捉え, ドイツ語の語彙の変遷を文化の発展と関連づけ歴史的に跡づけようところみるものである。事象の生成, 消滅と共に, それに関する語も生成, 消滅するとしている。